

IS世界のガイスター

赤バンブル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて勇者エクスカイザーと戦った宇宙海賊ガイスターの首領ダイノガイストは太陽に堕ちて自らの命を絶った。しかし、世界最強の弟として生まれ変わった彼は、とある事件をきっかけに再び記憶を呼び覚ます。

*黄金勇者ゴルドラントにての追加予定シリーズ

- ・黄金勇者ゴルドラン
- ・勇者指令ダグオン
- ・勇者王ガオガイガー
- ・勇者警察ジェイデッカー

目次

設定集

これまでの登場人物（7月11日更新） | 1

超神マスターフォーエクスルーツキャラ設定集 | 12

番外編「もしもシリーズ」

もしも箒が妊娠したら | 16

もしも箒が妊娠したら | パート2 | 24

もしもビーストウォーズの皆さんと会ったら | 31

もしもブロリーとコラボしたら | 38

超神マスターフォーエクスルーツ

戦いの再開 | 47

本編

復活 | 66

空白 | 84

まいどー宇宙商人 | 95

土下座 | 105

デュノア社襲撃作戦 | 116

復活 宇宙海賊ガイスター | 126

レポート | 142

黄金勇者ゴルドランルート

目覚めよ！黄金勇者！ | 147

来ちゃった！宇宙海賊ガイスター！ | 174

ボスの寄り道 | 188

その名はアドベンジャー | 207

新しい仲間？ | 233

ワルターの先回り作戦	247
争奪！ライオンを追え！	260
登場！空の騎士！	278
元宇宙皇帝とボスの一日	294
篠ノ之家	304
再会親子とスパイ勇者	316
ダブル大ピンチ！	326
発射！グレートビッグキャノン！！	341
白銀合体！シルバリオン！！	353
ブレイブ・ポリス・プロジェクト	367

設定集

これまでの登場人物（7月11日更新）

宇宙海賊ガイスター

「勇者エクスカイザー」で初登場。首領ダイノガイスタが死亡後、全メンバーが宇宙警察カイザーズに全員逮捕されるが逃亡。別世界の地球にてダイノガイストと合流後、完全な復活を遂げる。現在は世界各国のISを強奪している最中、新たな宝「レジェンドラの財宝」を狙いパワーストーンに目を付ける。

ダイノガイスト／織斑二夏

「勇者エクスカイザー」の敵組織「宇宙海賊ガイスター」の首領であると同時に「インフィニット・ストラトス」の主人公。「勇者エクスカイザー」の最終回での最終決戦においてグレートエクスカイザーに敗北後、太陽に飛び込んで高笑いをしながら自決したが後に人間として生まれ変わっていた。当初は記憶を失ったままだったが同様に人間になっていたドライアスの実験によりロボットの体と共に記憶を取り戻す。

記憶が戻る以前は原作寄りの性格だったが記憶が蘇った後はダイノガイストとしての性格が反映している。幼馴染である箒を「宝」と認識しており、ほぼパートナー（嫁？）としている（トレイダーからは夫婦と勘違いされている）。

自分の姉である千冬とその友人篠ノ之束によって引き起こされた女尊男卑の社会を壊すため、全世界のISを強奪することを目的としている。箒に対してはかなり甘く、肉体関係にまで発展している（姉である束は承認している）。人間に対しては何の情も持っていないように振舞っているが実際はむやみに殺そうとはしていない。宿敵エクスカイザーへの再戦を誓っている。

「黄金勇者ゴルドランルート」においてジェットガイストこと箒は現在嫁扱いでお置きしようとするDSな一面があるが箒がむしろ

喜ぶだけのため意味がない。夜の生活に関しては箒の口からいろいろプレイをしているようだ。篠ノ之神社で入手した魔除けの石からドリルシルバーを復活させてゴルドランたちへのスパイとして潜入させる。

篠ノ之箒／ジェットガイスト

「インフィニット・ストラトス」のメインヒロイン。原作とは違い、一夏と別れる前に交通事故で下半身不随になっている。別れの間際の一夏の一言でリハビリを続け、モンド・グロツソで再会したときには松葉杖を突いて歩けるようになっていた。一夏に好意を寄せており、ダイノガイストとしての記憶を取り戻した後もその気持ちに変わりはない。一夏と共に誘拐され、ドライアスの実験に巻き込まれロボットの肉体を持つようになり、その影響で自力で歩行できるようになった。

一夏（ダイノガイスト）は当初元の体に戻すために束に引き渡そうと考えていたが当の本人はこれを拒否、彼と共にいることを選ぶ。スリーサイズが原作よりも（ウエストを除く）大きくなっており、本人も気にしていたが一夏は特に気にしていないためあまり考えなくなった（ちなみにトレイダーからは前会ったときよりも大きくなったと指摘されている）。姉である束に対しては若干の苦手意識があったがガイスター加入時には和解している。一夏のこととは姿問わずプライベートでは「一夏」と呼んでおり、トレイダーや束からも「夫婦」扱いになっている。一夏とは肉体関係を持っており、朝一緒に風呂に入るのが日課（タオルを巻かないなど一夏に対しての抵抗感が全くない）。ジェットガイストのロボットモードは現段階では「トランスフォーマー」のウインドブレードをモデルにしている（但し、頭部の造形はガイスター仕様で後頭部には彼女のポニーテールの意匠があり、スリーサイズはそのまま反映してしまっている）。VTOL戦闘機に変形する。

「黄金勇者ゴルドランルート」においては完全に夫婦関係で一夏に対しては異常なDMになってしまい、夜の生活においてはいろいろやつ

ているようだ。どうやら基地の食事は彼女が作っている。

篠ノ之束／???

「インフィニット・ストラトス」のキャラで箒の姉であると同時にISの開発者。白騎士事件でISを世間に公表後、自分の発明したISが兵器としてしか利用されていないことに失望し、政府から逃走、行方を暗ませていた。箒が一夏と行方不明になった時は、かなり落ち込んでおり原作で本来箒が使用するはずの「紅椿」を「白椿」にしてしまふなどかなりのものだった。トレイダーの情報から二人の生存がわかり、二人に謝罪をしに行くのと同時にガイスターへの参入を求めた。一夏と箒の関係は了承済み（というよりはむしろ喜んでいた）で「夫婦」と認識している。一夏が全世界からISを強奪することに關しては認めており、当の本人も「世に出すのがまだ早すぎた」と言っている。現段階では巨大な手（？）に変形するのかどうかやら。「黄金勇者ゴールドランルート」においては、新たなターゲット「パワーストーン」を探すために専用のリーダー（形状はほぼドラ○ンリーダー）を製作している。

クロエ・クロニクル

「インフィニット・ストラトス」のキャラで束の助手。束の行くところならどこへでもお供する。

ガイスター四将

「勇者エクスカイザー」の最終回において逮捕されたメンバー。運よく脱走し、現在はダイノガイストたちと合流している。性格はほぼ原作と同じ。

プテラガイスト

空将。自称四将のリーダー。エネルギーボックスを製作するなど束ほどではないが開発関係には強い。ホーンガイストとは異常に仲が悪い。

ホーンガイスト

陸将。ガイスター四将において切り込み隊長的存在。「黄金勇者ゴルドランルート」においてはアーマーガイストと合体してゴルドランと交戦し、善戦した。テレビを見る趣味があり、「新世紀エヴァンゲリオン」の惣流・アスカ・ラングレーが好みらしい。

アーマーガイスト

地將。日和主義。「黄金勇者ゴルドランルート」においては、ホーンガイストと共にゴルドランと交戦している。「新劇場版エヴァンゲリオン」シリーズの真希波・マリ・イラストリアスが好きらしい。

サンダーガイスト

海將。四将の中では一番幼稚ではあるが怪力でもある。「黄金勇者ゴルドランルート」においてプリキュアのファンだということが分かった。基地にいるときはアニメ鑑賞をしている。

コウモリ

伝書係。ダイノガイストの指令を四将に伝える、コウモリ型ロボット。他にも体を動かかせない楯無の世話係も務めている。

亡国機業

オータム

「インファイニット・ストラトス」ので登場する亡国機業の実働部隊の一人。一夏と箒を誘拐した張本人。ドライアスとの取引で「DC」を受け取っている（おそらくスコールの頼みでサンプルとして受け取っていると思われる）。「黄金勇者ゴルドランルート」においては、スコールとドライアスの要請でワルザック共和国の協力者として登場。

エム

「インファイニット・ストラトス」に登場する。千冬そっくりの少女。ダイノガイストをターゲットにしている（正体に関してはドライアスから聞いたらしい）。

スコール・ミューゼル

亡国機業の実働部隊「モノクローム・アバター」を率いる女性幹部。ドライアスの協力者で彼を元の体に戻す実験を行っている。

ドライアス

「太陽の勇者ファイバード」に登場する宇宙皇帝。最終回においてファイバードに止めを刺されたはずだが何故か人間の女性の姿で生きていた。髪が茶髪のため若干オータムとキャラが被ってしまったている。かつての体（ファイバード本編で登場していたあの姿）を取り戻すためDC（ドライアスコア）を製作する。亡国機業やデユノア社にも売りつけており、かなりの犠牲者が出ている可能性がある。設定上エクスカイザーとファイバードは同一の世界のためダイノガイストとは何らかの関係で交戦したことがある。「黄金勇者ゴルドランルート」においては、スコールの元に身を寄せて、回収したファイバードの残骸から火鳥勇太郎の姿へとなる。

ワルザック共和国

「黄金勇者ゴルドラン」で登場する国。こちらでは女尊男卑化した世界で唯一影響を受け付けなかったらしく、ガイスター登場後でISの優位が落ちたのを機に新型のロボット兵器（表上は作業ロボット等）の開発を進めている。ちなみに本国を不審と感じた更識楯無は暗部の諜報員を送り込むものの逆に逮捕されたうえに問題視されたため実家を取り潰す要因を作ってしまった。

ワルター・ワルザック

ワルザック共和国の第一王子で、同国の駐日大使。鈴たちからは「悪太」と呼ばれている。文部両道でロボットの操縦技術も高いが肝心なところでドジをこいてしまい失敗してしまう。身体能力は千冬には及ばないものの高い。

カーネル・サングロス

ワルターに使える老執事。一見して弱そうに見えるが身体能力はそこそこ高い模様。ワルターを時には制し、時には助言をしている。

家来（多数）

ワルターに使えている部下たち。ワルター及びカーネルの命令を忠実に実行する（成功させるとは言っていない）。

IS & ゴルドランチーム

織斑千秋

本作のオリジナルキャラで一夏の双子の兄。容姿は一夏より若干長髪で眼鏡をかけている。幼少の頃は体が弱かったらしく健康体だった二人に対してかなりギャップを感じていた。その分勉強はしていたらしく周りからの評価は一夏よりも高かった。一夏に対しては冷たい態度を取っていたそうだがこれは自分にできないことができると一夏を羨ましく感じていたかららしい。篠ノ之道場にも行っていた経験があるが当然弱く箒には散々やられていて彼女が下半身不随になった時は今までの報いだと言うばかりに罵倒していた。しかし、決して悪人ではなく弟に悪いことをしていたとか反省しているところも見られる。現在では健康体で原作における一夏のポジションにある。姉に対してはそれなりに尊敬している。

「黄金勇者ゴルドランルート」においては、IS学園に入学しており男性初の搭乗者となっている。夏休みに弾と鈴、蘭の四人でタイムカプセルを掘り出しに行ったときパワーストーンを発見し、以降はワルター他の戦いに巻き込まれることになる。ドラからは「ゴルドライト」を託され、チームのブレン的役割をしている。なお、鈴とは仲がよく、友達以上恋人未満の関係にある。

凰鈴音

ISヒロインの一人。中国代表候補生ではあるがある意味厄介者扱いでIS学園に入れられる。千秋に好意を持っているが初恋の相手は一夏だった。パワーストーンからドランを復活させ、彼から「ゴールドシーバー」をもらう。現時点で唯一ダイノガイストが一夏ではないかと疑っている。

五反田弾

千秋、鈴、そして、一夏の友人。サバイバルに精通しており、罠の張り方などかなり詳しい。特撮ヒーローのファンでもある。ドランからは「ゴルドスコープ」を与えられている。本音が連れて来た虚に一目ぼれする。ジェットシルバーを復活させる。

五反田蘭

弾の妹。仲間外れにされることが多いせいで某元議員のような泣き方をした。アドベンジャーを復活させた。

更識簪

ISヒロインの一人。姉の楯無が行方不明になったため、千秋たちからは距離を置かれていたがドラン復活した現場に偶然にも遭遇したため、彼らに急速接近し、仲間入りを果たす。ISのプロテクトの解除作業をしている。ちなみに彼女は実家と縁を切るという形で日本代表候補生としての立場は無事で住んでいる。

布仏本音

簪の元専属メイド。彼女と共に行動している。

布仏虚

本音の姉で現在は楯無に次いでIS学園生徒会会長代理を務めている。弾と行動し、どうやらまんざらでもない様である。

黄金剣士ドラム

レジェンドラの勇者。鈴によって復活させられる。鈴たちに仲間のパワーストーンを集めることに強力を求める。黄金竜ゴルゴンと黄金合体することで黄金勇者ゴルドラムになる。

鋼鉄武装アドベンジャー

エジプトで復活した勇者。SLに変形し、他の勇者の運搬を行う。巨体に似合わず素早い動きをする。

空の騎士ジエツシルバー

サボンナ王国のサボンナ王が収めていたパワーストーンから復活した勇者。貴重な空中戦力。

星の騎士スターシルバー

知らぬ間に復活した勇者。危うくワルターに復活させられそうになったがダイノガイストの乱入で事無きを得た。

大地の騎士ドリルシルバー

篠ノ之神社に収められていた魔除けの石から復活。本来の主はダイノガイストのだがスパイとして鈴たちと行動している。

その他

宇宙商人トレイダー

「勇者エクスカイザー」の最終回でカイザーズにガイスターと共に逮捕されてた宇宙商人。四将と別れた後、自分の商品を全て宇宙船に乗せて別宇宙へと逃亡。その後別の地球にたどり着き、一夏（ダイノガイスト）と再会する。出会って間もない頃は取引などは一切応じない予定にしていたそうだが箒を嫁と勘違いし、渋々取引を行うことになった（と言うのもこの世界ではダイノガイスト以外の取引相手はまだいなかったらしい）。その後は束とも取引をするようになり、彼らを再会させるきっかけを作っている。

「黄金勇者ゴールドランルート」においては、ガイスターに「レジェンドラの財宝」について教える。後、どういう言った経緯で入手したかは謎だがスコールにファイバードの残骸なども売っている。

デユノア社長／ドライアス？

原作のヒロインの一人であるシャルロットの実父。ドライアスとの取引でDCを買い取りシャルロットを実験台にしようとしたが実の娘であるサラに妨害され自分が被検体になってしまい、ドライアスに似た姿に変貌、ダイノガイストに敗れ、自爆する。

サラ・デユノア

シャルロットの義理の姉でデユノア社長の実の娘で次期社長。現在の女尊男卑の社会に不満を持っていてらしく、父と母を嫌っている。シャルロットを実の妹のように可愛がっている。元々は考古学者を志していた。DCの実験台にされかけていたシャルロットを助けた。両親死亡後は遺産を相続し、シャルロットと共にこれから先のことを考えている。IS適性はない模様。

シャルロット・デユノア

「インフィニット・ストラトス」のヒロインの一人。社長の実験台にされかける。登場が原作開始前の出来事のため男装し偽名を名乗ることとはない。ちなみにもう本編には登場しない予定。

織斑千冬

一夏、千秋の姉。一夏誘拐後は一年間ドイツで教官を務め、その後は一度IS学園の教師に就いたがラウラ投獄の話聞いてショックを受け、退職する。自生活が堕落しており、酔っぱらって一夏の部屋で全裸で寝るなど問題点が多い（千秋には何故かそう言う事はしない）。ダイノガイスト（一夏）の気まぐれの行動で一夏が生きていると直感し、再職しようとするが「ブリュンヒルデ」としての自分の存在とガイスターへの警戒のためAVの仕事すら断られてしまっている。

墮落した生活をしている割にはプロモーションは崩れておらず、ノートになってしまったことを悩んでいたが、五反田食堂で見習いとして働くことになった。

更識楯無

元 I S 学園生徒会長。元ロシア代表でもあり更識家当主であった。ガイスターの強奪事件においてロシア代表と言うこともあり、本国に呼び出されていたがダイノガイストに敗北、専用機を奪われてしまう。更に警戒していたワルザック共和国の忍び込ませていた諜報員のことがバレて責任を取る形になり全ての刺客を剥奪されたのちにシベリア送りになる。後に脱獄するが寒さに耐えられず、倒れてしまいそのときクマに捕食され手足は無くなってしまった。その後本体も捕食されそうになったが偶然にもダイノガイストが近辺を訪れ基地へと運ばれ治療される。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

I S ヒロインのヒロインで元ドイツの I S 配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」隊長。ガイスターに脅威を感じ千冬に助けを求めて日本へ代表候補生として訪れるがその間にガイスターがドイツを襲撃して部隊は全滅。自分のミスだと感じて祖国へ戻るが帰国直後に軍に拘束され、軍法会議にかけられて部隊壊滅の責任と無実の罪を着せられ、刑務所に投獄されてしまう。

没キャラ（登場予定を抹消されたキャラ）

ワスピーター

「ビーストウォーズ」に登場するデストロン兵士。蜂に変身する。

ビーストシリーズの置いて唯一死亡しなかったキャラのため、宇宙をハチとロボットの頭（詳しくはリターンズ参照）で彷徨っていたと

ころをトレイダーに拾われ、ダイノガイストに買い取られ、プテラガ
イストがエネルギーボックスを与えたことで復活する予定だった。
本作のコメディリリーフ的存在になる筈だったが四将とワルターで
十分なこととこれ以上混ぜると危険だと判断したため没になった。

超神マスターフォーஸ்ルートキャラ設定集

サイバトロン

プリテンダー

宇宙指揮官メタルホーク／ホーク

サイバトロンプリテンダーのリーダー。現段階での設定では千冬と知り合い交際する予定（但し、正体は隠している）。

陸上探査戦士ランダー

惑星連絡戦士フェニックス

海洋防衛戦士ダイバー

ヘッドマスタージュニア

原作通りにするか未定（一様ミネルバの登場予定は考えている）
ISヒロイン組と千秋がなる予定。

ゴツドマスター

織斑千冬／勇者指揮官エクスカイザー

こちらのルートではジンライに次いで千冬がゴツドマスターになる予定。エクスカイザーそっくりのトランステクターとゴツドオンする。ダイノガイストたちからはエクスカイザーが来たと勘違いされる。デストロンとの戦いの中ドライアスからダイノガイストが一夏であることを知らされる。月のブラックザラック戦においてはダイノガイストに自らの正体を明かして説得を試みる。

スーパージェットエクスカイザー（キングエクスカイザー）

ジェットエクスカイザー（ドラゴンカイザー）

ゴツドエクスカイザー（グレートエクスカイザー）⇒この形態でゴツドジンライと共に着きに行き、ダイノガイストと交戦する予定（最終回のオマージュ）。

ジンライ／総司令官ジンライ

原作同様にゴッドマスターになる。こちらでは白騎士事件時に両親を亡くしているという設定が追加。そのため、白騎士をひどく憎んでいる。後に白騎士の正体が千冬と知るが苦悩している彼女を見て考えを改めるようになり、仲間として受け入れるようになる。

スーパージンライ

ゴッドジンライ

レフトフット／副官ライトフット

レインジャー／地球防衛戦士レインジャー

ロードキング／連絡防衛戦士ロードキング

その他

元総司令官コンボイ

正史では死亡しているがこちらではベクターシグマの暴走を止めるとき死亡はしなかったものの衰弱してしまったため、サイバトロン宇宙軍の指揮をロデイマス、セイバートロン星復興の指揮をフォートレスに任せ、恋人のエリート・ワンと共に日本で密かに隠遁生活を送っていた。IS学園との交流がある。

後遺症でトランスフォーム機能が麻痺しているため変形ができない。

エリート・ワン

コンボイの恋人（詳しくは初代を参照）。こちらのルートの設定では「ザ・ムービー」も生き延びている。コンボイの介護をあって日本にいる。

グラランド／太陽系司令官グラランドマキシマス

デストロン

エネルギー生命体

デビルZ

デストロンを支配する黒幕であり、闇の総統。原作同様にデストロン宇宙軍と地球軍を統合し、宇宙の果てからブラックザラックを呼び寄せサイバトロン全滅を目論む。しかし、終盤、復活したドライアスに吸収されてしまう（その影響でドライアスはオーガニツクドライアスにパワーアップしてしまう予定）。

宇宙皇帝ドライアス

元の体を取り戻すため、ゴッドマスターになったスコールたちと共にデストロンに入る。終盤、復活と共にデビルZを吸収し、オーガニツクドライアスへとパワーアップする。部下想いなどころは変わらないため、オーバーロードの反逆はない。

プリテンダー

破壊指揮官ブラッド

爆薬攻撃参謀ダウロス

魚雷攻撃参謀ギルマー

中盤から原作同様かませ犬になる。終盤、ドライアスに寝返る。

デストロンヘッドマスタージュニア

ワイルダー／指揮官ワイルダー

ブルホーン／陸上攻撃兵士ブルホーン

キャンサー／深海攻撃兵士キャンサー

こちらは女尊男卑の社会に影響でかなりグレている。

ゴッドマスター

破壊大使オーバーロード／ギガ／メガ

圧倒的実力で原作同様にスーパージンライ倒す。終盤はデビルZ

の振る舞いに怒りを感じていたがドライアスが吸収したため引き続きデストロンに着く。

破壊参謀スコール／スコール・ミューゼル

本ルートではスコールがゴッドマスターになる予定。モデルが「ギャラクシーフォース」のマスターガルバトロン。デビルZには忠実に見せるがドライアス側。実力は劇中上位の方でオーバーロードでさえもそれを認めている。

強襲戦士オータム／オータム

こちらもドライアス側。モデルは「ギャラクシーフォース」のソニックボンバー。

暗黒戦士エム／エム（織斑マドカ）

打倒ダイノガイストと千冬の勝負を目論む（ダイノガイストに關してはドライアスから聞かされていた）。トランステクターは黒いエクスカイザー。

宇宙航空参謀ハイドラー／ハイドラー

宇宙航空兵士バスター／バスター

原作同様ではあるがスコールたちには頭が上がらない。

番外編「もしもシリーズ」
もしも箒が妊娠したら

さて、今回の「IS世界のガイスター(仮)」は宇宙海賊ガイスターの無人島基地から物語を始めよう！

『なあ、今のボスを見てどう思う？』

基地の外で話しているのはガイスター四将だ！

何について話しているというのだろうか？

『ここ数日のボス、なんかやけに黙っていないか？』

『ああ、言われてみれば……』

『つい数週間前まであちこちの基地を襲ってたっていうのにここ数週間どうにも何も言わなくなっちゃった。』

『それとジェットガイスターもここ数日部屋に籠りつきりだ。いつもくっ付いていたはずの二人が急に離れて過ごすなんておかしすぎないか？』

「ん？どうしたの君たち？」

篠ノ之束だ！

『あつ、丁度いいところに来た。』

サンダーガイスターは束の方を見る。

「どつたの？」

『いや、最近お宅の妹さんが部屋から出てこないもんだったから。』

「ああ、箒ちゃんね。」

果たして篠ノ之箒に何があったというのだろうか!?

テレレレ〜テ〜テン！（エンブレムターン）

ここはガイスター基地の箒の個室である。

「箒ちゃん？どうしたの〜？」

東が声をかけると部屋から箒の声が聞こえる。

「ね、姉さん……」

「どうしたの？最近外に出てこないからどうしたの？」

「き、気分があまり良くないんだ……」

一体何が起きたというのだろうか？

東は箒の部屋に入り込む。箒はぐったりとした状態で眠っていた。

「あんまり顔色が良くないね……」

「ああ、それと……こないんだ。」

「こない？」

「アレだよ。ここ二週間ずっとこないんだ……」

「アレ？」

「アレだよ、ほら……女は誰でもくるアレだよ。」

箒の言うアレとは一体何だというのか？

テレレレ〜テ〜テン！（エンブレムターン）

ここはダイノガイストの部屋だ。

『……………』

ダイノガイストも黙ったままだった！一体何が起きたというのだ
!?

『……………（箒の奴、最近俺と一緒に寝なくなつたな……………）』

ダイノガイストも箒のことを考えていた。

『（それに最近は朝風呂にも入ろうと言つてこなかったし……………日
頃の態度が裏に出たか？）』

ダイノガイストは誰もいないことをいいことに頭を抱え始める。

『（弱つた……………日頃あんな生活をしていたせいですつと違和感を感じて
作戦が練れん！このままでは……………かといって奴らに相談する
のもなんだしな……………本人に聞くべきか……………しかし……………）』

そこへ東が箒と一緒に入って来た。

「おっは〜いっくん!」

「ご機嫌な東、彼女に一体何があったというのか?

『……どうした?』

「いや、お祝いの言葉を言いに来たんだよ!」

『お祝い?今日は俺様の誕生日ではないぞ?』

お祝いとは一体何なのか?

真っ赤な箒。

『ボス、失礼します。』

ガイスター四将の登場だ!

『お前達までなんだ?』

『『『ボス、おめでとうございます。(パチパチパチ)』』』

『!』

「ほら、箒ちゃん。」

東は箒をダイノガイストの前に出す。

『一体何なのだ?今日が一体何の日だというんだ?』

「実はな一夏……」

『ん?』

「その……できちゃったんだ。」

『……?何ができたんだ?』

ダイノガイストは不思議そうに箒を見る。

「だからできちゃったんだ。」

『……何を言っているのかさっぱりだ。』

「もう鈍感だなくいっくんは。」

全員ダイノガイストを見る。

『な、なんだ!?俺様が何かまずいことでも言ったのか?』

「だからできたというのは……」

「ああ！もう！姉さんは言わなくていいから！」

箒は束を強引に止めるとダイノガイストの方に向き直る。

「で、できたというのは……その……」

『うむ。』

「一夏と私の子供のことだ。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・ん!?!』

面食らったのも無理はない！

『こ、子供?』

「うん・・・・・・・・」

『『『ダイノガイスト様、おめでとうございます!!』』』

「おめでとうー!」

「おめでとうございます。」

全員に拍手されている中、ダイノガイストはただ茫然としていることしかできなかった！

『・・・・・・・・』

「いや、箒ちゃんの体調が良くないっていうからメデイカルルームで検査したらおめでだったんだよ。」

『・・・・・・・・』

『ボスももう子持ちの海賊の首領ですね。』

『いや〜めでたいめでたい。』

『・・・・・・・・こ、子持ちの首領だと?』

「そういう訳だから・・・・・・・・これからよろしく・・・・・・・・? パパ?。」

箒は顔を赤くしながら言う。

『あっ!もし本当にそうだったらダイノガイスト様は、? パパガイスト様? になっっちゃうのか。』

サンダーガイストはさりげなく言う。

「だとしたら妹様は？ママガイスト？と呼ぶようになりますね。」
クロエもさりげなく言う。

『俺が子持ち・・・・・・・・俺が・・・・・・・・』

最早混乱状態だ！

『嘘だと言ってくれええええええ!!うおおおおお!!』

「はああ!？」

ダイノガイストはベッドから起き上がる。すぐ傍では箒はしっかりと手を握って眠っていた。

「……………なんだ、夢か。」

ダイノガイストは、ホッと息をする。

(恐ろしい夢だった……………まあ、これを教訓に今後は注意を……………ん?)

ダイノガイストが見たもの。

それは腹部が大きくなった箒の裸体だった。

「……………」

ダイノガイストは思わず黙る。すると動いたことで目を覚ましたのか箒が目を擦りながら起きた。

「おはよう、一夏。」

「……………」

「どうしたんだ？」

「箒……………その腹はどうした？」

「どうしたって私とお前の子供じゃないか。」

箒は驚いた顔で言う。

「……………夢ではなかったのか。」

この始末☆

はてさて、この先どうなりますことやら……………

もしも箒が妊娠したら パート2

さて、前回の「IS世界のガイスター(仮)」は。箒に子供ができたと言われて絶叫したダイノガイスト。目を覚まして夢だと思っていた矢先、夢ではなく現実であった！では、早速パート2を始めよう！

ここはガイスター基地にある浴室である。

ダイノガイストと箒はいつもここで風呂を楽しんでいるのだ！

「フ、フゥーン！フフ、フフゥーン……」

ご機嫌よく風呂に入っている箒。

しかし、ダイノガイストは既に困惑している状態にあった。

「……」

「一夏？」

箒は目を覚ましてから黙っているダイノガイストを見る。

(夢ではなかったか……。だとしたらもう近いうちに生まれてくる……。しかしな、生まれてきたらきたでどうすればいいのかわからん。箒にも言えんしな……)

「一夏？」

「ん？」

ダイノガイストは心配そうに自分の顔を見る箒に気がつく。

「どうしたんだ？さっきからずっと黙っていて。」

「い、いや。何でもない。」

「……」

箒は不安そうな顔のまま風呂から上がる。

「あんまり入るとお腹の赤ちゃんに悪いからな。」

テレレレ〜テ〜テン！（エンブレムターン）

その日の夜

ここはダイノガイストの部屋だ。

『うむ．．．．．俺様が子持ちか．．．．．』

ダイノガイストは何かを書いていた。

『春一．．．．．まだ男だとは決まっておらんしな．．．．．』

見よ！

この考えた名前だらけになってしまったノートの末路を！

『百秋……む……名前を決めるのはいいが今度は生まれ
た後の問題だな……どう育てればいいんだ？』

ダイノガイストは頭をひねる。

無理もない。

彼は前世現世ともに親にどう育てられたのかという記憶はほとん
どないのだ。

前世はエネルギー生命体だったため。

もう一方は、彼が物心つく前に両親が失踪してしまったためである
！

『む……誰に聞いても結果は同じだな……か
と言って今の生活のままだったら確実に悪い方向に育ってしま
う……』

ダイノガイストは頭を押さえる。

『……気分転換に外の風にもあたるか。』

テレレレ〜テ〜テン！（エンブレムターン）

このガイスター基地のある無人島は昼間は、猛暑に襲われるが夜間は心地よい風が流れる一種の楽園でもある。

ダイノガイストは風にあたりながら洞窟の外に出てきた。「あのバカ共が寝ててよかったものだ。ただでさえ人間の姿になるのが珍しいというのに。」

ダイノガイストが歩く方向は島の砂浜地帯。

その砂浜に二つの人影があった。

「ん？」

ダイノガイストはすぐにロボットの姿に戻り、剣を構えて近づくと。

「それで姉さん……」

話しているのは箒と束の姉妹だ！
一体何を話しているというのか？

『……』

ダイノガイストは黙ったまま茂みに隠れる。

「でもね、箒ちゃん。そんなにお腹が大きくなってからじゃ中絶なんてとてもだけどできないよ。ましてはもう臨月に近いのに。」

「でも……やっぱり不安なんだ。」

彼女たちの話している内容。

それは、箒の体に宿った新しい命の排除であつた！

「一夏……最近ずっと黙ったまま私のお腹を見るようになったんだ。まるで困ったように。」

「そりゃあ、初めての子供なんだもん。いくらいつくんでも不安になるよ。」

不安そうな箒をなだめながら束は優しく言う。

「それに箒ちゃんの子供だもの、やんちゃかもしれないけどきつとい子に育つよ。」

「そうだといいんだけど……」

「それにそんなに心配だと……」

束はポケットからコンパクトの鏡を箒に見せる。

見よ、箒の心配しながら後ろからこっさり見ているダイノガイストのシュールな姿を！

「いっくんだったって、どうなっちゃうのか心配してこっから見守っているんだから。だから心配しなくてもいいんだよ。」
「……………うん。」

テレレレ〜テ〜テン！（エンブレムターン）

再び二人の寝室。

「……………」
「……………」

沈黙しながら寄り添い合っている二人。

「……………なあ、一夏。」
「……………」

箒は一夏の手を自分のお腹に当てる。

「……蹴ってるな。」

「うん。もう生まれてきてもおかしくないって。」

「……」

沈黙するダイノガイスト。

「……名前。」

「え？」

「この子の名前と決めないといけないからな。」

ダイノガイストはノートを見せる。

「自分で考えてみたんだがどれもこれも決めかねんだ。」

「こんなに……と言うよりは心配していたのはこの子の名前決め
だったのか？」

「……正直言うところな俺で父親になれるのかと疑問に感じてい
てな。」

ダイノガイストの言葉に箒は思わず涙目になった。

「馬鹿……別に一夏は一夏のままでいいのに……」

「箒？」

「私たちが一緒に居ればきつといい子に育つから。私だって自分が母
親としてできるかどうか心配なのに……」

「……悪いことをしたな。」

ダイノガイストは、箒を抱いて背中を擦る。

「もう深くは考えん。俺は俺のやり方で子供と向き合う。」

「うん。私も自分なりに子供と向き合う。」

「ところで箒は何かいい名前はないか？」

「そうだな……」

二人は寄り添い合いながら夜を過ごした。

もしもビーストウォーズの皆さんと会ったら

前回のビーストウォーズは！

「終わった……。ようやく宇宙の未来は……。救われた……。」
コンボイたち一同は、デストロンとの戦いの末メガトロンを捕え、セイバートロン星へと帰ることになった。メガトロンはシャトルの外に拘束され、彼らは懐かしの故郷へと向かう。

「バイバイキーン!!」

「ブーン、ボクちゃんなんだかとおもってハッピーだブーン。これでいいのだ!!」

満足そうな一名を残し、シャトルはワープ空間へと入ってセイバートロン星へと向かう。

ところがワープ空間に入った直後である。

「しまった！バナナを忘れた！」

「「「ええええええええ——つ!!!?」」」」

一同は呆れた声でコンボイを見る。!!!

「もういいじゃん、バナナなんて。」

副官であるライノックスは、諦めるように言う。

「セイバートロン星には、バナナが無いんだッ！」

「だから？」

「地球に戻るぞ！」

「「「ええええええ——つ——」」」」

「!!!???

コンボイの言葉に全員が呆れる。

「もう無理なんダナ！ワープ空間に入ったんだから、戻っても時代が大幅にズレちゃうんだナ！」

「それでもだ！」

「おいおい、このゴリラの大将何言っちゃてんだよ……」

「何としても地球に引き返すんだ！」

コンボイたちの乗るシャトルはワープ空間の中、反転して地球へと引き返して行った。

無人島 ガイスター基地前

『冗談もほどほどにしてえな！』

裏でそんなことが起こっている頃、ガイスター基地の目の前でトレイダーの声が聞こえる。

『なんでわてがこんな大量のバナナを買い取んなきゃあかんのや！』

『うるせえー！ただでも持って行っていいとダイノガイスト様がおっしゃっておられるのだ！全部持って行け！』

プテラガイストが脅迫するように言う。一同の目の前には大量の

バナナ。

『この島は気候のせいなのとバナナの木が多いせいで嫌でも大量のバナナが取れるんだ！おかげで俺たちの食事にいつもバナナが入っているし、それでも食い切れねえんだよ！』

ホーンガイストがプテラガイストよりもやや困ったように言う。このガイスターの拠点の無人島、実はバナナの雑木林があちこちにある、ガイスターの食事には必ずバナナが付く。しかし、バナナはメンバーの食事の量以上に採れてしまったため、その扱いに困っていた。そこで丁度商談をしに来たトレイダーに押し付けることにした。

『束が作った保管庫も今じゃバナナで一杯だからな。トレイダー、無理にでも持って行け。』

『ダイノガイストはん！わて、バナナ嫌いなんやで！』

『だったら他の取引相手でも探してこい。』

『そんな無茶な！これから先のわての食事、みんなバナナになってもうやないか！』

『じゃあ、ちーちゃんたちの所にでも送りつける？』

束が思いついたのかのように言うがダイノガイストは首を横に振る。

『もう、この間送りつけた。今頃、二人でなんで送られたのかと思いがら食べている頃だろう。』

『じゃあ、一夏の友達だった人たちに……』

『そこにも送り付けた。と言うよりあまり関係のない屋台の親父にも送り付けた。』

『ムムムもはや送り付けたところなしか。かと言って捨てるの勿体ないね』

『と言う事だ。トレイダー、観念しろ。タダでくれてやる。』

『そ、そんな……』

トレイダーに最早断る余裕はなかった。

その時だ。

『むっ！』

ダイノガイストは上空を見上げる。上空からシャトルが高速でこちらに墜落しようとしているのだ。

『なんだ!?!どこのどいつだ!俺たちの基地に堕ちてくる奴は!?!』

『少なくとも宇宙警察ではなさそうだな……』

一同が空を見上げている中、トレイダーはそつと逃げて行った。

『いくらわてでもバナナは買い取らんで……中身は確かに中々ええけどその後の皮の匂いときたら……ああ、もう感じるだけで堪えられんがな。』

シャトルは墜落し、ダイノガイストたちは周囲に固まっていた。

『このガイスターの拠点に土足で乗り込んでくるとは……生かしては帰さん!』

ダイノガイストは箒を肩に乗せながら、シャトルに近づく。他の四将も警戒しながら身構える。

するとシャトルのドアが開き、六体のロボットらしきものが倒れながら出て来た。

「な、何とか地球に戻ってこれたな……」

「おかげで行く前に食べたおでんのこんにやくが口から出てきそうになっただナ。」

「コンボイのおかげでオイラたちは大迷惑だよ〜!」

「まあ、無事に着いたんだから別にいいじゃん? さっさとバナナ持ち帰ってセイバートロン星に……」

チータスは目の前にいるダイノガイストたちを見て顔色を変える。

「……どこ?」

「はあくあくコンボイがバナナを忘れたせいでオイラたち怪獣王国みたいなところに堕ちちゃったじゃないか!」

「ラットルさんの言う通りデス! 僕たちとんでもないところに落ちこちっちゃったようデスッ!」

「どうするつもりシャツ? この馬鹿ゴリラ。」

「……ひとまず話してみるか。」

コンボイはとりあえずダイノガイストに近づいてみる。

『……』

「やあ、どうも。私の名前はコ……」

『帰れ。』

「あつ、ドン・ホラー。」

『魔空空間に引きずり込めつ! ……って、誰がドン・ホラーだ!』

「じゃあ、ヘルサターン総統。」

『もつと古くなってよい子にはわからんわ！貴様とて吸血鬼や侵略者ではないか！』

「クククククククククククク!!ザ・ワールドオ!!……って、中の人ネタをここで使うな！」

『貴様が最初にしたからだろ！それに何で特撮の方なんだ！普通アニメの遊戯王とかソウル・イーターやガンダムの方ではないか！』

「だって……メインは、今の声の方だし。」

『何イ!?ふざけるな、イボンコ!』

「それは先のネタだ！」

『黙れ！もう放送から十年以上経ったんだから問題ないわ!』

「………一夏。」

「おいおい、恐竜の大将と家のボスゴリラの喧嘩だぜ………」

二人が言いあっている中、シャトルに拘束されたままのメガトロンは………

「あの………出番まだ？今回の話、尺が短いから早く出してくれないと出れないんだけど？もしもし?」

「一夏、もうやめてくれ！最早削除されかねない内容になってきているぞおー！」

「あっ、かおちゃん。」

「そうそう、いつもドジこいちゃって！でも、私の美貌の前なら……つて、私までやってしまった！」

もしもブロリーとコラボしたら

広大な宇宙

いくつもある宇宙の一つ。

銀河系の内の南の銀河をサイヤ人が襲った！

宇宙警察はその破壊活動を阻止すべく立ち向かうがその脅威のパワーの前に全滅。

救援に向かう途中だったカイザーズは、奴らが先に向かうと思われる地球へ急いで向かった！奴らに対抗するための新たな体を手に入れるために。

『このままでは全ての宇宙が破壊尽くされてしまう!!』

一方で

「このままでは……この北の銀河も破壊尽くされてしまう。」

「IS世界のガイスター（仮）外伝」

『大長編（嘘） 勇者エクスカイザー？ドラゴンボールZ 迷い尽きろ

!?!熱戦・迷戦・超混戦』

『そ、そうだな！ドクターが間違えたっていう事はねえけど流石に……』

『いきなりカイザーズの前に飛ばされたとなったら大騒ぎだからな……』

「え〜！せつかく作ったのに〜！」

『東、どうせ作るのだったらもっとマシな物を作ってくれ。宇宙船とか……』

「ぶう〜！」

『全員持ち場に戻れ。』

ダイノガイストがそう言うのと全員戻ろうとする。

「あつ、サンちゃん。そのボタン押すとお宝降ってくるよ。」

『えっ？』

サンダーガイストは驚いた顔をしてボタンを押す。

『『『『あつ。』』』』

「異世界へレッツゴー！」

全員強制的に転送されてしまった。

「東様、今日の予定のついてですが………出かけましたか。」
クロエを除いて。

??地球

「新惑星ベジータの王になって頂きたく、お迎えに参りました。」

「何？新惑星ベジータ？」

「もう一度、戦闘民族サイヤ人の優秀さを全宇宙に知らしめてやろうではありませんか。あなたの手で最強の宇宙帝国を築き上げるのです！」

「「おおー！」」

一方別の地球では、花見をしている人々がいる中、宇宙船が現れ、パラガスと名乗るサイヤ人がベジータを自分たちが築いている新惑星ベジータの王として迎えに来ていた。

しかし、当のベジータは乗り気ではなく立ち去ろうとしていた。

「フン。」

「……伝説のスーパーサイヤ人を倒せるのはベジータ王。あなたしかいません！」

パラガスの一言にベジータは足を止める。

「伝説のスーパーサイヤ人……」

「南の銀河一帯をその脅威のパワーで暴れまわっていると聞いています。このままでは……せっかく築き上げた新惑星ベジータも伝説のスーパーサイヤ人に……」

ベジータは考え始める。

「父さん！」

彼の息子であるトランクス（未来）が彼の前に駆け寄る。

「ダメです、そんな話にのっては！」

「パラガス、案内しろ。」

トランクスの忠告を無視してベジータはパラガスの方へと行く。

「父さん！」

トランクスは彼を追うがそこにパラガスが経つ。

「!?」

「あなたもどうぞ、ベジータ王の血を引くトランクス王……」

「ハッ、ハッ……申し上げます！」

そこへ一人の部下が慌てて走って来た。

「ん!？」

「何者かに宇宙船を乗っ取られましたっ！」

「……!？」

パラガスは慌てて宇宙船の方を見る。宇宙船の方では部下であるならず者たちが何やら巨大なロボットたちに外へ放り出されていた。

『なんかよくわからねえけど宇宙船が手に入るなんて好都合だぜ。』

『ボスも満足そうだしな。ドクターが言う事も満更でもなかったな。』

宇宙船からならず者たちを追い出していたのはホーンガイストたちだった。

「おい、パラガス。あいつもお前の部下か？」

「滅相もございません！あんな輩があなたの従僕になるなど……そのようなことがあるはずが……」

『よし、さっさとこの地球からおさらばして元の地球に戻るまで楽しもうぜ。』

宇宙船のドアが閉まり、発進しようとする。

「……!?!?!お待ちください！明日まで！明日までお待ちください!!ふわあ〜ふわあ〜ふわあ〜!!（泣いています）。」

パラガスの悲鳴も虚しく宇宙船は飛び去って行ってしまった。

「あら……」

「と、飛んで行ってしまったようですね。」

近くにいたクリリンと悟飯は啞然としながら見る。

(くそ……宇宙船が。このままでは……ベジータたちを新惑星ベジータと共に葬り、宇宙の中で一番環境の整った美しい地球に移住し、そこで大人のお姉さんと絡みあろう☆計画も何もかもお終いだあ……)

「おい、パラガス！一体どうやって行けと言うんだ！」

ベジータは不満そうに言う。

「とは言われなくても……肝心の宇宙船が奪われては……」

「なら、宇宙船があればいいんだな？」

「オフコース！」

「……ちつ、仕方ない。ブルマの宇宙船を借りるか。」

宇宙

『中々よくできた宇宙船だ。』

パラガスから奪った宇宙船の中でダイノガイストは感心しながら言う。

「姉さん、この宇宙船の行き先は？」

「うーん、結構離れた星だけど一日もしないでつけるようだね。」

東は操縦席で確認する。

『元の世界に戻るまでどのくらいかかる?』

「うーん、今の状態だと最低三日かな?」

『三日か……』

ダイノガイストはしばらく考える。

『なら、手始めにその星（新惑星ベジータ）の宝を奪うとするか。』

新惑星ベジータ

「暇リーですう……。」

長身の青年が暇そうに空を眺めていた。

「親父いがクズを連れて来るまで暇だなあ……ん?」

そのとき、ちょうど宇宙船が到着した。

「フフフフ、とうとうクズの終わりの時が来たようだな……ん?」

やっと来たかと思いきや到着した宇宙船からは複数のロボットが降りて来た。

「なあんなんだあ?あいつらは……。」

青年は飛んで宇宙船の方へと行く。当の宇宙船の方ではダイノガイストたちが星の光景を眺めていた。

『思っていたよりも大した宝はなさそうだな。』

「うーん、一様人間が住むには問題ない星だけど宇宙から見るとそう長くはないね。」

「ん？何か飛んでくる。」

箒が指さす方角を見ると空から青年が飛んできた。青年はダイノガイストたちの前に着地する。

「お前たちは誰だあ？」

『何!?小僧!てめえ俺たちのことを知らねえのか?』

「はあい。」

『……………』

青年の返事にホーンガイストは黙った。

『お、教えてやるぜ!俺たちは宇宙海賊ガイスター!宇宙のあらゆるお宝を奪う海賊だ!ちなみにこちらのお方は俺たちのボスダイノガイスト様とその伴侶ジェットガイスト様だ!』

『小僧、お前の名前は何だ?』

ダイノガイストは青年を見ながら言う。

『ブロリー、です。』

『ふ…………む。』

ダイノガイストは黙ってブロリーを見る。

(…………こいつ、只者じゃないな。)

「ところでなんで親父いの宇宙船で来たんですかあ？」

ブロリーは宇宙船に指を指しながら聞く。

『ああ、これは俺たちが……………』

「奪ったというわけだあ!」

「ヘアツ!」

ブロリーは驚いた顔で後ろを見る。ダイノガイストたちも一緒に見る。そこには何故か地球に取り残されたパラガスがいた。

『あつ、アイツ確か地球で捨てた奴。』

『なんでここに嫌がるんだ?』

「全てはお前たちの言う通りだ。だが、ベジータ王の偉大なるパワーで戻って来たというわけだあ!」

次に続く（ない、何も無い！あるわけないだろ。）

（ハアア☆お——い！！）

超神マスターフォー スルーツ 戦いの再開

宇宙海賊ガイスターが世界に現れるよりもはるか昔。

遠い宇宙の彼方に存在する超ロボット生命体「トランスフォーマー」が住む惑星セイバートロンでは、平和を愛する「サイバートロン」と武力による惑星の統治を目指す「デストロン」の2つの種族が永きに亘り戦争を続けていた。この戦争の影響によって、セイバートロン星のエネルギーは枯渇寸前にまで陥った。

当時のサイバートロンの総司令官コンボイは、一部の仲間たちと共に外宇宙へのエネルギー探索を開始。しかし、そのことを察知したデストロンの破壊大帝メガトロンは、これを妨害すべく追撃を開始。

宇宙空間での戦闘中、双方の宇宙船がとある惑星………現在の地球の重力に引き寄せられ墜落。彼らは全員、機能を停止した。

それから400万年後、火山の噴火のショックで宇宙船のコンピューターが再起動し、生命再生装置により、トランスフォーマー達は当時の地球の到る所にあるエネルギーを蓄えられた物体の姿を借り、復活を遂げた。

メガトロン率いるデストロンは地球の豊富なエネルギーに目をつけ、宇宙支配の野望を抱く。対するサイバートロンも、それを阻止せんと立ち上がった。

かくして、サイバートロンとデストロンは、地球を舞台に戦いを再開する事になった。

激しい戦闘の末、サイバートロンはリーダーのコンボイを含める古参のメンバーが戦死、彼の持つリーダーの証「マトリクス」は新総司令官ロデイマスコンボイへと引き継がれる。

一方、同様に重傷を負ったメガトロンはユニクロンによって再生強

化、新破壊大帝ガルバトロンとして復活したものの戦争はサイバトロンの勝利となった。

しかし、戦争終結数年後、ガルバトロンの指揮によるデストロンの活動再開、さらに「マスター星」から独自に進化した「ヘッドマスター」の登場により、両軍の戦闘は再開。

シティーコマンドー・ウルトラマグナス含める多くの犠牲を出しながらもサイバトロンの総司令官フォートレスはデストロンの恐怖大帝メガラックの地球破壊を阻止、宇宙へと逃亡したデストロンを追跡すべくほとんどのメンバーが地球を去って行った。

そして、時は流れ、人々はトランスフォーマーの存在を忘れて行った。

宇宙海賊ガイスターが活動を始めて二年。

女尊男卑と化していた社会はISへの態度が変化したことにより、元の社会へと戻りつつあった。ISは全面的に使用が制限され、IS

ピンポーン！ピンポーン！ピンポーン！

「はいはい、今開けますよ！……. ったく、誰なんだよ…….」
千秋は適当に着替えると玄関に向かってドアを開ける。

「はい、どちら…….」

「遅ーいいー！」

「えっ?」

聞き覚えのある声に千秋はポカーンとする。

「全く、昼間から何寝てんのよ！千秋！」

「り、鈴り！」

千秋は目の前にいるツインテールの小柄の少女を見て驚いた表情をしていた。

「お前いつこつちに帰って来たんだよ!? 去年中国に帰ったばかりだろ!?」

「まあ、いろいろ訳ありだね。こつちに戻ることになったのよ。」

よく見ると彼女の足元にはポストンバックが置いてある。

「ところで千冬さんは? ちよつと相談したいことがあって来たんだけど。」

「ああ、千冬姉か? 千冬姉ならデートだぜ。」

「へえ……. じゃあ今は……. はあ!? デートっ!? あの千冬さんが!」

鈴は驚いた顔で言う。

「あの千冬さんが!」

「ああ。」

「アンタたち兄弟以外の男に全くの興味を見せなかったあの千冬さんが!」

「ああ。」

「あの恋愛とか全く無縁と思っていた千冬さんが!」

「ああ。」

「うわあ〜! 変な時に帰って来ちゃったあ! 明日きつと世界が滅亡す

るわよ!?!」

「物騒なことを言うなよ!」

鈴の慌ただしい一言に千秋は叫ぶ。

「どんな男よ!?!まさか薬中（薬物中毒）やヤンキーみたいな奴とかじゃ……」

「お前な……結構イケメンで優しそうな人だぜ?」

「名前は?」

「ええつと……一度会ったことがあるけど確か『ホーク』だったかな……」

「……」

千冬は、化粧をしながらあたりをキョロキョロする。今の彼女の格好は、明らかに派手で普段の彼女とは思えないような姿だった。要は、いかにも今どきの女性らしい服装と言う事である。

「遅いな……ホーク。」

彼女が心配していると一台の車が目の前に止まった。窓を開ける

と一人の男性の姿があった。

「ホーク！」

「遅れてしまつてすまない。」

ホークは、申し訳なきそうに千冬に謝る。

「いや、いいんだ。来てくれれば。」

「では、行こうか。」

千冬は車に乗り込むとホークは運転を再開する。

「ところで今日は、どこへ行くんだ？」

「そうだな、千冬さんが行きたい場所で構わないが。」

「いいのか？それじゃあ……」

テレレレ々テテツ！テレレ々テテン！マスタ
フォース!! (アイキヤツチ)

織斑家

「へへ、ホークさんね。」

鈴は千秋に入れてもらったウーロン茶を飲みながら話を聞く。

「なんて言うか千冬姉、日本に帰って来てから魂が抜けちゃったような感じだったんだけど、I S 学園の教師をやらなかった話に来てくれたのがホークさんでそのとき目が完全に釘付けだったんだよ。」

「まあ、一夏がいなくなっただけから随分経ってるものね。でも、I S 学園に男の教師がいるなんて意外ね。」

「話によれば I S 学園の教育方針が変わったことが大きいらしいぜ？
今までは I S に関することを専門的に学ぶための場所だったけどここ二年でさ、ほら知っているだろ？」

『ガイスター』ね。ああ、これだと今年の春から心配になるわ……
「今年の春？ どういうことだよ？」

千秋は不思議そうに聞いてくる。

「実はね、私 I S 学園に入学することが決まったのよ。」
「えっ？ マジかよ。」

千秋が言うのと鈴はバックに入っている書類を見せる。確かに政府から渡されたもので入学することは本当の様だ。

「向こうに戻って I S 適性の検査を強制的に受けさせられてさ……
見事にあつたのよ。それで入学の数カ月前にこっちで過ごすことになったのよ。」

「へへ。」

『へへ』じゃないわよ。それで本当はホテルとかで待機することになってるんだけど、あそこ堅苦しいからさ……アンタの家に居候させてよ？」

「ふん．．．．．つて、はあ!？」

「いや、別に無理にっわけじゃないんだけどさ．．．私とアンタの仲じゃない?」

「いやいやいや、それ無理に決まっているだろ!俺はともかく第一千冬姉が許してくれねえよ!それに俺はいま受験中だぜ!」

「だからいいんじゃないのよ?」
「えっ?」

「一夏がいなくなっってからアンタだって家事で大変なんですよ?それに千冬さんズボラだし。なら、私が居候している間はやってあげてもいいわよ?どう?」

鈴は、ニヤニヤとしながら千秋を誘惑する。

「む．．．．た、確かに．．．．」

「でしょ?」

「それに千冬姉の実験にされるよりはマシか。」

「実験?」

「千冬姉の奴、ホークと付き合っってから今までの自分じやマズいって家事するようになったんだよ。でも、料理はまるでゲテモノだらけで俺は何度地獄を見たのやら．．．．」

「オオウ．．．．．なんか聞いただけでゾツとしてきたわ。」

鈴は、同情するかのように千秋の肩に手を置く。

「まあ、この鈴ちゃんが来たんだから安心しなさいな。未来の嫁としてアンタの代わりにやってやるわよ。」

「何で未来の嫁なんだよ?」

「なんでって、アンタみたいな男の嫁に来てくれる女って、私ぐらいしかいないでしょ?」

「．．．．．」

「．．．．．あつ、また口が滑った。」

二人は思わず顔を赤くする。

「．．．．．二人つきりだし、別にいいわよね?」

「．．．．まあな。お帰り、鈴。」

「ただいま、千秋。」

ガイスター基地

『報告します、数日前のカナダ沖で我々が鹵獲してトレイダーに売り飛ばすはずだった豪華客船の沈没事故についてですがやはり、我ら以外の何者かによって引き起こしたものと思われれます。』

ダイノガイスターの前でプテラガイスターが報告をしていた。

『それで証拠は?』

『はっ、アーマーが回収したカメラの映像のコピーをお見せします。』

プテラはパネルにスイッチを入れ、映像を映す。映像には蝙蝠のような化け物と魚人のような怪物が人々を襲っている姿が写っていた。

『……我々「ガイスター」の者でないという事だけなのは確かだな。』

『はい。』

『それでこいつ等についての情報は?』

『現在、ドクター東が世界各地のネットワークをハッキングしながら

調査を進めています。』

『そうか。』

『世界のメディアの反応は?』

『現段階では我々がやったのではないかと言われています。』

『……おのれ、我等「ガイスター」の顔に泥を塗るとは許しがたい連中よ。』

ダイノガイストは目を光らせながら言う。彼に寄り添っている筈も不満そうな顔で映像を見ていた。

「私たちは確かに『宝』を盗むが人は殺したりはしないぞ! まあ、余程輩は、トレイダーに売り飛ばすけど。」

『プテラ。』

『はっ!』

『このバカ者共を生け捕りにしろ。そして、俺様の前に連れて来るのだ。「宇宙海賊ガイスター」の顔に泥を塗ったことを後悔させてくれる!!』

「いっくくん! わかったよ! この連中の正体があ!」

東が部屋に入ってくる。

「姉さん、連中の正体は何なんだ? 私が成敗して来る!」

「まあまあ、落ち着いて。連中の正体は『デストロン』、過去のデータバンクでかつては地球のエネルギー資源を狙った組織なんだけどこちらの方はどうやらその組織の分家みたいなもんだね。」

『デストロンだと?』

「うん、彼ら『トランスフォーマー』はスキャンした物に変形することができるんだけど彼らの場合はどう見てもその要素がないけどその仲間らしいお魚クンの頭には堂々とそのマークがあったからね。」

東が映像をアップさせると確かにマークのようなものがあつた。

『おのれえ……』

「一夏……」

『……すまないが全員を呼んでくれ。この愚か共をどう血祭りにあげるか決める。』

テレレレくテテツ！テレレくテテン！マスタ——
フォース!! (アイキヤッチ)

「今日もありがとう、ホーク。私の我侭に付き合ってくれて。」
「なあに、このくらいどうということはないよ。」

千冬とホークは、車の中で会話をしていた。

「しかし、あの映画は面白かったな。そう言えば千秋君、受ける高校は決まったのかい?」

「ああ、私立藍越学園を受けるそうだ。」

「あそこは、就職率の高いからね。」

「あいつ、私に気を使っている物だから……」

「でも、君のことを思っているのだからいいんじゃないかな? 君に早く恩返しをしたいと思っているのだろうし。」

「うん。ところでホーク。」

「ん？」

「その……えっと……今度……」

千冬が何かを言いそうになったとき、ホークの腕時計から急に着信音がなった。

「ちよつとすまない。」

ホークは腕時計を動かす。すると時計から男性の声が聞こえる。

『ダイバーだ。』

「ダイバー！久しぶりだな、元気だったか？」

知り合いなのかホークは懐かしそうに話す。

『ホーク、聞いてくれ。カナダ沖で船が襲われた。奴らの仕業だ。』

「何!？」

「ホーク？」

急に深刻な顔をするホークを千冬は心配そうに見る。

『現場の遺留品から記録映像が回収された。学園のデータバンクの方へ送ったから、君の目で確かめてくれ。』

ホークは通信を終える。

「すまない、急用が入ってしまった。悪いが君の家の近くで下すよ。」

「ちよつと待ってくれ。一体何の話なんだ？教えてくれホーク。」

「できればこの件に関しては君を巻き込みたくはないんだ。」

「いや、さっきの話では学園のデータバンクがなんかと言っていた。

それなら学園の教師の私にも知る権利があるはずだ。」

千冬は引き下がる気はない。

「……分かった。奴らは子供だろうが女だろうが容赦なく殺す連中だ。いずれ君にもその牙が……」

「それで？一体何の話なんだ？」

千冬は不安に感じながらもホークの顔を見る。しかし、ホークは黙ったまま車を進める。

IS学園

休日でもあるためか夕方のIS学園は、静かだった。

そんな学園の駐車場に車を止め、ホークたち二人は敷地内へと入って行った。

「ホーク、一体どこに……」

千冬が言いかけたとき、ホークは壁の各パネルを開いてパスワードを入力する。すると壁が開き何かの入り口が開き、中はエレベーターになっていた。

「こ、これは……」

「我々『サイバトロン』の基地への秘密の地下入口だ。最もここは臨時基地だがね。」

ホークは千冬を連れて中へと入る。二人が入ると同時に入り口は閉まり、エレベーターは地下へと進んで行く。

「サイバトロンって……」

「千冬さん……今まで隠してきたが私は……地球人じゃないん

だ。」

「えっ？」

ホークの一言に千冬は思わずどうしたのかと思った。

「冗談だろ？どう見てもホークはにん……」

「真面目な話だ。」

「……その顔だと本当なんだな。」

千冬は、少し納得できないような顔をしながらもホークを見る。

「……私は、地球から遙か彼方にあるセイバートロン星から来た。正確に言えば『トランスフォーマー』と呼ばれる超ロボット生命体なのだ。」

「トランスフォーマー？あのかつて地球にいたという……」

トランスフォーマーと言う言葉を聞いて千冬は驚いていた。

「そうだ。人間や動物、生命を持つ者なら何にでも姿を変えることができる、トランスフォーマーの中の『プリテンダー』という種族なのだ。セイバートロン星では、サイバートロンとデストロンの激しい戦いが続いていた。我々は敵のプリテンダーを追って太陽系に突入し、戦いの中、互いに傷つき地球に不時着した……地球はその頃、人が洞穴に住み、石や動物の骨で獣を追う太古の時代だった。帰る船を失った我々は、人間の姿にトランスフォームし、ヤツらもまた己を変えた。悪魔の姿にだ。長い戦いの末、我々が勝ち、悪魔どもを地球の各地に封じ込めた。」

エレベーターが止まり二人は入り口へと足を運ぶ。

中は様々な機器があり、どこかの通信施設にも見えた。

「ここは……」

「やあ、ホークさん。お待ちしておりましたよ。」

そこには一人の男性がいた。

「あなたは学園長！」

千冬は驚いた顔で男性の顔を見た。

彼の名は、轡木十蔵。このIS学園の学園長である。

「これはこれは、織斑先生も来ていましたか。」

「学園長であるあなたがなぜここに……」

「千冬さん、その話は後で。学園長、ダイバーから来た映像は？」

「ええ、ちゃんとこちらに来ておりますよ。」

轡木は、パネルを操作すると映像が映る。

ガイスターが見ていた映像と同じものである。

「間違いない……ブラッドとギルマーだ。」

「やはり、この事件はガイスターが引き起こしたものでなかったのですね。」

「ええ、今までの彼らの行動を考えてみてもいきなり大勢の人間を無差別に巻き込むとは思えません。」

「二人とも一体何の話を……」

「千冬さん、さっき私は彼らを封印したと話しましたよね？」

「はい。」

「この映像に出てくる化け物は、ホークさんたちが封印したデストロンの『プリテンダー』そのものなのです。」

「え？」

「つまり……奴らは蘇ってしまった！」

テレテレ〜テテツ！テレレ〜テテン！マスタ————
フォース!! (アイキヤッチ)

海岸 コンビナート地帯

「ケケケケケケケケ!!」

一方、海岸にあるコンビナート地帯でイカのような怪物が破壊活動をしていた。コンビナート地帯はたちまち炎に包まれる。

この事態へと対処するべく自衛隊の武装ヘリコプター数機が対処にあたっていた。

「撃てー!」

ヘリに搭載されているミサイルを怪物に向かって発射するが怪物は怯む様子はない。

「くそー!IS部隊はまだ出撃できないのか!?!」

「無理を言うな!今はガイスターのせいでまともに出すことすらできないんだぞ!」

「ケケケケケケケケ!」

「しまった!うわああ!!」

イカの化け物は、頭部に取り付けられているレーザー砲でヘリを撃墜していく。化け物はコンビナート地帯から街へと進出し、街の人々は大混乱へと陥った。その光景をビルの上から面白そうに眺めている牛の角を持ったモンスターが見ていた。

「グフフフ、虫ケラどもが泣き叫んでおるわ。テンタキル、ブチ壊せ!皆殺しだあ!」

モンスター・ダウロスは、イカの化け物・テンタキルに命令する。そんなダウロスの元へ蝙蝠の翼を持ったモンスターが飛んでくる。

「ダウロス、抜け駆けする気か!?!」

「ブラッド、貴様のやることは生ぬるいのよ!」

「何い!？」

ブラッドは、不機嫌そうな表情になる。そんなブラッドに対してダウロスはやる気満々だった。

「おいおい、やめろよ2人とも。仲間割れしてるときか？」

魚人のような外見のモンスター・ギルマーが仲裁に入る。

地上ではへりに続いて戦車が出撃するが歯が立つことなく次々とテナキルに壊されて行った。

「派手にやれ! サイバトロンの連中を燻り出すのだ!」

ダウロスは大声で言う。しかし、誰も来る様子はない。

「まさか、怖気づいたんじゃ?」

「いや、必ず来る! ホークはそういうヤツだ!」

疑問に感じるブラッドに対してギルマーはそう言い張った。

IS学園 サイバトロン地下臨時基地

『奇怪な怪物の出現により、街は今パニックと化しています。近くの地域にいる方は速やかに……』

「どうやら……連中はあなたたちをおびき寄せているようですね。」

ニュースを見て榊原は言う。

「デストロンめ……スーツ・オン！」

ホークは瞬く間に強化服プリテンダースーツを纏う。千冬はもはや目を丸くするばかりだった。

「行くのですか？」

「ええ、奴らが動いている以上見過ごすわけにはいきません！」

ホークは再びエレベーターへ乗る。

「ホ、ホーク！待ってくれ！」

千冬もついて行く。

外に出るとホークは自分から離れようとしないうちに千冬に困っていた。

「千冬さん、私は行かなければならないんだ。放してくれ。」

「で、でも……あんな場所に行ったらホークは……」

「大丈夫だ、今仲間にも連絡して応援に来てもらう。」

「でも……それでも……」

「……仕方ない。」

ホークは、千冬の腹に向かって拳をぶつける。

「ホ、ホーク……」

千冬は腹を押さえる。

「私はサイバトロンである以上、デストロンの好きにさせるわけにはいかない。許してくれ。」

ホークは両手をクロスさせる。

「プリテンダー!!」

ホークの体が光に包まれ、巨大なロボットの姿・メタルホークへと変身する。

「ホークが……ロボットに……」

千冬が見ている傍ら、メタルホークは走る。

「トランスフォーム!!」

メタルホークは戦闘機へと変形し、飛び去って行った。

「ホーク……私は……もう、誰も失いたくないんだ……
一夏のように……見殺しにはしたくないんだ……くう！」
千冬は無理に体を動かす。

「デストロンが日本に現れた！繰り返す、デストロンが現れた！プリ
テンダー、集結せよ！」

メタルホークは世界各地に散っている仲間たちへと通信を送る。

今、宇宙海賊ガイスターが目を光らせている中、サイバトロンとデ
ストロンの戦いが再び始まろうとしていた。

本編 復活

『うう……ひ、ひと思いに……殺せえ!』

俺は、奴に負けた。既に死力を尽くした結果だ。奴にやられるのなら悔いはない。

だが、奴の口からは期待外れの答えが出た。

『そうはいかん!宇宙刑法により、貴様を逮捕する!』

逮捕するだと?

貴様の言う「命」、つまり俺の命を貴様に渡せと言うのか?

この期に及んで冗談ではない。

貴様に渡すぐらいなら……

『フフフフ……出来るかな?』

俺は、覚悟を決めた。

『エクスカイザー!貴様の思い通りにはならんぞお!』

俺は奴に「命」を渡すのではなく自らの手で消すことに決めた。

俺は太陽へと堕ちて行った。もはや後戻りはできない。

『命は宝だと……? ならば、この俺様の命、貴様の手に渡して

なるものかあつ!!　ワツハハハア——ツ!!』

俺は、勝負には負けたが最後にある意味で奴に勝った。

奴の言う「命」と言う宝。

その一つであるこの俺様の命を……………

???

「くそー！ここから出せー！」

一人の少年が見知らぬ倉庫のドアを叩きながら叫ぶ。

しかし、返事はなく虚しくなる一方だった。

「くそ．．．．．」

少年は叫ぶのをやめてしゃがみ込む。その隣では松葉杖を片手に持ったポニーテールの少女が寄り添っていた。

「二夏．．．．．私たちはこれから先一体どうなってしまうんだ？」

少女、篠ノ之箒は心配そうな顔で一夏の顔を見る。不安なのは一夏も一緒だった。

「正直言つて俺にもわからない。」

一夏は不安な顔を彼女に見せないように手で隠す。

「俺のせいだ……」

織斑一夏と篠ノ之箒は、小学生の時知り合つた幼馴染同士である。

小学一年の頃に同じ学級になり、どういう縁か彼女の実家である道場に通つていた。

最初の頃の二人は兎に角馬が合わず、たびたび衝突していたが二年の時、彼女がいじめを庇つたことがきっかけで徐々に打ち解けていくようになっていった。

しかし、小学校三年の終わり頃のある日、箒は学校への帰り道の途中でトラックにはねられた。この騒ぎは彼女の家族は愚か一夏も姉と双子の兄と共に病院に行くほどのものだった。

奇跡的に命はとりとめられたがこの事故の後遺症で車椅子での生活を余儀なくされる。

つまり、幼い頃からたしなんでいた剣道をすることができない体になつてしまったのことを意味していた。

これには家族よりも本人がショックだった。特に姉である束はひき逃げした犯人を許せないというほど怒りを露にしていた。

当の一夏は何も言えない状態だった。

そして、その数カ月後。

箒が退院したと同時に篠ノ之一家は引っ越すことになった。

別れの時、一夏は、姉弟で篠ノ之家を訪問していた。千冬はお世話

になっていた彼女の父親に礼を言っている間も一夏は何とも言えない顔で箒を見ていた。

箒の顔は以前とは違い気力を失っていた。しかし、どう声をかければいいのかわからない。兄の方は、日頃の道場の練習でやられていた仕返しなのか言いたい放題言っていた。

そんなことを考えながらも別れの時が来た。

箒は姉の束に車椅子を押ししてもらいながら車に乗せてもらおうとする。

一夏は迷ったが思いつきり叫んだ。

「箒！」

一夏の声に箒は振り向いた。

「次に会うときまで歩けるようになれよ！」

「え？」

「お前はそんなことで挫ける奴じゃない！医者だって言ってたじゃないか！『リハビリすればまた自分で歩ける様になれる』って！だから……諦めるなよ！俺は待つてるからな！」

「一夏……」

箒は思わず泣きながら頷いた。

思えば二人は共通点があったからかもしれない。

一夏には、優秀な姉と兄がいるが自分はどう見ても劣る。そのため周りからは「劣等品」やら「恥さらし」と言われることも珍しくもない。

一方の箒も優秀な姉を持っているため、劣る自分に劣等感を感じていた。

だからこそ二人は、ここまで意気投合できたのかもしれない。

その後、一夏の周りは変わることのない日常生活を続いていた。

そして、一夏が中学に上がって間もない頃、彼は姉の出場するISの大会第二回モンド・グロツソの会場に姉を応援しに行くことになった。本来は兄も行くはずだったのだが、体調を崩してしまったため一人で行くことになった。最も行きたがっていたのは兄の方だったのだが。

一夏も正直姉の優勝は確実だと判断していたためあまり行く気にはなれなかった。

だが、偶然にも会場で箒と再会することになる。

箒は、消息を絶った束のために家族全員を重要人物保護プログラムによってバラバラにされてしまっていたがそれでもリハビリは続けて松葉杖をつきながら歩くことができるようになっていた。

久しぶりの再会に喜ぶ二人。

特に箒は、一夏に片思いをしていたため一夏との再会が何よりも嬉しかった。

ところが世間話をしながら会場にいた二人をISのようなものを装着した謎の集団に拉致されてしまった。

そして、現在に至る。

???

「俺が……俺が箒と一緒にいなければ……箒はこんな目に合わずに済んだのに……」

一夏は頭を抱えながら小言で言った。

犯人の目的は、恐らく大会に出場している姉の決勝進出への棄権だろう。

そうでなければ誘拐するはずなどない。

でも、箒まで巻き込んでしまった。

そう思うと一夏は自分のことを憎く感じる。

「一夏……」

落ち込んでいる一夏の手を箒はそつと握る。

「大丈夫だ。きつと千冬さんが助けに来てくれる。それと……あまり、考えたくないけど姉さんなら……」

箒は少し嫌な顔をしながらも姉のことを言った。別に憎んでいるわけではない。

姉の夢は宇宙への進出でISもそのために作った。

しかし、姉は開発者でありながら政府から姿を消したため、箒は家族と離れ離れにさせられ、各地を転々させられるという羽目になってしまった。そのため、自分以上に自分勝手なところが多い姉に対しては苦手意識がある。

そんなことを考えていながらもドアの外の方から足音が聞こえて来た。一夏は箒を庇いながらドアから離れる。

ドアが開くとそこには銃を持った男たちを従えた女性が一人立っていた。

「出な、依頼者がお待ちだ。」

???

二人は目隠しをさせられて少しばかり歩かせられた。

一夏は不安ながらも疑問を感じていた。

連中は何をしようと言うのだろうか？

姉の棄権なら、要求が通らなかつたのなら自分をさっさと処分するはずだ。

なのにどうしてこんな目隠しまでされて連れて行かれるのか？

それがどうにも分からなかつた。

しばらく歩くと目隠しは外された。見る限りだと何かの実験施設の様だ。

しかし、二人が不穏に感じたのはその周りに立っている物だ。

どれもが巨大なロボットなのだ。

「おい、ドクター。依頼した奴を連れて来たぞ。」

女性は机に向かいっぱなしの女性に声をかける。容姿は茶髪のロングヘアでかなりの美貌を持った女性だ。女性は声をかけられているのに気付くなり驚く。

「やややあ!?!よく見たら『スクール』ちゃんところの『オータム』ちゃんじゃないの!」

「誰がちゃんだ!てめえ、ぶっ飛ばすぞ!」

オータムと呼ばれた女性は不機嫌そうな顔で女性に言う。

「まあまあ、落ち着きなさい!あまり怒ると皺が増えて老けるよ!」

「つたく、スコールの頼みじゃなかったらここで撃ち殺していたぞ。」
「うわああ〜こわああ〜い！この人。」

女性はふざけながら言うが後ろに控えていた一夏たちを見るなりはしゃぐ様に言う。

「あらまつ！依頼したの本当に連れて来てくれたの〜！それもおまけ付きで！」

「まあな、それで報酬のアレは用意してくれたんだらうな？」
「もちろんですとも。」

女性は一つのスーツケースを机の下から出すと中身をオータムに見せる。見た目は球体であるようだがそれ以外は何なのかさっぱり分からない。

「……確かにあるな。」

オータムはケースを閉じると自らのISを展開する。

「そんじゃ、また用ができたらまた来るからな。」

「あいよく！でも、そんな古臭いIS付けるよりもアレ使えばいいんじゃないの？」

「うるせえ！こんな物騒なもん易々使えるか！使うところを見るだけ気味が悪いつたら……」

「はいはい、それじゃあスコールちゃんによろしく〜！」

女性はハンカチを振りながらオータムを見送ると一夏の方を振り向き気味の悪い笑みを浮かべながら近寄る。

「やあやあやあ！初めましてだね！織斑一夏君！それと篠ノ之箒君！」

女性は二人の名前を言いながら挨拶をする。箒はやり取りが姉の束に少し似ているように見えたが姉よりも薄気味悪い何かを感じた。

「誰だよお前は!?俺たちをどうしようってんだ！」

一夏は警戒しながら言う。女性は少し抜けたような顔をしていたがすぐに答える。

「おっと、自己紹介がまだだったね。私の名前は『ドライアス』、ドクター・ドライアスだよ！ちよつとした『マッドサイエンティスト』つて奴だよ！」

「はあ？」

二人はドライアスと名乗った女性に対して口を開いた。

箒の姉である束もある意味ではマッドサイエンティストなどところはあつたがどうもこのドライアスは少し変だった。

(ドライアス……どつかで聞いたような……)

「信じられない？無理もないよね！でもね、私はそんなことどうでもいいんだ！」

ドライアスは、そう言うときオータムに渡したのと同じものを二人の前に見せる。

「これは何に見える？これはね、あの篠ノ之束すら作ることもできない『IS』すら超える代物だよ！」

「ISすら超える物!？」

二人は余計に状況が読めなくなった。

現在、ISよりも上回る兵器は存在しない。

しかし、ドライアスは平然とした態度でそのことを言っているのだ。

一夏たちはまさかと思いつつ周りに立っているロボットたちを見る。

「いやあく私はロボットアニメが大好きだったんでね。まあ、女でロボットアニメ好きだつて言われて馬鹿にされていただけ……でも、ロマンがあるでしょ？」

「ロボットアニメ？ああ、『太陽の勇者ファイバード』か。懐かしいな。でも、あれは最終回泣けたな。」

「一夏と私が剣道以外で共通の趣味の一つだったからな。私は玩具はさすがに買ってもらえなかったけど……」

「ファ、ファイバード……」

二人は、懐かしそうに言う中、ドライアスは一瞬不機嫌そうな顔になるが話を続ける。

「そして、これはISすら成しえなかった人類の進化のための能力！これは人体に取り込ませることによつて人間の肉体を分子から組み替えなおしてボディをISを纏っているのよりも優れたロボットの

体へと変化させることができるのだ！これを私は『DC（ドライコア）』と呼んでいる！そして……」

ドライアスは、そう言った直後『DC』を一夏の胸へと押し付けた。「ゲッ!？」

DCは、一夏の体に吸い込まれるように入ってしまった。

「ぐ、ぐわあああああ!？」

一夏はもたえ苦しみながら倒れた。

「一夏!？」

「ありや？失敗か？世界最強の弟なら普通に耐えられると思ったんだけど……」

「貴様！一夏に何て事をしてくれるんだ!？」

箒は、一夏を支えようとしながら言う。

「いやね〜これ取り込んで生きて人間今のところ『ゼロ』なのよ。だから世界最強の弟ならうまく行くと思ったんだけどね……」

ドライアスは言い訳をしながらももう一つDCを出し、箒へと近づく。

「ま、まさか……」

「うん、こっちはもう死んじゃうと思うから次はその世界最強にも劣らぬ友人の妹に……」

ドライアスは不吉な笑みを浮かべながら箒に近づく。

「い、嫌だ……」

「無駄無駄無駄。君じゃ私から逃げきれないよ。ウフフフ……」

(く、苦しい……………!?)

一夏は薄れかけている意識の中奇妙な残像を見た。

それは二体のロボットが戦っている姿だった。

(この光景……………どこかで見たことがある……………でもどこで……………)

一夏がそう考えていながらも現実で箒の悲鳴が聞こえた気がした。

(箒が……………俺が……………俺が守らないと……………守る？どうして俺が箒を守るんだ？……………!)

『貴様、それほどまでしてこのガキが大事か……………』

『大事なのはコウタだけではない。この宇宙に生きるすべての生命が大事なのだ!』

『このちっぽけな地球人の命を守るために、自分はどうなってもいいというのか?』

『どんなに小さくとも、命は宝だ! たとえそれが、貴様のような悪党の命であつてもな!』

(……………そうか……………ようやく思い出した。)

一夏は、何かを思い出した。

(エクスカイザーめ、余計なことを思い出させてくれたな。まあいい。これでようやくわかった。箒は……この俺の……俺様の……)

(このダイノガイストの「宝」だ。)

「い、嫌だ……」

「無駄だよくん！ここは私の秘密実験場の一つだし、誰にもわからなくらい！だ・か・ら、君も実験台になりなさい！」

ドライアスは笑いながら箒の胸にDCを押し付けた。DCは見る間に箒と同化していく。

「いやだ！助けて！助けて一夏！」

「だから、彼は死んじゃうんだって。ここにあるロボットはみくん、実験で失敗した素体たちなんだから。」

ドライアスはさらに不吉な言葉を言いながら笑う。

『やめろ。』

そのとき後ろから聞き覚えの無い声が聞こえた。

「およう？今のは誰の声？」

ドライアスは、箒にDCを押し付けるのをやめて後ろを振り向く。後ろには恐竜の姿をした巨大なロボットが立っていた。

「あり!?君はもしかして一夏君!?でも、おかしいな?そんな怪獣の口

「ボットいたっけ？」

「ドライアスは一夏？を見ながら言う。

「うんうん、いつか。見た感じ失敗作のようだし。」

「ドライアスはそう言うの一つのリモコンを取り出す。

「失敗作には用はないし。」

リモコンのボタンを押すと周りのロボットが突然と動き出す。

『むっ。こ、これは……………』

「ムフフフ、この周りのロボットは失敗作と同時にこの私のガードロボットでもあるのだ！さあ、あの失敗作をやっつけておしまい！」
ドライアスの指示の元、ロボット軍団は、次々と一夏？に襲い掛かる。

『ふん、小賢しい！』

一夏？は怪獣の如くロボットを破壊していく。あるものは足で踏み潰され、あるものは尾で叩き潰し、あるものはかみ砕いってしまった。

「あちやば……………」

『こんなものを使うとは随分地に堕ちたものだな……………』
「ドライアス。」

「なぬ!？」

『チエンジツ！ダイノガイストオ!!』

恐竜はたちまち変形し、巨大なロボットの姿へと変える。その姿を見てドライアスは唾然とする。

「き……………貴様はダイノガイスト!?そんな馬鹿な！ブリュンヒルデの弟のクソガキが貴様だったというのか!？」

ドライアスは突然口調を変えた。

『その反応を見る限り本物のようだな。かつて自らを宇宙皇帝と名乗っていた貴様がまさか人間の女になっていたとはな……………さっきの筈との会話を聞く限り貴様……………一度死んだな?』

「黙れい！それは貴様とて同じではないか！」

ドライアスは焦った顔で後ろに下がり始める。

『どうした？昔みたいはこの俺とやり合わないのか?』

「ふん、この俺様を心配する前に後ろにいる女の方を心配するべき

じゃないのか？」

『何？……！箒！』

ダイノガイストは、後ろでうずくまっている箒を見るなり慌てて近寄る。

「この間に俺は失礼させてもらう！」

ドライアスは、胸のポケットからボタンを出すなりスイッチを押す。すると巨大なロボットが彼女を手に乗せて飛び去ろうとする。

『貴様！』

「生憎、貴様を復活させた実験は失われたこの俺様が再び元の肉体を取り戻すためのテストだ。亡国企業に売り渡しているのもそのサンプル、せいぜい大事な女の最期を看取るんだな！」

ドライアスは、叫ぶとロボット共に天井を突き破り飛び去って行ってしまった。

『箒……そんな……』

ダイノガイストは、倒れている箒を抱きかかえる。

『い、嫌だ……お、俺の宝が……』

ダイノガイストにはどうすることもできなかった。

『所詮俺は、奪うだけの存在なのか？人間として生きてきた意味は何だったのだ？』

ダイノガイストは、箒を抱きしめる。

『死なないでくれ箒！俺は……俺はやっと手放したくない宝を見つけたというのに……』

ダイノガイストは思わず叫ぶ。

「……一夏？」

自分の顔のすぐ脇で聞き覚えのある声が聞こえた。ダイノガイストは思わず隣を見る。

『……箒？』

距離を置いてみると箒がきよとした顔でダイノガイストを見ていた。

「一夏……これは一体どういう事なんだ？私もお前と同じようにあの変なものを……って、何だこの姿は!？」

箒は自分の体を見て驚く。

私服だったのとは別に全身鎧のようなもので体が覆われていたのだ。

『お、お前も・・・ロボット生命体になってしまったという事か?』
ダイノガイストはどういうことか不思議に考えるが取りあえずここから離れることにした。

『取りあえず、ここから離れるぞ。』

ダイノガイストは戦闘機へと変形し、箒を乗せる。

「なあ、一夏。」

『ダイノガイスト様と呼べ。』

「えっ?」

『・・・詳しいことは後で話す。お前の体と俺の体の異変についても調べる必要があるしな。』

ダイノガイストはそう言うのと空高く飛び去って行った。

「あれ〜おっかしいな〜!?確かにここにいつくんと箒ちゃんの反応があったのに。」

二人が去った数分後、東はドライアスの抜け殻となったアジトに来ていた。

「それにしてもこのロボットは……」

東はダイノガイストが破壊したロボットの残骸を見ながら黙る。

「……二人に何か起きていなければいいけど。」

これは生まれ変わって復活した元エネルギー生命体とその幼馴染の少女の物語である。

空白

とある無人島

ドライアスのアジトから去った後、一夏……ダイノガイストと箒はとある無人島の洞窟で身を隠していた。

『……………』

「な、なあ、一夏……あとのくらい私はこうしていればいいんだ?」

箒は目隠しをかけられた上に下着の格好にされ寝かされていた。ダイノガイストはそれを黙ってじっと見ている。

『……………ダメだな。取り出せるかと思ったがああ奇妙なものは俺同様に完全に人体と融合してしまっている。』

ダイノガイストはセンサーを解除し、箒の体に衣服をかけると目隠しを外す。箒が起き上がると隣では人間より少し大きいぐらいのダイノガイストが顔を手で押さえながら座っていた。

『ドライアスの奴め……………とんだものを作ってくれたもんだ。この俺はともかく箒にまで……………今度会ったら八つ裂きにしてくれる。』

「一夏……………」

『ダイノガイストと呼べ。』

ダイノガイストは敢えて箒に一夏と呼ばせないようにする。しかし、箒にとっては一夏と言う呼び方の方がいいようだ。

「その……………何かわかったのか? 私やお前の体に何が起こっているのか?」

『……………』

「な、なぜ黙っているんだ!? そんなに重症なのか!」

『……………一言で言う。俺たちはもう普通の人間ではない。』

「えっ?」

ダイノガイストの一言に箒は思わず口を開く。

『正確には普段の体は人間と変わりない。だが、状況に応じて俺たちは自分の肉体を高速で切り替えることができるのだ。要は長い歴史

をかけて進化するものを瞬時にするようなものだ。』

「え……えつと……つまり……」

「どうやら今の言い方はわかりづらかったようだ。」

『……つまり、カエルの幼体が一気に成体になるように俺たちの体は人間とロボットの姿を使い分けることができるという事だ。』

「と言うことは私たちは既にロボットと人間の中間……ロボット生命体と言うのか？」

『大体で言えばな。本来ならあのドライアスが埋め込んだDCというヤツを取り出してやりたかったがここまで同化したのでは俺でもどうすることもできん。』

ダイノガイストは洞窟の外を見ながら立ち上がる。

「……これからどうすればいいんだろう、私たちは……」

箒は服を握り締めながら不安そうな顔になる。

『お前が心配する必要はない。おそらく束が俺たちのことを探しているはずだ。お前を彼女の所に連れて行けば同化してしまったヤツを取り出す方法が見つかるだろう。』

ダイノガイストは普通に言うがその言葉に箒の態度は一変する。

「ね、姉さんに渡しを引き渡す?!いい、一夏はどうするんだ!？」

『……お前に答える義理はない。』

「言ってくれ!お前……言つてたじゃないか!私を『宝』だつて!」

『……「宝」だからこそお前を引き渡すんだ。』

「嫌だ!一夏と一緒にじゃないと嫌だ!どうして私は一緒に居ちゃいけないんだ!どうしてだ!どうし……」

『いい加減に黙れツ!!』

「ひっ!」

ダイノガイストの怒鳴り声に箒は思わず目を丸くする。

『俺は織斑一夏ではない!俺はダイノガイスト!宇宙海賊ガイスターの首領、ダイノガイスト様だあ!!易々俺に呼び掛けるな!!』

「……う、う……」

ダイノガイストに怒鳴られて箒は泣き始める。少々乱暴なやり方

だったがこれでいいと思った。

(俺はもう帰れる場所がないからな………だが、箒にまで俺と同じことをやらせるわけにはいかん。)

これはダイノガイストなりの配慮だった。

自分と共に行動していても恐らく箒を元の普通の人間に戻すことは不可能だろう。

しかし、束なら可能性がある。

なら、彼女に引き渡して元に戻る研究をしてもらおうべきだと考えたのだ。それがおそらく唯一の方法だ。

『ふう………では早速ここに特殊な発信音を………』

ダイノガイストが作業を始めようとした瞬間、箒が彼の後ろからダイノブレードを一本引き抜いた。

『ぬっ!?き、貴様!どういうつもりだ!』

ダイノガイストは後ろを振り向くと箒はダイノブレードを自分の首に向ける。

「ど………どうしても一緒に居させてくれないなら私はここで死ぬう!!」

『何イ!?!』

「もう一人でいるのは嫌だ! やつと………やつと一夏に会えたのに………姉さんに預けてもらっても姉さんのことだ。私を実験サンプルにするか、適当に誤魔化して私を元の生活に戻すだけだ! それなら………いつそこここで………」

『ほ、箒………』

「う、ううう………」

『お前………歩けるようになったのか?』

「………え?」

箒は、自分をよく見る。

杖なしで歩いている。

あまりのショックで気がついていなかったが自分の足で歩いているのだ。

DCの影響なのは確かだが確かに歩いているのだ。

「あ……あ……あ……」

箒は驚きのあまりにダイノブレードを落とす。

「歩ける……昔みたいに自分の足で歩けるようになってる！」
箒は思わず喜んだがその隙にダイノガイストはダイノブレードを拾ってしまう。

「あつ……」

喜びも束の間、箒は悲しい顔になった。だが、ダイノガイストは黙ってダイノブレードをしまうと箒を抱きしめた。

「一夏……」

『……ここまで強情とは……流石、俺の「宝」だな。』

「え……じゃあ……」

『お前がその気なら俺の傍に置いてやる。だが、耐えられないなら速攻で束の所へ送る。それでいいな?』

「う……うん。」

箒は、ダイノガイストの顔に思いっきりキスをした。ダイノガイストは少しやれやれという顔をしたがすぐに箒を抱きかかえると洞窟の奥へと歩いて行く。

「これからどうするんだ?」

『聞いただろう?俺たちは海賊だ。なら目的は一つ……』

『「宝」を奪う事だ。』

一年後 ドイツ軍基地

「ここが織斑教官の部屋です。」

「ありがとうございます。」

少年は案内をしてくれた軍人に頭を下げる。軍人が去って行くのを確認すると少年はドアをノックする。

「……………誰だ？」

「俺だよ、千秋だよ。千冬姉。」

千秋と名乗る少年は、ドアを開ける。中に入ると大きい段ボールをいくつか積み上げた部屋で一人の女性が片づけをしていたところだった。

「千秋……」

女性は千秋を見るなり彼に近寄る。

「久しぶり、千冬姉。」

「すまないな、わざわざ迎えに来てくれるなんて……」

「来るに決まってるじゃないか。一年前のあのことを考えれば……」
千秋は困った顔で言う。

「あの時は本当にびっくりしたよ！風邪で寝込んでいるときに突然束さんが来たかと思いきやドイツまで連行されるし、着いたら着いたで一夏が行方不明になったショックであり得ないほど号泣していた千冬姉がいたし……全く、あんな姿見せられたんじゃないや待っている方が逆に心配だったよ。」

「ははは……あの時は本当にすまなかつたな。」

千冬は申し訳なきような顔で言う。その顔を見て千秋は少し違和感を感じた。

「……やっぱり、一夏がいなくなった時のことを引きずっているんだな。」

「……ああ。」

千冬は寂しそうな顔で机の上になる写真を見る。ずいぶん昔なのかそこにはランドセルを背負っている少年二人と千冬の姿があった。

「千冬姉、正直言う俺、後悔しているよ。一夏に冷たくしていたことを……」

「千秋。」

「俺……昔二人に比べて体が弱かっただろう？その分勉強ができて周りからは認められていたけど……でも、俺よりもやりたいうことができた一夏がどうしても羨ましかったんだ。」

「お前な……」

「確かに俺は周りから『天才』って言われていたよ？武の千冬と文の千

秋って、周りから言われていたんだよ。それで特に突出したところがない一夏は『出来損ない』。」

「……………今思えば皮肉な呼び名だな。」

「俺は確かに天才だったのかも知れない。でも、昔は体質のこともあって家に引きこもり。それに比べて外でやりたいことができた一夏が羨ましくてたまらなかったんだ。自分にできないことをできたあいつがどうしても許せなかったんだ。」

「……………そんなことがあったのか。」

「……………もう、あいつに謝ることもできない。全く、今頃どうして
るんだろう。」

「……………」

「悪い、嫌なことを思い出させちまったな。」

「気にするな。」

「じゃあ、早く荷物まとめて空港に急ごうか？早くしないと予約の便
が来ちまうよ。」

千秋はそう言いながら千冬の手伝いを始める。

「そうだな。」

千冬は机を開ける。すると思わず涙が出た。机の中には姉弟が
揃った写真がある。

「一夏……お前はどこに行ってしまったんだ……」

同じ頃 無人島

『ほら、もう少しだ。』

ダイノガイストは目の前にいる赤のパーソナルカラーの戦闘機に言う。

『チェ……チェエンジン!!』

戦闘機は見る間に変形し、女性のフォルムのロボットへと変わる。

『ハア……ハア……やっと思えた。』

『ふむ……変形にかかる時間はもう少し短くせんとな。』

ダイノガイストは、考え込んでいると女性型ロボットは抱きつく。

『一夏、今回ののはどうだった?』

『この姿の時はその名で呼び名というのに……まあまあだ。』

『あれでまあまあか……』

女性型ロボットは残念そうな声で言う。

『褒めたつもりで言ったんだが……』

『そうなのか!』

『全く、もう少ししたらお前も一緒に行動できるようになるんだぞ、
箒。いや、ジェットガイスト。』

ダイノガイストはそう言うのとジェットガイストを傍に寄せる。

『……一夏。』

『うん?』

『今夜も……』

『今日はどこにも行かん。安心しろ。』

『うん。』

ジェットガイストは、ダイノガイストを強く抱きしめる。

???

『おい、早くしろ!』

この四つの球体が何だったのかは後程。

まいどー宇宙商人

無人島

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・なあ、一夏。いつもこの時間になって思うんだけど・・・・・・・・これ、どうにかならないのか？」

ジェットガイストから人間の姿に戻っている筈は、ダイノガイストの隣で言う。ダイノガイストの隣にはどういう訳か船やら戦闘機やらいろいろ置いてあった。そして、目の前にはどこから奪って来たのか待機状態のISが山積みになっている。

そんな二人の目の前に赤い球体が飛んできた。

『やーやーお久しぶりでんなあ、ダイノガイストはん！』

『・・・・・・・・時間通りだな、宇宙商人トレイダー。』

『ホーキはんもお久しぶりでんな！ただでさえデカイ乳と尻がさらにデカくなってもうて。発育良すぎまへんか？』

トレイダーに言われた筈は思わず顔を赤くする。

「そ、そんなことは・・・・・・・・」

気にしていることを言われて何も言えない筈を見てダイノガイストは助け船なのか話を切り替えさせる。

『トレイダー、これが今回の宝だ。』

『ほほ〜これはまた珍しいもんばかりで。ほな、ちよつと見せてもらいますか。』

赤い球体は、手前に置いてある少し旧型のカメラに乗り移る。

『チェーンジッ！トレイダーでおます！』

カメラはロボットへと変形した。トレイダーは、早速物を調べ始める。

宇宙商人トレイダーは、かつてガイスターから盗品を買い取る宇宙商人であった。非合法の品を主とする商人で、かつては宇宙規模で見てもかなりのネットワークを持つ大商人だったが取引先であった宇

宇宙海賊ガイスターがエクスカイザー率いる宇宙警察最精鋭チーム『カイザーズ』に敗れ、死亡したダイノガイストを除いたメンバーがすべて逮捕され、ついでに自分も逮捕されてしまった。運よく逃げられた彼は、ガイスターのメンバーと別れこれまで扱ってきた品を全て持って別宇宙へ逃亡することにした。旅の途中、他の宇宙商人にまで狙われ、宇宙中を逃亡しているうちに誤って宇宙船ごとブラックホールに呑まれる始末。そして、流れ着いたのがこの地球だった。

しかし、この地球の人間の多くは「女尊男卑」の社会によって取引が難しいかと頭を悩ませていた。そこへ白羽の矢が立ったのが彷徨っているときに偶然見かけたダイノガイストたちだった。ダイノガイストの死亡は既に耳にしていたため流石のトレイダーも目の前で見たときかなり驚いていた。

それはダイノガイストにとつても好都合だった。

正直言つてダイノガイストはこの地球からさっさと去りたいと考えていた。

女尊男卑に染まった世界に嫌気が差していることとかつて戦ったことがあるドライアスがいたという事もあるがそれよりも気にしているのがかつての自分の肉親だった。この星にいつまでもいればいずれば自分と接触することになる。そうなれば実力の差が分かっているながらも戦わなくてはいけなくなる。それは避けたいと思つてた。

だが、それには厳しい条件があった。

その一つは自分自身がかつてのエネルギー生命体ではないため地球から出た後の移動に制限が出てしまうことだった。今のダイノガイストは人間でもあるのだ。それに筈もいる。地球を去るにはそれなりの光速以上に移動できる宇宙船が必要になる。

幸いトレイダーの扱う商品の中には手頃な宇宙船があった。しかし、トレイダーは、過去にダイノガイストに見捨てられたことを根に持っているのか、中々売ろうとはしない。かつてなら脅しをかけて強引に売らせるのだが筈がそのたび泣き顔になってしまったため、地道にこの地球の宝を売っているのだ。最も変なノルマを決めるように

なっただが。

『へー……ふむふむ……ホー……』

トレイダーは並べられた品々を見ながら電卓のような機器を取り出し、計算を始める。

『なるほど……これは掘り出しもの山かもしれへんな……』
トレイダーは頭からプロペラを出し飛びながらさらに調べる。その光景はどこかの漫画の猫型ロボットの秘密道具を使っているようにも見えなくない。

『ダイノガイストはん、この品々いただきまひよ。10億でどないでっか?』

『……安い。』

『んんんんんんん、20億でどないでひよ?』

『……まだだ。』

『ウんんんん……なら出血大サービスで35億でもらいまひよ。』

『50億だあ!!』

『ほわあっ!?!』

ダイノガイストの怒鳴り声にトレイダーはビビる。

『全く、ダイノガイストはんには敵わんな……。しゃーない、新婚サービスも兼ねて奮発で50億出しまひよ!その代わり品は先にもらつてよろしいでっか?』

『好きにしろ。』

『ほなほな……ほんじゃ、中の荷物ももらつていきまっせ。』

『いらぬなら宇宙に捨てても構わん。』

中の荷物とは、彼の最も嫌うものである。

トレイダーは品の上の飛んでいくと重力光線のようなものを出し、船などを浮かせる。船の中では何やら無数の人影があったがトレイダーはお構いなし。

『ほな、末永くお幸せに。』

『おい、さつきから気になっていたが新婚とはどういうことだ?』

『え?違うんでっか?ホーキはん、ダイノガイストはんの嫁はんなんでっしやろ?』

トレイダーは不思議そうに聞く。二人は思わず顔を見合わせた。箒の顔は既に真っ赤になっていた。

『こんなべっぴんな嫁はんもろおて………ほんじゃ、わてはこのくらいで失礼させてもらいます！今後もよろしゅうお願いしますわ！さいなら。』

トレイダーはそう言うと言品をもって飛んで行ってしまった。ダイノガイストは無言であったが箒は顔を両手で隠している。

『………今後の計画でも練るか。』

ダイノガイストは全高を2メートルぐらいに縮め、洞窟の奥へと戻っていく。箒は彼の手を握る。

『………一夏。』

『なんだ？』

『………む、胸の大きい女は嫌いか？』

『………そんなことはない。お前は、俺の「宝」だからな。』

『ほっ。』

箒は何気に安堵の一息をした。するとダイノガイストの腕に胸を強く押し付けた。

『今夜も一緒に寝ていい？』

『………勝手にしろ。』

ダイノガイストは少し呆れた態度で箒に返事をした。

翌日 ???

「……………」

束は無言でパソコンを操作していた。

「束様、お食事です。」

銀髪の少女が何やら黒いゲル状の物体をのせた盆を束の前に置く。

束はそれを何も言うことなく啜る。

「……………妹様の行方はわかりましたか？」

「……………全然ダメだね。束さんが総力を結集して調べても何一つわからない。こんなこと初めてだよ。」

束は頭を抱えながら天井を見上げる。

今まで自分の思い通りにならなかったことはこれまで一度もなかった。どれも自分の計算の内に入っていたからだ。

しかし、今回に限ってはどうにもならなかった。

一夏と筈が行方不明になってから既に一年以上、ここまで探して見つからないのは明らかに謎だった。特に筈に関しては体が不自由なのだからわずかな情報が入ってもおかしくないというのに。

「はあ……………完全に束さんの一生に失態だよ。いつくんどころか

箒ちゃんまで行方不明にさせてしまうなんて……」

東はそう言うのと食事を再開する。

「それよりも東様、そろそろ例の宇宙商人が来訪して来る時間帯です。」

「えっ？もうそんな時間？それじゃあ急いで準備をしないとね。クーちゃん、悪いけど彼の体用意してあげて。」

「かしこまりました。」

30分後

「う~~~~ん~~~~遅いな~~~~」

「すでに予定時間を十分オーバーしています。」

東たち二人は場所をかけ、とある倉庫に来ていた。

「クーちゃん、本当にこの場所であってるの？」

「東様が指定した場所ですよ。」

「それもそうだね……」

そう会話していると二人の前に赤い球体が飛んできて手前に置いたテレビに憑依した。

『どうも〜！おぼんです〜！遅れてすんませんな！宇宙商人 트레이ダーでおます。』

「予定時間を過ぎるといふのは商売をするものとして問題があると思
います。」

『クロエはんは厳しいなく。実はこつちに来る前に前の仕事の品を運
んでいたもんでさかい、堪忍してや。』

トレイダーは申し訳なさそうに頭を下げる。

『そんな代わり、できる限りのサービスはしまつせ。』

「あのさ……トーくんに前から聞こうと思ったんだけど、束さん
たちの前に取引している人ってどんな人なの？」

束は元気がない声で聞く。

『ああ、わたの昔からの取引相手ですわ。昔わたのこと見捨てようと
しはったから取引に応じんと決めとったんやけどべっぴんな嫁はん
おったから勘弁してはったんです。』

「その人ってどんな人？」

『あきまへんな束はんは。これ以上先のことは情報料取りまつせ。』

「いいよ……私は僅かでも新しい情報が欲しいから。」

束は、クロエに持っていたスーツケースの中身を見せる。

「現段階で世界のどこにもない第四世代型IS『白椿』。本当は箒ちや
ん専用開発を進めていたんだけど箒ちゃんがいなくなつたから束
さんの情熱が冷めて色も見事に白……」

『箒？奇遇でんな。実はさっきの取引の嫁はんも同じ名前の人でつ
せ。』

「そう……へっ？トーくん、今なんて言った
？」

束は顔色を変えてトレイダーを見る。

『せやから束はんたちの前の取引相手の嫁はんの名前がホーキはんつ
て名前でんねん。』

トレイダーの一言に二人は目を丸くした。

「トーくん、お願い！すぐにその人の所に案内して！」

『へっ？いきなり何言ってますん？』

「その人が私の妹かもしれないんだよ！？その人の特徴は!？」

『えつと……バカデカイ乳と尻、黒髪のポニーテール娘さん』

さかい。』

「特徴は全く妹様と一致します。」

「お願い！代金は弾ませるよ!!」

東の必死の頼みにトレイダーはビビるがすぐに首を横に振る。

『あかんあかん！そんなことできまへん！そんなことしはつたらわて、ほんまに殺されてしまんねん。』

「お願いだよ！取引相手には私から話すから！それと男の子はいなかった？」

『男の子？はて、そんな人はいまへんでしたな？』

「取引相手はどんな方なのですか？」

クロエの質問にトレイダーは慎重に答える。

『取引相手は「ダイノガイストはん」って言うわての馴染みの客人や。言つときまつけど、怒らせたら危ないで。』

「かわいそうな箒ちゃん……そんな恐ろしい相手に捕まってるなんて……」

『いや、ダイノガイストはんとめちやラブラブやったで。』

「何……!?」

『確か愛称は「イチカ」って言って……』

無人島

「……………」

ダイノガイストは、一夏の姿に戻って簡素なベッドで眠っていた。すぐ傍に箒が眠っている。

「……………一夏……………」

「……………なんだ？」

「……………その……………」

「やらんぞ。」

「体が熱くて仕方ないんだ……………」

「……………朝、風呂に入りなおすのが面倒だ。」

「……………」

「……………どうなっても知らんぞ。」

箒は思い切ってキス……………接吻をした。

二人は既に離れられない関係になっていた。

翌朝 無人と近くの近海

『ほんまに行くんでつか？わいが何を言うてもダイノガイストはん、キレたら止められまへんで。』

トレイダーは怯えながら東に言う。

「いつくん、箒ちゃん！今東さんが行くよ〜〜!!」

東は移動式のラボでダイノガイストのアジトに乗り込もうとしていた。

『わてどうなっても知らんで。』

トレイダーは震えながら言った。

土下座

無人島

「……………何で毎朝こうなるんだ。」

ダイノガイストは目の前の光景を見ながら思う。目の前には髪を解いた箒の後姿があり、自分の体に乗るようにして一緒に風呂に入っていた。

「……………箒。」

「ん？」

「……………せめてタオルだけでも自分の体に巻け。と言うよりはなんでもいつも一緒に風呂に入らねばならんだ？」

「だって……………一夏と一時も離れたくないんだもん。それに……………一夏に抱きしめられていたいから。」

「……………」

箒のさり気ない言葉にダイノガイストは黙るしかなかった。

「……………風呂から出て、朝食を終えたら今後の計画を言うからな。」

「はい。」

箒は笑いながら抱きつくのであった。

無人島の砂浜

「ここがガイスターの本拠地か。」

箒がいちやついていた頃、束は密かに無人島に上陸していた。

『あの………ほんまに行くんでつか?』

後ろでは 트레이ダーが心配そうに言う。

「うん、許してはもらえないだろうけど。」

『許してもらえんなら行かんほうがあええがな!束はん、ダイノガイストはんに殺されまっせ!』

「大丈夫だよ、トーくんには被害が出ない様にしてあげるから。それじゃあ、束さんの超ビックリドッキリメカ『束マウス軍団』発進!!」束がボタンを押すと同時に小型のネズミの様なメカが無数にダイノガイストが潜んでいると思われる洞窟へと潜入していく。

「さあ、いつくんと箒ちゃんは何をやって………ブツ!?!」

次の画像を見た瞬間、束は鼻血を噴出した。

『およ?一体どなんした………ありやりや………』

鼻血を噴出していた束を見ながら 트레이ダーは何となく察した。

『いくらなんでも風呂の盗撮はあかんがな。』

そこには風呂でいちやついている二人の姿があった。但し………タオルは巻いていない。

『んんんんんでも、AVとして売れば売れつかも………あかん、そんなことはしたら本当にダイノガイストはんに殺される………』

トレーダーは束の鼻にティッシュを詰めながらそう思った。

『ムムム………箒ちゃん………いつの間についてくんとそんな関係にまで発展していたとは………束さんはうれしいよ………』

『もう帰った方がええがな。これ以上関わるとわてら本当に………』

「大丈夫だって!ほら、風呂から出て来た!」

束はモニターを見ながら二人の観察をする。

『束はん、これってプライバシーの侵害ちゃうか?』

「バレなければいいのだよ!バレなければ!」

東はモニターで黙々と観察を続ける。食事を終えるとダイノガイストは本来の姿へと戻り、箒も中間形態へと変化する。

「おお……流石箒ちゃん、ボディーラインがピッチピッチだね〜！」

『あかん……これ以上関わつたら、わて、本当に殺されてもう……』

「何やら計画を話しているようですね。」

「クーちゃん、音量を上げて。」

クローエは盗聴するため、音量を上げる。するとダイノガイストの声がラボ内に響いてきた。

『これまでは「ドライアス」の行方を掴むために亡国機業の支部を虱潰しに叩き潰してきたが一向に手がかりが掴めん。拾ったものといえば連中が使っていたISと 트레이ダーに 奴隷として売り飛ばしたIS最強思考のバカ共だけだ。』

「それでも十分すごいことだと思うが……」

『このままでは埒が明かん。それに宇宙船を買える金額になるまでまだ資金が足りん。だから、今回はIS企業の一つを襲う。』

「狙う場所は？」

『フランスの「デュノア社」だ。量産機ISのシェアが世界第3位の大企業だが、第三世代の開発が遅れているからいずれは消える。だから、あの企業のISコアを全ていただく。』

「一夏。」

『ん？』

「今まで売り飛ばしたISはみんな亡国機業の物だったからそこまで騒ぎにはならなかったが今回ののはさすがに大騒ぎになるんじゃないか？」

『フフフフ、それも狙いだ。』

「えっ？」

『ガイスターの存在を見せつけ、現在世界最強の兵器と言われている

ISの下らぬ思想を徹底的に破壊する。今回の計画もそのうちの一つよ。』

「女尊男卑の社会を崩壊させるというのか?」

『元はといえば俺たちの肉親によって引き起こしてしまった世界だ。なら、俺たちがこの星を去る前にやっても悪くはない。』

「ああ……そうだな。この間のハッキングで白騎士事件が姉さんたちが引き起こしたというのもわかったし。」

箒は納得しながらダイノガイストに寄り添う。

『それにドライアスのことだ。俺たちが暴れていれば焦りで尻尾を出す。そのときは叩き潰してくれる!』

ダイノガイストは目を光らせながら言う。

「……………」

『東はん、どないします?』

「……………」

東は黙ってラボの外に出る。クロエも何かを察したのか後ろに着いて行く。

『ちよつ!?どこへ行くくんや!?外に出たら仕掛けてあるセンサーに反応してしまっせ!!』

トレイダーは慌てて二人を取り押させようと頭部からプロペラを出して止めよとするが時すでに遅く、センサーが反応してしまった。

『あ!あかん!もうこれはどうにもなりまへん!わてだけは先に失礼させてもらいまっせ!!』

トレイダーは体から分離しようとしたが島のいたるところに罠が設置されてあるため、あつさり、ネットで捕らえられてしまった。

『あ~~~~~~~~わての人生ここでオワタ／＼(o^o^o)／』

『人間が……この島にノコノコとやってくるとは命知らずな奴らだ。』

ダイノモードのダイノガイストを目の前に束とクロエ、そして、トレイダーはロープで拘束されていた。ダイノガイストの肩の上にはジェットガイストの姿へと変わった箒が乗っている。

『トレイダー……まさか貴様が案内して来るとはな。』

『い、いや……その……』

『貴様のおかげで仮の基地であるこの島を捨てなければならなくなつた。この責任どうしてくれるつもりだ?』

ダイノガイストはトレイダーに詰め寄った。

『堪忍してえなく! わてだって好きでこんなことしてるわけじゃないんやで! 客人に手頃な無人島はないかって聞かれて見せに来ただけやさかい!』

トレイダーはトレイダーなりに束を庇おうとしていた。しかし、それが逆に怪しまれた。

『ほう? 俺様の居場所を知っているはずのお前がなぜここを紹介するんだ?』

『あつ……(やってもうた……)』

「トーくんは悪くないよ。」

焦っているトレイダーの隣で東は冷静な顔で言う。

『女、お前とは話していない。話をしているのはこの宇宙商人だ。』

「うんうん、トーくんは、ここへの案内をしてくれただけ。私の依頼でね。」

『……それで何をしに来た?』

ダイノガイストは東の方をじっと見ながら言う。

「君たちに謝りに来たんだよ。」

『……なんだと?』

「もう他人の様に話すのはやめようよ、いつくん。箒ちゃん。」

東は真面目な顔で言う。ダイノガイストはしばらく黙った。

『……貴様、何を勘違いしている?』

「隠さなくてもいいよ。君たちの秘密は既に盗聴済みだから。」

『……』

再びダイノガイストは黙る。肩に乗っていたジェットガイストは不安そうなしぐさを見せる。

『い……じゃなくてダイノガイスト様……あの女の戯言に……』

「いつくんと朝のお風呂は気持ちよかった? 箒ちゃん。」

『!?!』

東の一言にジェットガイストは思わず滑り落ちて尻餅をついた。

『な……何故そんなことを……』

「二人には悪いと思っただけですパイメカで見ちゃいました。ゴメンね♡」

『あ……あ……』

ジェットガイストは顔を隠しながら固まってしまう。当のダイノガイストはプライベートを覗かれていたことに対して、怒りのあまりに咆哮を上げた。

『グウウラアアアアアアアアア!!』

『あかん……完全に切れてもうた。』

ダイノガイストはダイノモードからロボットモードへと変形する。

『チェーンジツ!!ダイノガイストオ!!』

ダイノガイストは束を掴み上げ、自分の顔の近くにまで持って行く。

『篠ノ之束!そこまで覗くとは許せん!!』

「うわゝゝ捕まったゝ。」

ダイノガイストが怒っているのに対して束は気が抜けたような声で言う。

『い、一夏!』

流星のジェットガイストも止めようとするがダイノガイストは黙ったまま束を見る。

「ぐわあゝゝゝ苦しいゝゝゝ助けてゝゝゝ」

『……貴様、力も入れておらんのに紛らわしいことを言うな。』

「てへ、バレちゃった?」

『本来ならここで握り潰してやりたいところだが俺にも箒をこんな体にしてしまった責任がある。』

ダイノガイストは、束を下す。

『あり!?ダイノガイストはんが怒りを収めよった!』

ダイノガイストの態度にトレイダーは驚いたようだった。

「束さんこそ、謝るよ。さっきの盗聴の件も含めて全てね。」

『全てか……どういう意味か分かっているのか?』

「もち。一つは私とちーちゃんの二人で引き起こした『白騎士事件』によって広まってしまった女尊男卑社会、もう一つは私が政府から逃げたことから箒ちゃん一人ぼっちにさせちゃったこと、そして、誘拐事件の時に二人を助けることができなかつたこと。私の口から言えることはこれぐらいかな。」

束は、二人に向かって土下座をする。

『ね、姉さん……』

「本当にゴメン!箒ちゃん!箒ちゃんに何もしてあげられなくて!体が不自由なのにもかかわらず私の個人的な我侷で寂しい思いをさせちゃって!私が憎いのはわかるけどこれは本心からの謝罪だよ!」

束はジェットガイストに向かって言う。と今度はダイノガイストに

向かって言う。

「いつくんにも申し訳ないことをしたよ！そんな姿になる前に助けることができずに……だから、私はどうなっちゃってもいいよ！さあ！束さんを煮るなり焼くなり好きな処刑方法を選びなさい！」束がそう言うのとそれまでトレイダーの隣で拘束されていたクロエが自力でロープを解き、そのロープで彼女を更に逃げられないように拘束した。ダイノガイストは人間台サイズに縮、黙ってダイノブレードを引き抜くとゆっくりと束の方へと歩いて行く。

『い、一夏……まさか！』

ジェットガイストも人間台サイズにまで戻り止めようとする。だが、ダイノガイストはダイノブレードを束へと振り下ろす。

『一夏！』

「……」

『ああ、もう見てられんわ……』

「……」

束は無事だった。ダイノガイストは彼女を拘束していたロープを

切っただけでダイノブレードを戻した。

「いっくんも東さんを恨んでいるんでしょ？」

『俺は……俺は既に織斑一夏ではなく宇宙海賊ガイスターの首領ダイノガイストとして生きている。長年生きている中で言えばそんなことは小さいことだ。それに貴様は箒の姉だ。責任を感じているというのなら傍に居てやって欲しい。それだけのことだ。』

「いっくん……」

『だが、俺と箒はこの星から去るつもりだ。その前に貴様とあのブラコンのバカ姉が作ってしまった世界は徹底的に壊させてもらう。いいな？』

「うん、いいよ。」

『……』

『ね、姉さん……』

東のあつけない一言に二人は思わず言葉を失う。

「正直言ってISを世に出すのは早すぎたと思うしね。いっくんがその気なら今あるISコア全部トーくんに売り飛ばしてもいいよ。その代わり……」

『な、何だ……』

「東さんも一緒に連れてってくれ!!」

『……はッ?』

「私の夢は飽くまでも宇宙への進出、IS以外で行ける方法があるならどんな方法でもOKなんだよ!だからお願いね!」

東はそう言うその後ろにいるクロエの方を見る。

「クーちゃん、見ての通りこれから私はこの組織に入ることにするからいいね?」

「私は別に東様がそうするというのなら否定はしません。」

「つというわけでこれからお世話になるね、いっくん!」

『……な、何なんだ?この切り替えの早さは……』

かくして宇宙海賊ガイスターは篠ノ之東という強力なメンバーを迎え入れたのであった。

ちなみにトレイダーは、その後無事に帰ることができたと言う。

???

『……おい、みんな生きてるか?』

一方宇宙では四つの光の球体が漂っていた。

『……なんとかな。』

『アレ?俺たち死んだ?』

『バカ、まだ生きてるよ。』

『おい!あれを見ろよ!』

四つの球体は目の前にある青い地球を見る。

『地球だぜ!』

『運がいい、取りあえずあそこに逃げて適当な体を見つけて隠れるぞ!』

『早くしないと「カイザーズ」に見つかっちゃうからな。』

球体たちは地球へと降りたって行った。

デュノア社襲撃作戦

???

「これが例の物ですよ。」

暗い部屋の中、ドライアスは、スーツケースをテーブルに置き、中身を見せる。

「……………これが君の言うDCというものか。しかし、これが本当にISを超える代物になりうるとは思えんがな……………」

ドライアスと向き合っている男性は首をかしげながら答える。そんな男性に対してドライアスは皮肉な笑みを浮かべる。

「いいんですか？このままではどの道あなたの会社の未来はないですよ？」

「……………」

「それにこの予告状が正しければ二日後、この本社にガイスターなる盗賊団が襲撃してくる。私の情報が正しければ奴らに襲われて無事だった所はないそうですよ？」

「……………」

「それにコレの実験台としてあなたは手頃な材料があるじゃないですか。最近引き取った愛人との間に生まれた娘が……………」

フランス

「ここが二日後襲う予定のデユノア社だ。」

ダイノガイストは、一夏の姿で箒と共に喫茶店で地図を見ながら作戦の打ち合わせをしていた。

「予定は午後の6時丁度。俺は表から襲う。箒はトレイダーから購入し、束が改良したステルススーツを着用して本社内部に潜入、待機状態のISの回収と爆弾のセットを行え。手順はさつき話した通りだ。」

「わかった。」

ダイノガイストの的確な指示を聞いて箒は少し不安ながらも返事をする。

「……怖いか？」

「うんうん。でも、正直言ってきついんだあのスーツ。」

「束が趣味に合わせて作り直したからな。性能は本物だが。」

ダイノガイストも否定はしなかった。

「それじゃあ、後の時間はせっかくなんだし二人で観光しないか？」

「俺は別に構わないが。」

「じゃあ、二人で愛交わえる場所に……」

「こんなところにまで来てラブホテルになんて行かんぞ。」

「冗談だ。でも、一夏が行くところだったらどこでもいいな……」

「そうだな……」

ダイノガイストはパンフレットを読み始める。

???

フランスのある考古博物館だった廃墟。

そこは、女尊男卑の社会に変化してから閉館せざるおえなかった場所
所で引き取り先がなかったのか一部の模型などは当時のまま残されて
いる。

ここに宇宙から舞い降りて来た四つの球体が密かに自分の体にな
りそうなものを探していた。

『おい、あれ見ろよ！あれ、最初に地球で選んだやつにそっくりだぜ
！』

一つの球体が恐竜の模型を見ながら言う。

『ほう、それなら俺はこれに近かったな。』

『俺こっち。』

『俺はこれだな。』

四つの球体はみんなそれぞれ違う恐竜模型を選んだ。選ぶと全員
模型の中へと入りこむ。

『よし、これで取りあえず体は手に入った。』

『だが、これから一体どうするってんだ？』

『俺たち「ガイスター」がやることは一つだ。「宝」だよ！』

『んんんんんでも、見つかるか？ボスもないのに……』

『それでも探すんだよ!』

『おい、やばいぜ!何かが来る!』

『よし、全員そのまま待機だ!』

全員は模型の振りをしたまま様子を見る。少し経つと誰かが歩いてきていた。

「ほら、シャルロット。ここが私のお気に入りであった博物館よ。」

長い茶髪に眼鏡をかけた女性が隣で歩いている少女に言いながら見せる。

「は、はい……」

シャルロットと呼ばれた少女はオドオドしながら返事をする。

「まだ、お父さんたちのこと気にしている?」

「い、いえ……大丈夫です。」

「もう!生まれた親が違っても私たちは姉妹なんだから。遠慮しなくてもいいのよ。」

女性はオドオドしているシャルロットに向かって言う。

「で、でも……サラ義姉さん。僕にこれ以上関わっているとまた正妻さんに……」

「いいのよ!別に母さんのことは気にしなくても!」

サラは、ふくれっ面になって球体がどうかした恐竜模型を見る。

「昔は、優しい人だったのに……ISなんか出てからみんな変わってしまった。お父さんもお母さんも。」

「姉さん……」

「お父さんも私やシャルロットのことを道具の様にしか見ていない。私は女尊男卑主義の団体からの弾圧を避けるための社長の後見人、シャルロットはIS開発のためのモルモット。母さんは女尊男卑の社会になってからすっかり変わってしまった……」

サラは悲しい顔をする。

「この博物館もね、私が小さい時に二人と一緒に来た思い出の場所なの。」

「……?」

「うん、私が考古学者になりたいって思い始めたのもここが原点だっ

たの。社会が変わってからは後見人になることになって諦めるしかなかったけどね。この模型たちも見て。社会が変わってから碌に手入れもできなかつた上に博物館が閉館されてからここに放置されたまま。私たちもそのうちこの模型たちのように父さんの道具としてボロボロになるまで利用されるわ。」

「……でも、どうにもできないよ。僕は、もう身寄りがいないし。」

「シャルロット、ここに連れて来たのはあなたに伝えたいことがあったからなの。」

「えっ?」

「こっそり聞いたんだけど家の会社、近いうちになくなるそうよ。」

「姉さん、突然何を……」

シャルロットは少し混乱した。

「だから、その時の混乱に応じて一緒に家から出て行きましょう。」

二日後 デュノア社近くのビルの一部屋

『……フフフフ、流石に表の警備は嚴重のようだな。』

ダイノガイストは、窓からデュノア社の入り口を眺めていた。

「一夏、準備で来たぞ。」

箒はステルススーツを着終える。

スーツというよりはバニーガールの格好にしか見えないが。

『……まあ、似合っているから問題ない。取りあえず作戦を開始するぞ。』

「うん……（さり気なく似合ってるって言ってくれた♡）。」

デュノア社本社 社長室

「及びでしょうか、社長。」

その頃、シャルロットは社長室に呼び出されていた。

「来たかシャルロット。」

社長と呼ばれた男は彼女の方を振り向く。この男こそが彼女の実父である。とは言っても彼女は彼の愛人との娘であり、親子関係などは皆無に等しい。

「何の御用でしょうか？」

「ふむ、実はお前にやってもらいたいことがある。」

「ISのテストですか？」

「いや、今回は少し一刻を争う事態でな。この件に関してはサラにも伝えていない。」

社長は、そう言うのと机の中からスーツケースを出し、ある球体を取り出す。

「それは？新型のISか何かで？」

「残念だがそうではない。だが、性能はそれ以上だと保証はする。」

社長はDCを取り出し、シャルとつとに近づいて行く。シャルロツトは何か嫌な予感がした。

「あ、あの……一体何を……」

「シャルロツト、悪いとは思わんがお前にはコレの実験台になってもらう。」

デュノア社本社 地下駐車場

「警戒怠るな！怪しいと思った奴は手あたり次第捕まえろ！」

デュノア社の入り口、地下駐車場はすでに本社所属の I S 部隊で厳重な警備が敷かれていた。

『フフフフ……雑魚が何も知らずに集まってくるとは無駄なことを。』

一方、外ではダイノガイストはビークルモードで監視カメラをハッキングしてその姿を眺めていた。

『さて、箒も本社に入っていることだろうし、俺もそろそろ暴れ……?』

ダイノガイストが行動に移ろうとした瞬間、地下で何か異変が起きたことに気がつく。地下駐車場では地面が突然盛り上がり、中から四体のメカ恐竜が現れたのだ。

『おい、こんなところに「宝」があるのかよ?』

トリケラトプスの姿をしたロボットが言う。

『ああ、間違えないさ。二日前のあの人間どもが言うにはおそらくそのアイエスとかいう奴はかなりの「お宝」だ!』

プテラノドンの姿をしたロボットが言う。その姿を目の前にして I S 部隊は混乱していた。

「何よ!? 相手は二人じゃなかったの!? 予告状と全然違うじゃないのよ!」

部隊の隊長格らしい女性が言う。

『予告状? 一体何のことだ?』

「とぼけるんじゃないわよ! アンタたちガイスターとかっていうコソ泥集団でしょ!」

『コソ泥？おい、誰かそんなものかいた覚えはあるか？』

『いんや、俺は知らねえ。』

『俺もだ。』

『そもそも、地球に来たばかりでなんで俺たちのこと知ってんだよ？』

四体は、女性の発言に意見を言い合い始める。

「馬鹿な恐竜たちね！今のうちに集中射撃よ！」

「了解！」

隊長の指示で隊員たちは一斉に攻撃を開始する。突然の攻撃に四体は大慌てになる。

『うおお!?この女共、いきなり攻撃しやがって!』

『この星の人間の女は相当血の気が短いようだな!』

『もう、容赦せん！さっさと倒して宝を頂くぜ！チェーンジツ！ホー
ンガイストオ!!』

トリケラトプスのロボットが人型に変形する。

『チェーンジツ！プテラガイストオ!!』

『チェーンジツ！アーマーガイストオ!!』

『チェーンジツ!!サンダーガイストオ!!』

恐竜たちは全員人型のロボットへと変形する。

「変形した!?!」

『全員やつちまえ!!』

全員一斉にビームやミサイルで攻撃を開始する。

「ちよっ!?こんな地下でミサイルなんて……」

女性が言う間もなく地下駐車場はガイスター四将のせいで埋もれてしまった。

『……あの馬鹿ども。さっさと箒を回収して引き返すか。』
ダイノガイストは目標を本社ビルへと変えて攻撃を開始する。

その頃箒は。

「うわあっ!?!な、なんだあ!?!この揺れは!?!」

うまく格納庫まで侵入してISを回収しているところだった。

「地下の方……もしかして一夏のみにか!?!」

箒は作業を急いで終わると部屋を後にする。

そのとき、何か焦って来たのかサラとすれ違った。

「シャルロット……まさか社長室に……」

サラは急いで社長室へと向かった。

復活 宇宙海賊ガイスター

デユノア社本社 社長室

「じ、実験……」

「知つての通り我が社は第三世代機の開発の遅れで経営危機に陥りつつある。この危機を打破するにはもはや第三世代よりもより優れたものを発表しなければならん。そのためにもこの新型のを試さねばならん。その第一号としてお前でテストさせてもらう。」

社長は一步一步とシャルロットへと歩み寄ってくる。

「ま、待ってください！それは人体には悪影響はないんですか!?やる以前にそこからの確認を……」

「よもや一刻を争うのだあ！こうでもしなければ我が社は消える!!」

社長は、シャルロットを壁に押し付け、服を剥ぎ取り上半身を裸にする。

「ひっ……」

「何……成功すれば、奴の言う人間とロボットの二つの姿を持つ超生命体になれる……喜べ、お前が最初に人間を超えられるのだぞ?最も、失敗したらどうなるかは私にもわからないがな……」

「や、やめて……」

社長は、シャルロットの胸へとDCを押し付けようとする。

「いやあああああ!!」

「シャルロット!」

シャルロットの悲鳴を聞いてサラが社長室へと入って来た。

「サラ!」

「お父さん！何やってるの!？」

サラは社長を取り押さえる。

「は、離せ！」

「シャルロットになんてことしているの！いくらお母さんの子じやなくともシャルロットは私の妹なのよ！」

「お前には関係ない！こうしている間にも奴らが！ガイスターが我が社を……」

「いつもそう！ISが出て世の中が変わってからお父さんはいつも会社と自分のことばかり！周りのことなんかどうでも思っているからそんなことが言えるのよ！」

サラは勢いをつけて社長をシャルロットから突き放した。放り出された社長は机にぶつかりスーツケースに顔をつまむ。

「大丈夫？シャルロット。」

サラは上着を一枚脱いでシャルロットに着せる。

「ね、姉さん……」

「ごめんなさい、お父さんがこんなことをして。」

「う、うう……」

シャルロットはサラに抱きつきながら泣き始めた。サラはシャルロットの肩を抱きながら落ち着かせる。

「怖かった……本当に怖かった……」

「もう大丈夫よ。早くここから……」

「ぐわあああああ!!!」

そのとき社長の悲鳴が聞こえた。サラとシャルロットは社長の顔を見ると唾然とした。

「く、苦しい……」

社長の顔の半分がロボットに変貌していたのだ。それどころか体の至る所がロボットへと変化しつつあった。

「わ……私は……ワタシハ……」

「あ、ああ……」

「逃げるわよ！急いで！」

サラはシャルロットの手を引いて社長室から出て行った。

デユノア社本社 元地下駐車場

『おい、全員生きているか?』

ホーンガイストたちが瓦礫を掘り分けながら出て来た。

『馬鹿!誰がミサイルで攻撃しろと言った!』

『うるせえ!てめえこそやってたじゃねえか!』

『なんだと!?!』

プテラガイストとホーンガイストは喧嘩を始めた。その光景をアーマーガイストとサンダーガイストがまた始まったとばかりに見ている。

『大体お前はいつもそうだ!俺たちのことを散々小馬鹿にしていながら自分も同じことやってんじゃねえか!』

『なんだと!?!逆にお前たちに合わせてやってんだ!手本としてな!』

『何を!』

二人が喧嘩をしているとき、サンダーガイストが自分たどが出てき

た穴から何か物音がしていることに気づく。

『おい、なんか俺たちの出てきた穴から何か物音がするんだけど?』

『うるせえ!今は黙って……何?』

プテラガイストとホーンガイストは喧嘩を中断する。よく耳(と言つても彼らにそんなものはないが)を澄ましてみると何やらどこかネズミの某テーパーパークのような音楽が流れて来ていた。それもどンドン大きくなっている。

『な、なあ……いったい何が出てくるんだ?』

アーマーガイストはホーンガイストに聞く。

『お、俺に聞くんじゃねえ……』

『おい、もつとデカくなっているぞ……』

四将は緊張しながら穴の方を見る。音は、最も近く……穴のすぐそこに来た直後止まった。

『『『……』』』』

四将は穴の中をそつと覗く。

『バアあ〜!』

穴の中から自分たちよりも巨大な手(?)が現れた。

『『『うわあああああ〜〜〜!!!』』』』

四将は突然現れた巨大な手に驚く。

『ハハツ、びつくりした?』

巨大な手(?)は笑いながら四将に近づく。

『ばっ、化け物だあ!』

『この地球にはこんな奇怪な化け物がいたのか!』

『て、手!?でつかい手!』

四将は既に混乱状態だった。

『もう〜!いつくんに頼まれて迎えに来たのに。』

巨大な手(?)は更に巨大化して四将を掴むと天井を突き破って飛び去って行く。

『は、離せ〜!俺たちをどうしよっていうんだあ!』

『俺、まだ死にたくねえよお〜!』

『東ランド、夢の国へご招待だよ!』

巨大な手（？）に言われるがまま、四将は空のかなたへと消え去って行った。

デュノア社本社 ビル内

「ここも駄目ね。」

サラはエレベーターのボタンを押しながら言う。

先ほどホーンガイストたちが引き起こした爆発のせいでビルの電力施設がやられたらしく停電でエレベーターが動かなくなってしまうのだ。

「ね、姉さん……」

焦っている義姉を見てシャルロットは心配そうにする。

「大丈夫よ、この会社には階段もあるから。そこなら時間はかかるけど降りられるわ。急いで行きましょう。」

サラはシャルロットの手を引いて歩き始める。

ガシヤン、ガシヤン

少し離れた場所からロボットが歩くような足音が聞こえて来た。
二人は慌てて身を隠す。

『ドコダ、サラ？ シャルロット？』

機械じみた声が辺りに響く。二人は息を殺して悟られないようにする。

『ウウウ．．．．頭ガ．．．．マアイイ、コノママ「ガイスター」
ヲ消シ去ツテクレル。』

足音は再び遠くなって行く。サラとシャルロットは恐る恐る顔を上げる。どうやら去ったらしい。それが分かると更は急いでシャルロットの手を引っ張って行った。

デユノア社本社 中階

『フハハハハハッ！そんな生温い弾丸でこのダイノガイスト様を倒せ
ると思っていたのか、バカ者どもが！』

「くっ！」

一方、ダイノガイストは箒を探しながら各階層を警備しているIS
部隊を次々と蹴散らして言っていた。

「こちら、○階！敵の能力は予想以上！これ以上持ちこたえられそ
う………」

『フーン！』

「きゃあ!!」

ダイノガイストは、ほぼ武装を使うことなく素手の攻撃で防衛部隊
を壊滅してしまった。幸い彼女らは気絶しているだけである。

『殺してしまっってはこのダイノガイスト様の恐怖が分からぬからな。』

ダイノガイストは待機状態に戻ったISを取り外しながら次の階、
次の階へと昇って行っていた。

『まさかアイツらが逃げて来たとはな……東に連絡して基地へ連れて帰るように言っておいたし、後は箒を回収してこの会社のISを全て……む?』

ダイノガイストは足を止める。上から何か降りて来ているようだ。音が近づいてくるとダイノガイストはそれまで引き抜くこともなかったダイノブレードを構える。

『……』

足音がとうとう自分の目の前にまで迫って来た。

『とりやああ!!』

『きやああ!!』

『うん?』

現れた相手を叩き斬ろうとしたダイノガイストだったが現れたのは武装もしていない姉妹らしき二人組だったため途中でやめる。

「ロ、ロボット……」

サラは、怯えるシャルロットを抱きしめながらダイノガイストを見る。

『ふん、戦えぬ者に興味はない。とつとと失せろ。』

ダイノガイストがそう言っただけで前へ進もうとする。

『……ぬっ!?!』

だが、次の瞬間ダイノガイストの真上の天井が崩れる。ダイノガイストは巻き込まれそうになった二人を抱えて避けると落ちた方を見る。

『見ツケタゾ、サラ。ヨクモ私ヲコンナ姿ヘシテクレタナ。』

『うう!』

サラとシャルロットは震える。だが、一番驚いていたのはダイノガイストだった。

『何!?お、お前は!!』

『貴様ガ「ガイスター」カ。貴様ノオカゲデ社長デアル私ハコノ様ダ! 許シハセンゾオ!!』

社長だった者は目を光らせながらダイノガイストを睨む。

『ド……ドライアス?!』

ダイノガイストは目の前にいる社長をドライアスと見間違えていた。

見る限り、その姿は体色が黒なのを覗けばドライアスと瓜二つなのだ。

両肩に左右にタイガーとドラゴンの頭部、胸にイーグルの顔、その姿はまさにかつて自分と争ったドライアスの姿そのものだった。

『……フ、フフフフ、フハハハハハッ!!』

『何ガオカシイ?!』

ダイノガイストの笑いに社長は機嫌を悪くする。

『ハハハハハ。なあに、久しぶりに手応えのある奴と戦えると思っ
てな。』

『フン、ドウ思オウガ勝手ダ!ダガ、コノ私ノ会社ヲ潰シタコトヲ今後
悔サセテヤル!!』

社長は盾から剣を引き抜く。

『面白い、今まで戦ったことがない貴様がどこまでこの俺様とやり合
えるか試してやる!!』

ダイノガイストもダイノブレードを両方引き抜くと合体させる。

『ダイノツインブレードオ!!』

『死ネエ!!』

社長は、両肩のタイガーとドラゴンの首を発射する。首はダイノガイ
ストの両肩のアーマーを捕らえる。完全に動きを封じると社長は
剣をダイノガイストに向けて振り下ろそうとする。

『ふん、こんなちゃんけな拘束で動けなくなるダイノガイスト様ではな
いわ!』

ダイノガイストは高速を振りほどき、ツインブレードで防ぐ。

『喰らえ!』

『ヌウウ!』

胸の装甲版からの光線に社長は直撃してしまい、両肩の首が取れ
しまった。

『オノレ!』

社長は両肩のキャノンで反撃する。

『ダイノシールド!』

ダイノガイストは盾を出し、攻撃を防ぐ。

『何故ダ!?何故私ノ攻撃ガ効カナイ!?』

『馬鹿め、戦闘経験のない貴様ではそんな体など役にも立たんわ。』

『何ヲ!?』

『ここまでド素人だったとは……予想以上の期待外れよ。』

ダイノガイストはツインブレードを分割させ、交差し黒い雷を放つ。

『ダークサンダーーストームウ!!』

黒い雷は一瞬竜のような姿になり、社長に直撃した。

『ガア、ガアアアアア!!』

社長は体のあちこちから煙を出し、跪いてしまった。

『他愛もない。』

ダイノガイストは、ダイノブレードを戻す。

『これでこの仕事は終わりだ。』

「一夏〜!」

そこへステルスを解除した箒がやつと来た。箒はダイノガイストを見るなり、お構いなしに抱き付いた。

『今までどこに行っていた?合流予定時間を既にオーバーしているぞ?』

「だつて〜!突然地震が起きたかと思って急いで向かおうとしたら停電にはなるわ、タイツをひっかけて破けそうにはなるわ、いつまでも来てくれないからどうしようかと思って……」

箒は涙目で言う。

『よしよし、じゃあここにはもう用は……』

『許サンゾオオオオ!!』

『ぬっ!?!』

後ろの社長の叫びにダイノガイストは思わず振り向く。よく見ると社長の体は全身赤くなっており、所々が蒸気を発していた。

『貴様等ニ我ガ社ノI Sヲ全テ奪ワレテ終ワルグライナラ、ココ諸共吹キ飛バシテクレル!!』

社長は更に叫ぶと身体の一部が溶解し始める。

『自爆する気か!?このままではここが吹き飛ぶぞ!』

ダイノガイストは急いで戦闘機に変形し、箒を乗せる。

「おい、お前たちも早く乗れ!」

「え?」

箒に言われてサラとシャルロットは驚く。

「早くしないと爆発に巻き込まれるぞ!」

「で、でも……」

二人は言われるがままにダイノガイストに乗り込む。

デユノア宅

「……取りあえず、?収穫はあり?と言ったところか。」

ドライアスは、崩壊していくデユノア社本社の映像を見ながらソファーに座っていた。

「しかし、それにしてもまだリスクは高いな。この分だと元の体に戻

れるまであとどのくらいかかるのやら……」

ドライアスはスーツケースの札束を数え終わるとさっさと閉じ、部屋を後にする。

「このドライアスの存在を知られても困るからな。証拠は何一つ残さない。それが生き延びるためのモットーよ。」

ドライアスはデュノア宅から離れると自爆スイッチを押した。

次の瞬間、デュノア宅は木っ端微塵に大爆発してしまった。

「さて、次はどこに行くか……特に当てもないしまったスコールの所で世話になるか。」

数日後 フランスのとある病院

「……………」

シャルロットは、右足を釣り上げた状態でベッドに寝かされていた。

「シャルロット、足の具合はどう？」

そこへサラが花束を持って病室に入ってきた。

「うん、お医者さんの話だと明後日には歩けるようになるって。」

シャルロットとサラはデュノア社から脱出した後のことを何も覚えていなかった。

ただ気がついたときは二人とも病院に寝かされていて医師の話によると二人組のカップルが運んできてくれたと言う。

後にニュースと警察の話で知ったことだがデュノア社は病院に運ばれた日に謎の爆発事故で倒壊してしまったそうだ。この事故で死者ケガ人多数、デュノア社社長の遺体は発見されなかった。

さらに、自宅の方も強盗が入ったのかデュノア夫人を含める使用人複数名が何者かに殺害された。盗まれた金品はそこまでの数ではなかったそうだ。

両親がどちらも亡くなってしまったため残った遺産はサラが相続することになった。

しかし、会社の方はISコアと開発データが損失してしまったためもはや再建が不可能であり、別の方法を考えなくてはならない。

最もサラは、これからのことをシャルロットと相談しながら決めると考えていた。

「……………でも、何か引つかかるんだよな？」

「何が？」

「僕たち確か図書館からの帰りだったよね？でも、どうも違うような気がするな……………」

「シャルロットもそう思った？私もそんな感じがするのよ……………何か引つかかるような……………」

二人は不思議そうな顔で空を眺める。

無人島

「あの二人に記憶操作させて良かったのか？」

箒はダイノガイストを見ながら言う。

『あのまま憶えられていても困るからな。』

ダイノガイストはそう言うのと後ろを振り向く。後ろではまるで幽霊を見ているのかの如くガイスター四将がダイノガイストを見ている。

『……お前たち、いつまで見ている？』

『い、いや……ボスが生きているというのがどうしても信じられなくて……』

ホーンガイストが戸惑いながらも答える。

『俺も流石に信じられん。ボスが人間に生まれ変わって……あのドラリアスまで人間の女になっていて……なんて、普通は信じられる話じゃないぜ。』

『だが、俺様は現実就在这里で生きている。そして、新たなメンバーも加え宇宙海賊ガイスターはついに完全な復活を果たした。』

ダイノガイストはそう言うときダイノモードになり、四人の前に立つ。

『いいか？我らガイスターがやることはこの星の「宝」を奪う事だ。だが、それともう一つある。あの鬱陶しいドライアスとの因縁もここで蹴りを付ける！その後は元の宇宙へ戻ってあのにつきエクスカイザーとの決着も付けてくれるぞ!!』

『『『おう!!』』』』

かくしてここに宇宙海賊ガイスターが復活した。

『あつ、ちなみにダイノガイスト様、さつきから気になっていたけどその女は何なんです?』

『…………俺の「宝」だ。』

『ということとは…………』

「箒ちゃんはいつくんのお嫁さん…………要はガイスターの副リーダー格だよー!」

『『『ええ!?!?』』』』

レポート

『ここにISSとそれにかかわる事件についての記録をまとめる。』

200X年

篠ノ之束がISSを発表。当初は宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツであった。

一か月後、「白騎士事件」が発生。

コレのより世界は、ISSとその驚異的な戦闘能力に関心が高まることになった。

さらにISSが女性にしか起動できないことが発覚し、社会は男尊女卑から女尊男卑へと変わり、世界の情勢は大きく変化する。

しかし、ISSのコアを唯一製作することができる開発者篠ノ之束は467機を生産した後に失踪、指名手配される。彼女の家族は、政府の重要人物保護プログラムによりそれぞれ別の地で過ごすことになる。

世界は残されたコアを利用して新世代機の開発競争へと移る。

200X年

第二回モンド・グロッソにおいて前大会の優勝者「ブリュンヒルデ」こと織斑千冬の弟・織斑一夏が決勝戦前、何者かに誘拐される。

目撃者の証言によれば重要人物保護プログラムに登録されている篠ノ之帚と共に行動していたという情報があり、二人とも誘拐された模様。

後のこの情報はドイツ軍を通じて織斑千冬本人に知らされ、授賞式直前に会場から飛び出す。

ドイツ軍と共に誘拐現場と思われる場所に到着するが二人の発見ならず。

しかし、現場には何らかの兵器と思われる人型ロボットの残骸を発見。更に天井に大きな穴があり、犯人は逃亡したのではないかと思われる。

織斑千冬はその後ドイツ軍で一年間教官を務め、日本に帰国後、V2達成のインタビューの最中日本代表の辞退及び現役引退を宣言する。

一年後、謎の武装組織「宇宙海賊ガイスター」が出現。

世界各地の軍事・研究施設などを襲いISの強奪を開始する。

組織の内部構成については不明。

最も最初期に襲われた施設の生存者の言葉によれば、一人の少女と巨大なロボットが共に行動していたと言う。その少女の容姿は織斑一夏と共に消息を絶った篠ノ之箒に酷似しているが事件から目撃証言は一切なく、当人以降の目撃情報で少女は目撃されなくなったため見間違いではないかと思われる。

以降の別の証言によれば最初の頃に報告された巨大ロボットは自らを「ダイノガイスト」と名乗り、戦闘機・恐竜・人型の姿に変形できると言う。

更にその後は、仲間と思われる五機のロボットの現れるようになり、被害は拡大。

彼らを迎撃に向かった元IS部隊の女性の証言によれば彼らの戦闘兵器はISも含める既存兵器を上回っており、彼女の部隊も全滅したという。その後彼女もまた彼らの目を付けられここまでかと思っていたがロボットは待機状態になった彼女のISを奪うと興味を示すことなく去った。ちなみに彼女以外の何名かは彼らに拉致されている。彼女たちは共通で女尊男卑主義の者たちばかりで「ガイスター」は、女尊男卑である現代の社会に何らかの恨みを持つ組織なのではと考えられる。

彼らの海賊行為はISの強奪だけではなく、国宝級の価値が付けられない途方も無い品から、国家が買えるとされる超ド級の品々、はて

は理解に苦しむ珍品も含まれている。

世界の各政府の首脳は、宇宙海賊ガイスターに対してISが通じないことと彼らがISを狙っていることを踏まえ、国際IS委員会の権限の一時凍結、アラスカ条約に基づいて日本に設置されたIS操縦者育成用の特殊国立高等学校「IS学園」に緊急警戒態勢を敷かれている。

現段階で強奪されているISが200機以上。

被害は更に広がるものと思われる。

しかし、一つ謎の証言が発覚。

織斑一夏が誘拐された日、織斑千冬が向かった現場近辺の住人数名がその日の夜、ダイノガイストと思われる戦闘機を見たという証言があったのだ。

これは、ダイノガイストのイメージイラストが公開された時に目撃者を名乗る住民がTV放送局に押し掛けてきた時に証言をした住民の多くが例の現場近くの住民だったとのこと。

故にあの謎のロボットの残骸はダイノガイストの試作機または兄弟機として製作し失敗したものではないかと思われる。

ダイノガイストの正体に関しては亡国機業の開発した対IS用兵器、IS開発者である篠ノ之束の開発したアンチIS兵器ではないかという諸説があるが定かではない。

「……………つとまあ、こんな感じのレポートでいいかな?」

水色のセミロングに眼鏡をかけた少女はキーボードを打ちながら言う。

「まさかこんな事態になるなんてな……………」

少女はティーカップに入っていた紅茶を飲み切ると自室のカーテンを開ける。

丁度、暗かった夜の空間に太陽が昇り始め朝を迎えようとしていた。

「これじゃ、日本代表候補生になつたつて、命狙われるだけじゃない。まあ、狙っているのはISだけで搭乗者には特に興味はないようだけど……………」

心地よい風を浴びる少女は気持ちよさそうな顔をするが同時に何かの不安を感じていた。

「お姉ちゃん……………緊急招集でロシアに飛んで行ったけど大丈夫かな?」

少女はそう言うときまたパソコンに向き直り、仕上げにかかる。

『ISに関する歴史とガイスターについてのレポート』

『〇〇中学3年X組』

黄金勇者ゴルドランルート

目覚めよ！黄金勇者！

神秘で広大な宇宙。

この中で、悪のエネルギー生命体・宇宙海賊ガイスターが、人類の宝を狙って地球に潜入した。

しかし、破壊と略奪を欲しいままにせんとするガイスター達の前に、敢然と立ちふさがるヒーローがいた。

宇宙警察エクスカイザーである。

彼は、仲間たちと共にガイスターに立ち向かい、ガイスターの首領・ダイノガイストの自決により戦いは終わりを迎えた。

だが、ダイノガイストは人間として新たな生を受け、同じ悪のエネルギー生命体・ドライアスの実験により復活する。

さらに逮捕されたガイスターのメンバーの逃亡・合流を繰り広げ宇宙海賊ガイスターは、再び活動を再開した。

これは、再び姿を現した宇宙海賊ガイスターとその世界での物語である。

???

さて、今回の「IS世界のガイスター(仮)」は、とある国のストーンサークルの遺跡から物語を始めるとしよう！

突然なりだす雷鳴。

そして、落雷が遺跡へと降り注ぐ。遺跡が光り出し、そのエネルギーは輪を描きながら吸収されて行く。

「グワアアアア!!」

地面を引き裂き、全身黄金色の怪獣が姿を現す。

その怪獣が現れると同時に謎の戦闘機らしき飛行物体が数機、怪獣を取り囲む。

その戦闘機の更に上空を飛行している空母で指揮を執っている老人が合図を送る。

「捕獲作戦、開始!」

「了解!」

各戦闘機から怪獣に向かってワイヤーが飛ばされる。ワイヤーは怪獣の体の至る所に打ち込まれた。

「電撃ON!」

戦闘機から電流が流れ出し、怪獣は怯み始める。

「よし、そのまま捕まえるのだ!」

しかし、怪獣は暴れ出し、2機の戦闘機が衝突で撃沈してしまう。「何い!?!」

さらに残りの二機を尾と腕で破壊するとどこかへと去ってしまっ

た。老人は悔しそうにただその姿を眺めることしかできなかつた。「や、やはり皇帝陛下のご決断は早すぎたのです。まず石版の言葉に従い、パワーストーンを発見するのが先だったのです……このままでは、我らの野望は夢へと消える。」

「グワアアアアアア!!!」

『IS世界のガイスター（仮）』

黄金勇者ゴルドランルート

『目覚めよ！黄金勇者！』（鈴の声）

日本 織斑宅

ピンポーン！

「・・・・・・・・・・」

日本のある一軒家。

そこで一人のポニーテールの少女がポストンバックをもって待つ

ていた。玄関のドアが開くとまだ眠そうな少年が顔を覗かせる。

「はい……あ？何だ鈴か。」

「何だつて何よ。もうすぐ昼になるっていうのにまだ寝間着なんて……」

鈴は呆れた顔で千秋を見る。

「えつと……あ、家が上がってもいいぜ。千冬姉には夏休みの間居候していいって許可もらったし。」

「うん。」

鈴は早速中へと上がる。

凰鈴音と織斑千秋は、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校「IS学園」の生徒である。

しかし、宇宙海賊ガイスターの登場により世界は、「IS適性のある人間Ⅱガイスターの標的になりかねない存在」と言う認識が広がり、IS学園はある意味危険な人材を送るための収容施設のような扱いになってしまっている。

彼ら二人が入学したときも当然その影響は受けており、学園内でのISの使用の制限、各イベントの中止など多くの変更があり、その分空いたスケジュールをどう埋め合わせるのかと言うのが課題になっていた。

つまり、現在のIS学園は実質普通の高校とあまり変わらない場所になっている。

ちなみに現在は7月の上旬。

予定されていた「臨海学校」が消えたため、ほぼ二カ月夏休み状態と言うわけだ。

「ほれよ、冷えた麦茶。」

「サンキュー。」

千秋は鈴を部屋に入れるとおもてなしとして冷えた麦茶を出した。

鈴は早速勢いよく麦茶を飲み干す。

「ふうー！やっぱり暑い夏はこれに限るわよね！」

「ああ、しかし、俺たちも得なのか損なのかよくわからねえ立場だよな。IS適性が分かっただけで学園に入学させられてISのことを教えてもらえるかと思っただけで現在使用禁止って。」

「まあ、仕方ないんじゃない？なんか宇宙海賊何とかって言うのがIS強奪を始めるようになってから世間は女尊男卑から一気に逆戻りしているんだし。まあ、見た目じゃそこまで目立つわけでもないし。別に問題ないんじゃない？」

鈴はそう言うのと部屋の箆笥の上に飾られている写真を手取る。

「もう、三年ぐらい経っちゃったんだ。一夏いなくなっただけから……」
「まあな、もう諦めて当然なんだけど俺も千冬姉も明日になれば……ってつい思っちゃうんだよな。朝になったらアイツが台所で俺たち姉弟三人分の飯を作って『秋兄は食器洗ってくれよ！』ってさ……」

「千秋……」

千秋のさびしそうな顔を見て鈴は心配する。

「……フ、あんまり考えても仕方ないか。」

「……あつ！そうそう、あれ憶えてる？」

「ん？」

「ほら、私と弾、一夏の四人で小学校の時、学校の裏山にタイムカプセル埋めに行ったんじゃない！高校になったら掘り出しに行こうって言いながらさ。明日にでも弾たちと三人で掘りに行かない？」

「タイムカプセルか……そうだな……俺は何埋めたか覚えていないし。んじゃ、弾に連絡して明日行けるかどうか聞か！」

ガイスター基地

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ダイノガイストは、黙ったまま椅子に座っていた。
「いっくん、できたよ。」

東がダイノガイストの頭に丁度はまるぐらいのヘッドギアを渡す。
ダイノガイストは早速頭に嵌める。

「姉さん、これは一体何の装置なんだ？」

「いっくんがもう家に帰ることがないからね。人間としての記憶も残すために自分の脳裏の記憶を映像化させて写真やDVD・ブルーレイにして残すための装置だよ。あつ、もちろん非売品だよ！」

東が説明している傍らダイノガイストは装置を動かし始める。映像には最初ダイノガイストが二体のロボットと戦っている姿が映った。

宿敵のキングエクスカイザーとゴッドマックスだ。

そして、続いてウルトラレイカーの姿が映り、ドラゴンカイザー、グレートエクスカイザーとどんどん映し出されて行く。

『エクスカイザーめ・・・・・・・・』

ダイノガイストはかつての宿敵の姿を見ながらその名前をつぶやいた。やがて、ダイノガイストが太陽に堕ちて行く姿が終わると今度は一夏としての映像が次々と出てくる。但し、両親のことに關してなどの物心がつく前の記憶はない。

『・・・・・・・・・・』

更に箒と別れたところから鈴や弾、そして兄の千秋と共に行動している姿が映った。

「一夏、この女は？」

『風鈴音、お前と入れ違いで引越してきた奴だ。まあ、昔のお前と違って攻撃的ではなかったな。』

「うつ・・・・・・・・・・」

『冗談だ。そう言えばこのときの映像を考えるとおそらくタイムカプセルを埋めた時期だな。』

「タイムカプセル？」

『うむ、この時期に高校になったら掘り出そうという話でお前と別れた夏に小学校の裏山に埋めに行ったのだ。』

「それで何を埋めたんだ？」

『それは・・・・・・・・憶えておらん。ただ、あそこは最後の記憶が正しければ今ぐらいの時期にマンションが建つとかの話があったからな。おそらくカプセルももう残っていないだろう。』

「そうか・・・・・・・・」

箒は少し考えると部屋を後にして行く。

『?』

ガイスター基地ミーティングルーム（TV部屋）
（テレレレン！○○シチューー！）

ガイスター四将は暇なのかテレビでアニメを見ていた。

『俺もド○えもん欲しい。』

サンダーガイストはテレビを見ながら言う。

『馬鹿か！これはアニメなんだからいるわけないだろう！』

呆れて言うプテラガイスト。そこへ蝙蝠型のロボットが飛んでくる。ダイノガイストの指令を四将に伝えるコウモリだ。

『お前ら何をしている！呑気にテレビを見ている暇があったら宝の情報を集めろ！』

『何イ!?!』

『つと、ダイノガイスト様がおっしゃっておられる。』

コウモリは、そう言う何らかのメモリーチップをプテラガイストに渡す。

『なんだこれは?』

『ダイノガイスト様からの命令だ！このメモリーに登録されている場所に行き、宝を掘り出してこい！』

『宝? どういうことだ?』

『とにかく行って取ってこい！急いでだ!』

コウモリはそう言う部屋から飛び去って行ってしまった。プテラガイストは仕方なくメモリーのデータを調べて場所を確認する。

『日本か。ならさつきと行った方がよさそうだな。おい、お前ら二人で行ってこい。』

プテラガイストはホーンガイストとアーマーガイストを見ながら言う。

『何イ！俺たちが行けだ?!』

『俺は、エネルギーボックスを改良するのに忙しい。それにサンダーの奴はテレビに夢中だ。だったら、お前達しかないだろう?』

『この野郎！自分が言われたくせに!』

『それにボスからの勅令だ。きつと相当なお宝なんだろう、だつたらいいんじゃないかねえのか?』

『ぬっ……』

ホーンガイストはしばらく黙るとプテラガイストからチップを受け取り、部屋を後にする。

『手柄をとつても後から文句言うんじゃないぞ!』

その姿を箒がこっそりと覗き込んでいた。

???

一方、どこかしらの砂漠。

移動を続けている怪獣は、追跡して来る戦闘機を再び破壊していた。

「第4部隊、全滅しました……」

「う——ん……カスタムギアを持つてくれば……」

老人は隊員の答えを聞き歯を噛みしめながら言う。

「?ゴルゴン?、地中に潜ります。」

「何イ!？」

ゴルゴンと呼ばれた怪獣は地中に潜っていく。

「おのれ……至急、ソースカ平原におられる若君に連絡を！」

???

この上空を飛行しているこのサソリのような奇怪な物体。

実はこれは巨大な要塞なのだ！（間違えてもメ○ザラツクと言つてはいけません。）

「そうか、やはりパワーストーンだな。パワーストーンを手に入れたければ、我々の計画は失敗に終わる……」

『仰せの通りでございます。』

先ほどの老人の通信に赤髪の青年が答える。

「だが、安心しろじい。全てはこの私が成し遂げてやる……このワルター・ワルザック王子がな。」

『さすがは若君！ それでこそ、陛下の跡を継ぐお方でございます!!』
ワルターは座っているソファアのタッチパネルを操作する。すると、目の前のテーブルが中央から開き、一枚の古代文字のようなものが描かれた石板が現れる。

「我がワルザック共和国内で例の怪獣？ ゴルゴン？ とともに発見されたこのレジェンドラの石版にはこう記されていた……『黄金の勇者の復活を望む者よ、地上でもっとも大きな男に尋ねよ……男の手に刺されし剣を抜かば、勇者を宿すパワーストーンを示すであろう……とな。』」

『地上でもっとも大きな男とは!?!』

「フツ、それはな……」

デッデッデッデッ、デッデッ、デッデッデッデッデッ！デー！（ア
イキヤツチ）

ガイスター基地

『ほうほう、これが銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）かいな……』
トレイダーは機体のデータを見ながら計算機を打っている。

『ほんじゃ、これは他のも含めて五千万でどないでつか？』

『貴様、喧嘩売っているのか！ダイノガイスト様が目を付けたお宝だ
ぞー！3億だー！』

『せや言われてもな……ほんじゃ、まけて一億五千万でどうや
？』

ダイノガイストは黙ってトレイダーの話を聞いていた。

『貴様、何度言えば……』

『それぐらいで構わん。』

『ダイノガイスト様!?!』

『ただし、何か宝の情報を教えろ。』

『へえ!?宝の話……せやな……そうや!』

トレイダーは何かを思い出したのかのように手を打つ。

『ダイノガイストはん、「レジェンドラの財宝」って知ってまっか？』
『レジェンドラの財宝？』
『ここだけの話なんやけど……』

謎の遺跡

とある奇妙な遺跡。

「ありました。」

「確かに古代の剣です！」

兵士二人は、岩をどかすとそこには古代の剣が刺さっていた。

「やはりな……フッフッフ……ハッハッハ！地上でもつとも大きな男とは、このソースカの地上絵のことだった。石版の言葉に従い、この剣を抜けばパワーストーンが手に入り、勇者が復活するのだ……」

ワルターは剣を抜こうとする。

日本

ここは日本のとある小学校の前。

そこに赤髪の兄妹らしき二人が何かを待っていた。

「おーいー！」

そこへ千秋と鈴が走ってくる。

「遅いぞ、千秋。」

二人の友人・五反田弾は呆れた顔で言う。

「悪い悪い、蘭も来ていたのか。」

「ああ、一夏が昔何を埋めたのか興味があるって言ってな。」

「何よ！まるで私が変だと言っている様じゃないの！」

蘭は弾の顔を見ながら文句を言う。そんな蘭を他所に千秋たち三人は懐かしそうに学校を見る。

「懐かしいな……」

「ああ、でも本当信じられないぜ。卒業以来、俺たちがここに集まるなんてな。」

「弾、憶えてる？昔、一夏と私と三人でボブスレー作ってあの裏山から滑って大惨事になったこと。」

「あれか……」

弾は少し嫌そうな顔をする。

「思い出しただけでゾツとするな。千秋の忠告聞いておけばよかつたってさ、滑る途中、石にぶつかってスリッパして、民家の何件かに突入して、飛んだと思ったら学校の倉庫に墜落して、後でじいちゃんとう母さん、鈴の父さんと母さん、千冬さん、先生たちに殺されるのかと思うぐらい説教されて……」

「関係ないはずの俺も怒られたしな。」

「ま、まあ、昔の悪ガキ時代の話は置いといて（私が言ったことだけど）、さっさと行きましょう！早くしないと日が暮れるわよ！」

「そうそう、友達の付き合いだって言ってきたけどあんまり遅いと心配するからな。」

四人は学校の裏山へと向かって行った。

ソースカ平原 遺跡

「黄金の力守りし勇者よ……今こそ甦り、我が前に現れ出でよ!! うお——っ……ぬ、抜けん!」

ワルターは剣を抜こうとするが剣はビクともしない。

「ワルター様!」

二人の部下も加わって剣を引つ張る。すると剣は抜け三人は勢いよく転んでしまった。

「ぬ、抜けた……」

だが、同時に地震が起こり、遺跡にヒビが入り崩れ始める。

「わ、わああ!」

ワルターたちは急いで遺跡の中から飛び出す。

しかし、外では地震の衝撃で近くの山の湖から大量の水が流れ、ワルターは遺跡ごと津波に飲み込まれてしまった。

日本

「千秋、そつちはどうだ？」

「ダメだ、ここじゃない。鈴は？」

「うくん、こつちもハズレね……蘭は？」

「あの……何で私も掘らなきゃならないんですか？」

四人はカプセルの埋めたと思われる場所を手当たり次第掘っていた。

「しかし、5年近く前に埋めたとするとやっぱり場所が分からなくなるなあ。」

既に日が暮れ始めていた。

「仕方ねえな……今日の所は……」

「あつたわよ！」

「えっ!？」

三人は鈴の方へと行く。鈴は、穴から大きめのお菓子の缶を出す。仲を開けると玩具やら手紙やら色々が入っていた。

「うわあ〜！懐かしいな！」

弾はソフビ人形を取る。

「ガ○ラのフィギュア。埋めたこと忘れて後で家中探したんだっけ。」

「私のミ○ー、カチューシャ懐かしいわね……」

「鈴さんってそんなもの付けてたんだ。」

蘭は少し面白そうに言う。

「べ、別にいいじゃないのよ！夢の国にまで突き飛ばすわよ！（一夏に選んでもらった物なんて言ったら流石にやばいし……）」

「それで千秋は……」

「……………」

千秋は一つのロボットの玩具を見ていた。ロボットの足の裏には「いちか」とひらがなで書いてある。

「ファイバードの玩具……………」

「……………小学生の頃、千冬姉が一体だけ買ってくれてき。一夏と取り合っていたんだよ。そしたらある日、道場に持って行こうとしてさ、何に使うんだよって聞いたたら『箒が欲しいって言ったから貸してくる』ってき。それっきり、引越すまで帰ってこなかったんだけど……………」

「ああ……………そう言えば埋めるとき、どうしてロボットの足の裏に一夏以外の名前が入っているのか気になっていたけどそう言う事だったのね……………なんかだれかとの相合傘みたいな感じがして疑問に感じていたけど……………」

鈴は何となく納得している。確かにロボットのもう一方の足の裏には「ほうき」と書いてあった。

「ん？」

そのとき蘭は掘り出された穴が赤く光っていることに気がつく。

「でも、今思えばかけがえのない宝物だよな。」

「宝物ね……………」

「あの……………三人とも懐かしい話をしているのはわかるけどちよつとこっち見て。」

「……………」

三人は蘭が指を指した穴の方を見る。

「赤く光ってる？」

「光の反射とかじゃなさそうだな……………」

やがて光は消える。

「もつと下に何か埋まっているってことじゃないの？」

「まさか。」

「でも、……………昔何かが立っていたって言うから何かあるかも……………」

三人は穴を掘り始める。

「ちよつと、もう日が暮れるのに……………」

「じゃあ、蘭は先に帰ってる。俺、もう少し遅くなるって言うてとい
て。」

「もう！私も掘るわよ！」

蘭も掘るのに加わる。

ソースカ平原

「……………う、うう……………はっ!？」

津波に吞まれて気を失っていたワルターは目を覚ました。

「パワーストーン！パワーストーンはどこだ!?!どこだ!?!」

『若君〜!』

ワルターはあちこちを振り向いていると上空から飛行艇が降りて
来た。

「カーネル！」

「若君、大変です。地上絵が……………」

ワルターは、気を失っている二人の部下を飛行艇に乗せ、要塞へと
戻る。要塞からモニターで見ると水が流れてしまったことで湖の底

に何か書かれているのが分かった。

「おぉーっ！地上絵の隠れた部分が現れている。水の抜けた池のそこから、石版と同じ古代文字が……して、あの文字はなんと!?」
『さっさ』と『あっち』へ』でございませす。」

『さっさ』と『あっち』へ』!? 池に記された文字が『さっさと、あっちへ』……池!? 『さっさとあっちへ行け』か!ならば、あの指先の方向にパワーストーンが!?ザゾリガン?急速発進!さっさとあっちへ行け!!」

ザゾリガンと呼ばれた要塞は猛スピードで飛行を開始した。

日本 夜

「もう、すっかり夜になっちゃったわよ!どうするのお兄い!」

穴を掘り続けていた四人だったが気がつけば空はすっかり星の輝いている夜空となっていた。

「見つけた!」

三人は穴の中から巨大な宝石のようなものを取り出す。見た感じでは赤い掌に収まるほどの大きさだった。

「でっかいな……」

「まさか、こんなところに宝石が埋まっているなんてね。」

「でも、こんなデカイ宝石なんて……」

そのとき、四人の脳裏に何者かの声が響いた。

「!?いい、今のは!?」

「千秋にも聞こえたか?」

「ええ、レジエンドラの勇者って……」

「後、復活の呪文を唱えよって言っていました。」

四人は宝石を見る。

「……俺たち、なんか変なものを見つけちゃったようだな……」

千秋がそう言った矢先、何かものすごい物音が聞こえて来た。

「ん?何かすごい音が……って何あれ!?!」

鈴が驚きながら指を指す。その先には巨大なサソリの姿をしたザゾリガンがこつちに向かって飛来していた。

一方のザゾリガンの中ではワルターが四人がパワーストーンを持っている姿を見る。

「あれだ!くそお!どこのどいつか知らんが、パワーストーンを横取りする気だな!?!そうはさせるか!キャノンガーを出せ!」

ワルターは走っていく。

「若……ええい!カスタムギアを出せ!若君の護衛をするのだ!」

ザゾリガンから砲撃型装備を搭載した戦闘ロボ・キャノンガーが発進する。

「パワーストーンは渡しはしないぞ!!」

キャノンガーは千秋たちの所へと向かって行く。

「ねえ、なんかやばいんじゃない?」

「俺も同感。」

「私も。」

「みんな、分かっているよな?」

四人は後ろを振り向く。

「二」逃げるんだよオオオーーーーーッ!!」

四人は走って逃げていく。しかし、その目の前にキャノンガーが着陸する。

「まずい！別れて逃げ……」

千秋が言いかけたとき、周りに護衛として来たカスタムギア三機が着陸し、四人の退路は断たれてしまった。

「私たちどうなるの!？」

「俺だって知りたいぜ!？」

四人が怯えている中、キャノンガーの胸のコックピットが開き、ワルターが姿を現す。

「あつ、中々の男前。」

蘭は何気に言うが千秋たちは警戒する。

「そこのお子よ、大人しくそのパワーストーンを渡したまえ。」

「えっ? 私のこと?」

パワーストーンらしきものを持っているのは鈴しかない。

「えつと……これよね?」

「多分。」

「……って! 誰がお子よ! 私はこれでも高校生よ! 胸がないからつて……」

鈴が激怒して文句を言う直後、ワルターは四人の足元に発砲する。

「きゃあ!」

蘭は思わず悲鳴を上げた。

「私も手荒なまねはしたくはない。さあ、パワーストーンを渡したまえ……」

「お、お前は一体何者なんだ!？」

ビビりながらも千秋は聞く。

「フッフ。名乗るほどのものだが、訳あって名乗らない……さあ、大人しくそのパワーストーンを渡すのだ。」

「くそ……このまま黙って渡すしかないのか?」

「でも、私たちの専用機は使用制限でプロテクトが掛かっけて今使えないのよ?」

千秋と鈴は悔しがりながら言う。

IS学園の学生の一部には専用機という通常の機体とは違うISが送られる。

鈴は中国代表候補生、千秋は男性初のIS適性を持った生徒だったため専用機が送られているのだが、現在はガイスターを狙われないようにするため起動プログラムにプロテクトがかけられてしまい展開することができない。

しかし、相手は自分たちよりも遥かに巨大なロボット。

使えたとしても相手にできるとは言い切れない。

そのときまた四人の脳裏に声が響いた。

「また聞こえやがった!」

「復活の呪文……」

「でも、誰も知らないんじゃない……」

「あの人なら知っているんじゃないんですか?」

蘭はワルターのことを見ながら言う。

「お前な……そんなこと聞けるわけが……」

「大丈夫、大丈夫……」

「何をごちゃごちゃ言っているのだ!? 渡すのか渡さんのか?」

蘭はパワーストーンをもってワルターの方を見る。

「あのおじさん!」

「お、おじさん!」

「どうして大人は、私たち子供をいじめるんですか!? 私たちは、何にも悪いことしてないのに……うう……」

「へ?」

突然泣き出した蘭にワルターは思わず驚く。

「私たちは偶然、これを偶然見つけただけです。これがパワーストーンなんていうのも今、初めて聞いたんです……それなのに、それなのに……どうしてこんな怖い目にあわなきゃならないの!?! ひどいですよー!」

「な、何でもいから早くそれを渡すのだ……」

「うう……渡してもいいけど、これって一体何なんですか?」

「それは……って言えるか！」

「ふーん、本当は知らないんでしょう？」

「バ、バカ言うな。知ってるけど言わないだけだ。」

「ほんとうですかああ……!? 大人はすぐ嘘つくからなあ……」

「知っていると言っているだろう!!」

「だったら言ってくださいいよ？」

「その石はパワーストーンだ！」

「それはさつき聞きました。」

「その中には、レジエンドラの勇者が封印されてるのだ!!」

「それも知ってまあゝす。お次どうぞ。」

「勇者を復活させるには……」

「復活の呪文を唱える。」

「そうだ!!」

「じゃあ、その呪文は？」

「その呪文はこうだ! 『黄金の力護りし勇者よ、今こそ甦り我が前に現れ出でよお!!』 だあ!!……あ、しまった!」

「やりにい!」

「流石、蘭だ! 名演技だったぜ!」

「まあ、一夏の前だけ化けの皮被ってただけのことはあるわね。」

「まあ、そんなことは置いといてさつさと復活させるぞ!」

「おのれ! 奴らに勇者を復活させてなるものか!!」

ワルターは慌ててコックピットの中へと戻る。キャノンガーは再び動き出し四人に向けて銃撃を開始する。

「逃げろ!」

四人は、急いで走って逃げていく。

「逃がすな!」

他のカスタムギアも銃撃を開始する。四人は止まらぬ速さで走って逃げるが途中で蘭が転んでパワーストーンを落としてしまう。

「あっ!」

「蘭!」

弾は慌てて戻る。パワーストーンは鈴の足元まで転がっていき、鈴

が拾う。

「どうしよう!このままだと弾たち二人が!?!」

「どうだったって……そもそもその石で勇者を復活させればいいんじゃないの?」

「あつ。そうか。」

鈴は急いでパワーストーンを掲げる。

「黄金の力護りし勇者よ、今こそ甦り我が前に現れ出でよ
おおおおお!!!」

その瞬間、パワーストーンが光り出し、雷が落ちる。更に裏山を取り囲むように街のあちこちから石柱が現れ、エネルギーを放電し始める。

「何何何何!?一体全体どうなっちゃてんの!?!」

「これって古代遺跡とかであるストーンサークル?まさか、俺たちの街は遺跡の上に立っているとでもいうのかよ!?!」

千秋の推測を他所にパワーストーンは、鈴の手から離れる。

「あつ、パワーストーンがあ!?!」

パワーストーンは輝きを増したかと思うと黄金色の車へと変化し、一体の武士のような姿のロボットへと変形した。

『黄金剣士ドラン、見参!!』

「嘘……」

「石がロボットになった……」

二人以外にも蘭をおんぶして逃げている弾も口を開けて驚いていた。

「あれが、レジェンドラの勇者なのか?」

ワルターもコックピットの中からドランの姿を見る。ドランは鈴たちの目の前にゆっくりと降り立つ。

『我が名は黄金剣士ドラン。レジェンドラの勇者だ。』

「しゃ、喋った……」

「もう、訳が分かんない。」

ようやく追いついた弾たちも加えて四人は啞然とドランを見ていた。

『我が主よ。』

「主？もしかして……私たち？」

『いかにも！私を目覚めさせた君はすなわち、我が主。』

「じゃ、じゃあよ……鈴の命令なら何でも聞くってことか？」

『主に忠義を尽くす。それが勇者の勤め……なんなりと命令を。』

「そ、そう。それじゃあ、命令するわ。あいつらをやつつけて！」

鈴はドランの後ろにいるワルターたちに指を指す。

「ギクツ!？」

『心得た!』

ドランは腰の鞘に納まっている刀を引き抜き、構える。

来ちやつた！宇宙海賊ガイスター！

「ええい……私に従わぬ勇者に用はない！やってしまえ!!」

ワルターはキャノンガーをカスタムギアの背後に移動させる。前方に出たカスタムギア三機はドランに向かって銃を発砲する。

『でやああ——っ!!』

ドランは銃撃を避けながら初めに一機のカスタムギアの両腕を切断する。続いて背後に回ったもう一機を高速で一機に近づき横から切断する。さらに残りの一機の攻撃を避けてジャンプをし、刀を構える。

『稲妻切り!!』

すると刀に稲妻が落ち、電気を帯びる。そのまま残りのカスタムギアを縦から一刀両断した。

「やるな。さすがはレジェンドラの勇者……だがこのキャノンガーに勝てるかな!?!」

最後に残ったワルターはキャノンガーの両肩に装備されているキャノン、両腕のバルカン、胸部のミサイルを連射する。

『ヌウっ!?!』

ドランは、守る態勢を取りながらも攻撃を受け続ける。

「!!ドラン!?!」

鈴たちは心配しながらドランを見る。

「いつまで耐えられるかな?」

ワルターは攻撃を緩めず、ドランを追い詰めていく。

『……ゴルゴ——ン!!』

ドランが叫んだ瞬間、空から雷が落ち、地面が裂け始めた。

「何!?!」

割れ目からは行方を暗まっていたゴルゴンが咆哮を上げながら現れる。

「こ、今度は金ピカの怪獣!?!」

「この街大丈夫なのかよっ!?!」

『ゴルゴン、黄金合体だっ!!』

「グワアアアアアアアア!!!」

ドランの呼びかけに反応し、ゴルゴンは変形をし始める。胸部の部分が空き、足が180度回転、尾が変形し腕になる。

『うおおお———っ!!!』

ドランは変形中のゴルゴンに向かって走る。

『たああ!!』

そして、ジャンプをしたのかと思いきや変形し、空いた胸部に収まる。同時にゴルゴンの下顎が下がり新たな顔が現れた。

『黄金合体、ゴルドラ———ん!!!』

『来ちゃった！宇宙海賊ガイスター！』（鈴の声）

「これが、ゴルドラン!？」

ワルターは、驚いた顔で着陸したゴルドランを見る。

「ひゃあ………派手だな………」

「活かすじゃないのっ!」

鈴たちは合体したゴルドランに興奮する。

「きつ！キャノンガーを舐めるな!!」

キャノンガーはゴルドランに向かって集中砲撃を始める。ゴルドランは避ける様子を見せず爆煙に包まれて行く。

「止めだあ!!」

キャノンガーは更に背部に搭載されている大型ミサイルを展開し、ゴルドランに向かって発射する。ゴルドランがいた辺りは大爆発する。

「「ゴ、ゴルドラン………」」

「フッフッフ………本当の主を崇める報いだ。ん!？」

ワルターは驚いた顔で唾然としていた。

黒煙が晴れるとそこには全くダメージを受けた様子がないゴルドラ
ンが堂々と立っているのだ。

『お主の攻撃はそれまでか?ならば今度はこちらから行くぞ!』

ゴルドランは腰の左側に装備している刀を引き抜く。

『スーパ―龍牙剣!一刀両断斬り!!』

ゴルドランは猛スピードでキャノンガーに向かって接近すると目
にも止まらぬ速さでを斬る。

キャノンガーは、斜め真つ二つに切断され、ワルターは脱出用の小
型戦闘機で脱出する。

「くそお………ゴルドランめ、覚えておれ!!」

ワルターは悔しそうに言いながら飛び去って行った。

「やった!」

鈴たちは喜んでゴルドランの所へと行こうとした。

『!?主よ!近づいてはならぬ!!』

「え?」

鈴たちがゴルドランの声で止まった瞬間、その真上をビームが通り
過ぎて行った。

「な………何今の?」

『この攻撃は………』

『しもうがなくて来てみたら思っていたよりも飛んでもねえ「宝」があっ
たぜ!』

地面から二体の恐竜が現れる。ゴルドランは、鈴たちを庇いながら
警戒する。

『貴様らは!?先ほどの連中の仲間か!?』

『ああ!?何言ってるんだコイツ!』

『まああ、いいじゃねえか!とんだ掘り出しもんが見つかったんだか
らよー!』

「あいつら……まさか……」

千秋は何となく二体の恐竜の正体を察した。

『金ピカのロボット、こんな珍しい「宝」を持ち帰ればダイノガイスト様も大喜びだぜ!!』

『プテラの奴、コイツを持ち帰ったらきつと悔しがらるだろうなあ!』

『貴様等……一体何者だあ!』

『俺たちのことを知らねえのか? なら、基地に連れ帰ってからじっくり教えてやるぜ!!』

恐竜たちは変形をし始める。

『チエーンジツ! ホーンガイストツ!!』

『チエーンジツ! アーマーガイストツ!!』

恐竜はガイスターのメンバー、ホーンガイストとアーマーガイストへと変形した。

「こいつら……もしかして……宇宙海賊ガイスター!？」

鈴たちは驚いた様子でその光景を見ていた。

デッデッデッデッ、デッデッ、デッデッデッデッデッ! デー! (ア

イキヤツチ)

日本 ザゾリガン内

「おのれ〜！私が手に入れるはずだった勇者がっ!!」

ザゾリガンの帰還したワルターは悔しそうにソファアーに腰を掛ける。

「しかし、若君。どうやら、全く運が悪かったとは言いい切れないようですぞ。」

「何？どういうことだカーネル？」

「あれをご覧くださいませ。」

カーネルの指示でモニターにゴルドラんたちの姿が映る。

「あのロボットはなんだ？」

「本国の情報によれば『宇宙海賊ガイスター』のものでございます。」

「ガイスターだっ!？」

「はい、噂によれば、奴らの狙うのは『宝』。どうやら、連中もレジエンドラの勇者について感づいておるやもしれませぬ。」

「では、奴らもパワーストーンを狙っているというのか!？」

「おそらくは。しかし、若君。ガイスターの戦闘能力は我が国でも未知数。ここは貴重なデータを取得するためにも高見の見物をするのもよいかと……」

「ふむ、もし奴らがああ勇者を消すというのなら逆に好都合か……」

「その通りでございます。」

「フフフ……よかろう。では、しばしああ勇者の戦いぶりを見物させてもらおう。」

地上

「ゴルドラン！気をつけて！」

鈴はゴルドランに呼びかける。

『主よ、それはどういうことだ!?!』

「ガイスターはこの世界において一番ヤバい組織なのよ！」

「これまで様々な宝を奪って負けたことがないんだ！」

『何!?!』

ゴルドランは二人を改めて見る。

『どうした？今頃になって怖くなったか!?!』

『私はレジエンドラの勇者、たとえ相手が誰であろうと恐れはしない』

！』

『そうかよ。だが、この大ききじや明らかに俺たちの方が小さいなあ。』

アーマーガイストがゴルドランを見ながら言う。

確かによく見ると二人よりもゴルドランの方が明らかに大きかった。

『だったら、あれをやるか！』

『おうー！』

二体は同時にジャンプし、光に包まれたかと思いきやより巨大な姿になって着陸する。

『二体合体、ホーマー!!』

『何!?!奴らも合体できるのか!?!』

ゴルドランは目の前に着陸したホーマーを見ながら言う。

『ハツハツハハハ、このくらいデカけりや十分だあ!!覚悟してもらおうぜ!!』

『大きければいいと言うわけではない!スーパー龍牙剣!一刀両断切り!!』

ゴルドランは先ほど同様に技を仕掛ける。

『さつきとは同じようにはいかないぜ!!喰らえ!!』

ホーマーは両腕のミサイルを発射する。

しかし、狙ったのはゴルドラン自身ではなく、彼の足元であった。

『ぬっ!?!しまった!?!』

爆発の衝撃でゴルドランは体勢を崩す。

『おりゃああ!!』

ホーマーは体勢を崩したゴルドランを殴り飛ばす。ゴルドランは龍牙剣を手放してしまい、地面に打ちつけられる。

「二ゴルドラン!!」

『主よ.....近づいてはならぬ.....』

駆け寄ろうとした鈴たちをゴルドランは制する。彼の背後には止めを刺そうとする。

『へっへっへっ．．．．．どうやら目が覚めたばかりで全力が出し切れねえみたいだな。』

『くっ．．．．．』

『まあ、それはそれで助かるぜ。できるだけ無傷で手に入ればトレイダーの奴に高く売り飛ばせるからな。』

ホームマーはゴルドランの目の前まで来ると両手を振り上げる。

『クッ．．．．．私としたことが．．．．．』

『せいぜいお寝んねしてな！次に目を覚ますときは．．．．．』

『ブラアアアアアアアアアア!!!』

『「「えっ!?!」」』

『「!?こ、この声は!?!」』

突然の遠吠えにホームマーは攻撃を中止する。

「何何!? 一体何が起こったの!?!」

「おい．．．．．あれって．．．．．まさか．．．．．」

混乱している蘭を他所に弾は顔を青くして指を指す。三人がその方角を見て見ると二機の戦闘機がこちらに向かって飛んできていた。

『な、な、何故ボスがここに!?!』

「ボス!?!」

「つてことは……俺たち、飛んでもねえことに巻き込まれた?」「巻き込まれたというよりは……一番危ない相手が来たのよお!!」

二機の戦闘機が着陸するとホーマーは分離し、元のホーンガイストとアーマーガイストに戻った。到着した二機の戦闘機は変形する。

『チエーンジツ!!ダイノガイストオ!!』

『チエーンジツ!ジエツトガイストオ!!』

変形した二人を目の前にホーンガイストとアーマーガイストは怯える。

「あれが……ダイノガイスト……」

鈴は恐る恐る目の前に立っているロボットの名前を言う。

デッデッデッデッ、デッデッ、デッデッデッデッデッ!デー!(アイキヤツチ)

ザゾリガン内

「ダ、ダイノガイストだと……」

ワルターはソファーから立ち上がり、持っていたグラスを落とす。

「……二年前に突如姿を現し、かつてISによってもたらされた女尊男卑の世界をことごとく破壊した謎のロボット。その正体は一切謎のロボットがここに……」

彼の傍に居たカーネルも緊迫した表情でダイノガイストの姿を見ていた。

「至急、奴を映せ！これまでほとんど写されなかった奴の姿を徹底的にとらえるのだあ!!」

地上

「ど、どうしよう……」

鈴は怯えた顔で言う。それは千秋も弾たちも同じだった。

？ダイノガイスト？

それは、二年前まで続いていた女尊男卑の社会に突然姿を現し、その象徴ともいえるISを次々と奪っていく謎の海賊集団「宇宙海賊ガイスター」の首領。

その本人が目の前に現れたのだ。

ダイノガイストは鈴たちを見ることなくホーンガイストたち二人を見ていた。

『あ、あのボス………どうしてこのようなところへ……』

『この馬鹿どもが。』

『へっ？』

ダイノガイストは傍に居たジェットガイストを自分の前に寄せると頭をグリグリしながら話を続ける。

『お前たち二人が受け取ったチップは、ジェットが俺様の名義でやったものだ。』

『えっ？ってことはボスが指示を出したんじゃない……』

『俺様だったらお前ら全員を呼び集めて云うわ。』

『す、すまない……いち……じゃなかった。ダイノガイスト様の「宝」をどうしても回収したいと思っていたから……』
『宝?』

『宝と言うのはタイ……』

『パワーストーンのことだ。』

『パワーストーン!?!』

二人は面食らったような顔でダイノガイストを見る。

『少し前にトレイダーの奴から「レジエンドラの財宝」の話聞いてな。それを手にするにはどうしてもレジエンドラの勇者8人が必要なのだ。』

「……は、八人!?!」

『ぬっ?』

ダイノガイストは今更鈴たちの存在に気づく。鈴たちの顔が青くなる。

(ヤバイ!!気づいていなかったんだ!!どうしよう!!)

『……鈴……』

『え?』

ダイノガイストの口から自分の名前が出たことに鈴は驚く。

「あの今……私の名前を……」

『ジェットに罰としてリンリンとなる鈴の首輪をつけると言おうしただけだ。ガキに用はない。』

「そ、そうですね……(ホッ)。」

ダイノガイストはゴールドランの方を見る。

『貴様がレジエンドラの勇者か。』

『いかにも。』

『ふん、こいつ等の目覚めさせられたのなら仕方ない。だが、まだ七つある。それをいた『ダイノガイスト様……』……なんだ?』

ダイノガイストが言いかけたとき、ジェットガイストの声が遮った。

『その……感じちゃって♡』

『……俺様の名義を勝手に使った罰だ。』

『あつ、あああ♡……もつと♡』

「こんなところで何へんな声上げてんのよ!？」

鈴に突っ込まれながらも積極的にダイノガイストは何やら危なさそうな声を発しながらも積極的にダイノガイストに触られている。

「ゴールドラン、後七つもパワーストーンがあるって本当?？」

蘭はゴールドランを見ながら言う。

『うむ、奴の言う通り私にはあと七人の仲間がいるのだ。それぞれのパワーストーンを早く見つけねば……』

(それはいいことを聞いた。)

『ぬっ?』

一同は上空を見る。

上空にはザゾリガンが飛来していた。

「ならば、その残りのパワーストーンを手に入れるまで……」

ワルターが指を鳴らすと同時に地上に向けて攻撃を開始する。

「うわああ!？」

「きやああ!!」

『……小癩な。』

「ハハハハハ、ハッハハハッハ!!」

ダイノガイストとゴールドランがいる辺りが爆発するのを見ながらワルターは笑う。

ボスの寄り道

前回までのあらすじ！（鈴のナレーション）

凰鈴音よ！

前回、訳の分からないロボット軍団を倒したゴルドラン！

でも、そんなのも束の間に宇宙海賊ガイスターが私たちの目の前に現れて大ピンチ！

更に親玉まで来て、奴の口からドランの他に後七つのパワーストーリーがあることが分かったんだけど……

私たちこれからどうなるの!?

『ボスの寄り道』（鈴の声）

ザゾリガン内

「フツ、ハハハハハ。」

ワルターはダイノガイストたちがいた辺りが上がる黒煙を見ながら笑う。彼の傍ではカーネルがグラスにワインを注いでいる。

「私に忠誠を誓わぬ勇者に用はない。改めて七つのパワーストーンを探すとしよう。」

ブオオーン!!

ところが黒煙の中から金色のスポーツカーが飛び出してきた。

「なっ、なん『なんと!?!』なんだっ!?!」

ワルターとカーネルは驚いた顔で見る。

スポーツカーは着地すると高速でその場から離れていく。中には鈴たちが乗っていた。

「じ、自動車になった……………」

「あれは……………」

「黄金の車ですな。」

「そんなこと見ればわかる!!」

一方の後ろでは元の姿に戻ったゴルゴンが再び地中へと潜って行った。

「おのれ、逃がすものか!!」

ワルターはザゾリガンの砲台をスポーツカーに向けて、発射する。スポーツカーはレーザーの雨の中を走り抜けていく。

「ちよちよっ、ちよつとードランー!このままじゃぶつかるわよ!?!」

『この程度の攻撃で私はやられはしない!』

ドランはそう言いながらも走り続けた。

「くそ……ちよこまか逃げおつて！こうなつたら、この薄汚い街諸共吹き飛ばしてやる!!ハイパー粒子爆弾、発射!!」

「お待ちを。」

「ん？」

最終手段を執行しようとしたワルターをカーネルが止める。

「じい、せっかく決めているのになぜ止める!？」

「若君、ここで短気を出されては我らの……いや、我が国の野望は果たせませんぞ！」

「くっ……ならどうしろと言うのだ!？」

いまいち納得いかないワルターは、カーネルに問う。

「ここは奴らを泳がせてみるのも一興かと……」

ザゾリガンは方向転換して飛び去って行く。

『おのれ……この俺様を埃まみれにするとは……』

一方のダイノガイストは土埃まみれになった状態で他の三人とともに姿を現した。

『うへ、ぶへー!ひどい埃だぜ!』

『全くだ!お宝どころか埃まみれになるなんてよ……』

『んん!』

ジェットガイストは二人の方を見る。

『い、いや……奥方のことを悪く言つたつもりは……』

『そうそう、奥方の命令はダイノガイスト様の命令と同じだし……』

『ふん。(鈴と弾は無事に逃げたようだな……バカ兄貴はまるで俺そのものだ。どこで踏み間違えた?)……ん?』

ダイノガイストは足元に転がっているお菓子の缶に気がつく。

『これは……』

ダイノガイストは箱を手取る。

『どうする?』

『どうするもこうもあのガキどもを……』

『お前たちは先に基地に帰つてろ。』

『そうそう、基地に帰って汚れを……って、え?』

ホーンガイストはダイノガイストの方を見る。

『あの……ボス、今なんと?』

『お前ら揃って、先に基地に帰れと言ったんだ。』

『ボスはどうするんで?』

『俺は少しこの辺を見てから帰る。』

『そ、そうすか。』

そう言うときホーンガイストとアーマーガイストは恐竜形態に戻り、地中へと潜って行った。

『ジエツト、お前も帰れ。』

『でも!』

『帰らないと今度はロープで体を縛るぞ。』

『ろ、ロープで!?!』

『嫌だったら……』

『喜んで♡』

『……しょうがない奴だ。』

そう言うときダイノガイストとジエツトガイストは人間台サイズにまで縮まる。

『……それが例のタイムカプセル?』

『ああ、やはり五年近くも埋めれば表面は錆びるな。』

ダイノガイストはその場に座り、缶の蓋を開ける。ジエツトガイストは甘えるように寄り添う。

『ほう、あの頃の玩具か。』

『懐かしいな。』

二人が目についたのはファイバードの玩具だった。こちらは錆びている様子はなく綺麗な状態のままだ。

『ん?これは何だ?』

ダイノガイストは缶中に入っている一通の封筒を見る。名前は千秋だった。

『ふん、あのバカ兄貴のか。そう言えばこの中に手紙を入れていたな。どれどれ……』

二人は手紙の内容を読む。

「どうにか諦めたようだな。」

弾は、後ろを見ながら確認する。

「よかった。」

「これでどうにか家に帰れそうね。」

『いや、皆はこれから私と一緒に第二のパワーストーンを探すのだ。』

「「「ええ!?!」」」

ドランの一言に全員が思わず口を開く。同時に両サイドのドアから双眼鏡と懐中電灯が出て来た。

「これは?。」

「どう見ても懐中電灯だけど?。」

弾と千秋はそれぞれアイテムを取ってみる。今度は鈴の座ってい

る席の目の前に台座が出て来てバッチのようなものが置いてあった。

「私はバッチ？」

『それらは、私がパワーストーン探しのために準備した「ゴールドシーバー」「ゴールドライト」「ゴールドスコープ」だ。』

「へええ……」

「ねえ、ドラン。私の分は？」

『すまないが三人分しかない。』

「しよぼん。」

「まあ、もらえる物なら記念にもらっておくわ。」

鈴は早速ゴールドシーバーを胸に付ける。

「うん？」

弾は自分の持つてるゴールドスコープの液晶画面の部分が光っていることに気がづく。写っているのは三角錐の物だった。

『第二のパワーストーンはこの形の示す所にあるという。心当たりはないか？』

「これって……」

「どう見てもエジプトだな。」

『エジプトとは？』

「ちよつと世界地図写して。」

四人はゴールドスコープに写された世界地図でアフリカ大陸に指を指す。

「……よ。」

『心得た！』

そう言った瞬間、ドランは道を外れて海に飛び込んだ。

「……えっ?! うっそでしよ?!」

ドランは水中に潜伏するとライトをつけて何事もなかったかのように進み続ける。

「この車、海の中も走れるんだ……」

「うわああ……魚が泳いでいてロマンチック……」

「って言っている場合じゃないだろ!」

千秋にツッコまれて全員思い直す。

「そ、そうよね。私たちこれ以上へんなことに巻き込まれるのはごめんよ!!」

「俺だつて家の用事があるし。」

「私も同じ。」

『私に話を聞いてくれ。』

ドランは窓を閉めると映像を映す。

『レジェンドラを守るために作られた私たち八人の勇者は、自分を覚めさせた者のみに忠誠を誓う。すなわち、悪の心を持つ者に復活させられた勇者は悪の勇者となってしまうのだ。』

「えっと……つまり、残りのパワーストーンがもしガイスターに奪われたら……」

鈴はちよつと想像してみる。すると大笑いしたダイノガイストが地球を握り潰す妄想が浮かんだ。

「……不味いわね。」

『私は、レジェンドラを守るために残りすべてのパワーストーンを手に入れなければならぬのだ。』

「あのちよつと質問。さつきからはなしに出てくるレジェンドラつて、一体何なんだ?」

千秋はドランに言う。

『レジェンドラ、それは黄金郷と呼ばれた超文明の名だ。』

「お、黄金郷!?!」

「超文明つて……ずいぶん昔の戦隊にそんなのいたような……」

「レジェンドラ……」

『レジェンドラがどこにあるのか、私にもわからない。だが八人の勇者が揃ったとき、レジェンドラへの道は明らかになるだろう。私はレジェンドラを心悪しき者から守りたい。頼む! 私に力を貸してくれ!』

四人はそれぞれのレジェンドラのイメージを思い浮かべてみる。

「レジェンドラ……(全てが金でできた街)」

「レジェンドドラ……(二十年くらい前の某戦隊のイメージ)」

「レジェンドドラ……(ド○えもんに出てくる未来都市)」

「レジェンドドラ……(聖闘士○矢に出てくる聖域)」

「四人は思わず目を輝かせる。」

「えくつと、つまり、残り七つのパワーストーンを集めて……」

「俺たちが復活させれば……」

「レジェンドドラの場所がわかるってことね!？」

『そうだ!』

「よし!こうなったらみんなで協力しましょう!」

「俺も!」

「俺も!店の時間が空いたとき限定だけど。」

「私も!」

『ありがとう!わかってくれたか!皆の気持ちに感謝する!』

「ドランは急いで目的地へと進んで行く。」

上空 ザゾリガン内

一方、一時撤退したワルターは人工衛星を通じながら移動しているドランたちの行き先を推測していた。

「フッフ、次のパワーストーンがあるところまで私を案内してくれよ。黄金郷・レジェンドラ、そこには人類が未だかつて手にしたことのない超パワーが秘められているという。このレジェンドラの石板にはそう記されていた。いずれ全てのパワーストーンから勇者を復活させ、その超パワーを掴んで見せる！」

「ワルター様！予測到達地点が判明しました！」

部下はパネルを操作し、地図に移す。

「ふむ、エジプトか。じい！至急本国へカスタムギアの補給要請を！」

「かしこまりました。」

ワルターの命令にカーネルはお辞儀をしながら言う。

デッデッデッデッ、デッデッ、デッデッデッデッデッ！デー！（アイキヤッチ）

ガイスター基地

ダイノガイスターの命令を受けてホーンガイストとアーマーガイストはトボトボガイスター基地に戻ってきていた。

『つたくよーあの勇者すら手にすればまだ別だったのかもしれないな！』

ホーンガイストはため息をつきながら酒を飲む。

『だが、奥方が俺たちに見つけさせようとした「宝」、本当にそのパワーストーンって奴だったのかイマイチ、ピンと来ねえな。』

向かい合って一緒に飲んでるアーマーガイストはさりげなく言う。

『それはどういう事だ？』

『だってよ、ボスにベタ惚れのあの奥方だぜ？ボスとは夜はああだこうだやっているし、戦闘能力は俺たちよりも上だし、ボスのことを誰よりも理解している。そんなあるかどうかわからなかったモンを俺たちに場所まで指定させて探させるか？』

『うーん、確かになあ……。奥方はいつもボスの傍から離れねえし、出撃するときもボスと一緒に行動して俺たちに命令を下すことはめったにねえ。そんな奥方がボスの名義使って探させに行くなんてなんか引つかかるぜ。』

二人は頭をひねりながら考えるが当然答えが出るはずもない。

『まあ、ボスと奥方は人間の姿になれるんだし、ひよつとしたら外へデートをしたいから遠回りな方法使ったんだろうな。』

『いつも俺たちがドジこくからな。たまにはボスの自由にさせておくか。』

二人はテレビを付ける。

『そう言えば今日はロードショーで「新エ〇ア・FINAL」やるんだっけな?』

『ちなみにお前はどっちだよ?俺は惣流派だぜ?』

『そこは式波だろ?まあ、俺はマ〇派だな。新キャラで可愛いじゃん。好みだし。』

『てめえ、旧劇舐めんなよ?』

『それはそうとプテラとドクター、部屋で何やってんだ?サンダーはもう寝てたから気にしてねかったけど?』

『あいつらのことだ。どうせ、新兵器のテストでもしてんだろうよ?』

『そうだな、おお!始まった、始まった。』

二人はつまみのピーナッツを摘まみながらテレビを見る。

織斑宅

『……三年前とちつとも変わっておらん。』

ダイノガイストは家の前に立ちながら言う。幸い夜が更けていたこともあり見られる心配はない。彼は早速玄関の鍵を開ける。

「なあ、こうも勝手に入っていいののか？」

中間形態になった箒が心配そうに聞く。

『元は俺の家だ。問題ない。』

「だが、もし千冬さんとかがいたら……」

『あれを見る限りではおそらくあのバカ姉は寝ているだろう。それにバカ兄は鈴と共に帰って来ていない。』

ダイノガイストは音を立てることなく家の中へと入って行く。中は、ある程度片付けられていて綺麗に見えるが一部屋だけ異様に酒臭かった。

『ぬう……俺の部屋か。』

ダイノガイストはそつと戸を開く。すると、入り口付近は缶ビールが大量に入ったゴミ袋がいくつもあり、ベッドでは酔っぱらった千冬が下着も身に付けないで一夏のベッドで眠っていた。彼女の手には一夏の写真がある。

『……バカ姉が。俺の部屋を何だと思っているのだ。』

「まさか……千冬さんにこんな趣味があったとは……」

ダイノガイストは怒りを箒は戸惑いを覚えた。

『とつとつ、このバカ兄の手紙を置いて帰るぞ。』

「う、うん。」

二人はさつさと部屋を後にしようとする。

「……あ、ああああ!!ダメだ一夏!」

『!?!』

二人は思わず後ろを振り向く。どうやら千冬の寝言のようだ。

「ダメだあ……私たちは姉弟だぞ……ああ……」

『……』

ダイノガイストは腰のカバーを開き銃を取り出すと注射針が付い

たカプセルを装填し、千冬に向かって発砲した。

「ああ……そこ……」

千冬は気づくこともなく眠っているが寝言は言わなくなった。どうやら麻酔らしい。

『バカ姉が。俺の名をそういうふうに言っているのは筈だけだ。』

「一夏……私も……」

『先に用事を済ませてからと言いたるところだがとにかくこのままでは俺の気がすまん。バカ兄が帰ってくる前に少し掃除する。』

ダイノガイストはベッドの下に落ちていたタオルを千冬にかけるときつきと部屋を片付け始める。

『全く、いつまでたっても変わらん姉だ。あいつら（四将）と同じだ。』

「は、ははは……」

デッデッデッデッ、デッデッ、デッデッデッデッデッ！デー！（ア
イキヤツチ）

エジプト とあるピラミッド

「ここが例のピラミッドね。」

鈴たちは目の前にあるピラミッドを見る。エジプトに到着して情報収集した結果、このピラミッドにパワーストーンらしきものが収められているらしいという情報だ。

「じゃあ、ドランは少しそこで休んでなさい。」

『すまぬ。目覚めたばかりとは言え、こうまで疲労していようとは……』

「いいんですよ、そもそも日本からエジプトまで行くこと時点がすごいことだし。ISだって、できるとは思えませんよ。」

申し訳なさそうに言うドランに対して蘭は言う。

「よし、じゃあ、急いで取ってくるか！」

「「おう!!」」

四人はピラミッドをよじ登り、入り口から入って行く。

『……頼んだぞ、主たち。』

四人は薄暗いピラミッドの中を歩き続ける。幸い千秋がゴールドライトで明かりを照らしているため視界には問題ない。

「しっかし、こういうところは不気味だな……よくトレジャーハンターものの映画でこういうところあるけどなんかしら仕掛けがあ

るんだろうな。」

「仕掛けってどういう事よ弾?」

「鈴、分からねえのか? こういう狭い通路にはな、どこかに巨大な岩が転がってくるよな仕掛けをセットして侵入者をひき殺すんだよ。」

「うわあ・・・何それ・・・怖いじゃないの。」

「まあ、大丈夫ですよ! お兄いが言う事はあまりあてになりませんか
ら!」

「蘭、そういう言い方はないだろう?」

「だって、所詮は映画でしょ? そもそも棺桶を置く人たちはそんな仕掛けを作るんだっただらどうやって外に戻って行くのよ?」

「それは・・・」

「そう言うものは映画を楽しませるための要素よ! だからこういうところになんか仕掛けは・・・」

蘭がそう言いかけた直後、何かを踏んだ。すると後ろから何やらゴロゴロと物音がしてきた。

「これって・・・」

「ま、まさか・・・冗談でしょ?」

「・・・でもないみたいだ。」

四人の後ろから巨大な岩が転がってくる。

「!!」
「!!」
「!!」

四人は慌てて走って逃げる。

ピラミッド 外

『主たち、果たして無事に戻ってこれるだろうか……』

ドランは車の状態で鈴たちを心配する。

『ぬっ!?!』

ドランが遠くを見ると巨大なザゾリガンが戦闘機を数機従えてこちらに向かって来ていた。

「とうとう見つけたぞ。」

ザゾリガン内部ではワルターがソファアに座りながらドランの姿を確認していた。

「カスタムギア軍団、出撃！」

ワルターの指揮でザゾリガンのカタパルトからカスタムギアが次々と発進していく。

『来るか！チエーンジツ!!』

ドランは車からロボットの姿へと変形し、迎え撃つ準備をする。

ピラミッド内

鈴たちはその後さまざまな罫にはまった。

槍に刺さりかかり、毒グモと毒蛇から逃げ、落とし穴に落ちる。そして、気がつけば薄暗い空間に四人揃って倒れていた。

「う、う・・・ん。みんな無事?」

「なんとかな。」

「ほらな、蘭。お前もたまには俺の言うこと聞けよ・・・」

「うん。悪かったわよ。私が馬鹿でした（ぐすつ）。」

四人は目の前に何かの石像があることに気がつく。

「これは・・・スフィンクスか?」

「多分。でも、なんで外じゃなくて中に作ってあるのかしら?」

鈴は不思議そうに石像に近づく。その直後、石像に目が光った。

「ひっ!?!」

『私の名はスミーンクス、パワーストーンを守護する石像なり。』

「ス、スミーンクス?」

「なんか中途半端な感じの名前……」

『少年少女たちよ、パワーストーンが欲しくばその命を懸けて私の出す問題に答えよ。私の問題は……』

「はーい！知ってまーす！」

蘭が一番乗りに言う。

「朝は四本足、昼は二本足、夕方は三本足の生き物は何だって問題でしよ？答えは人間よ！」

「なんだ、問題出す前に終わってんじやねえか。」

『ブウ———!!!』

「えっ!？」

スミーンクスの答えに蘭は動揺する。

『私はスミーンクス、スフィンクスとは違うのだ。あれを見よ。』

スミーンクスが言うと同時に四人の後ろに三台の？のマークの付いた台と？のマークが上に載っているピラミッド型の被り物が現れる。

『私の出す問題は全部で百問。お前たちは四人いるから本来は四百問……と言いたいところだが生憎台座が三台までしかないから三百問答えてもらう。一問の間違えも許さん！』

「「さ、三百問!?!」」

「また、私だけ省かれている……」

自分だけ抜きにされてショックを受けている蘭を除いて三人は相談をし始める。

「どうする？流石に一問も間違いなしじゃきついぜ？」

「でも、ここまで来たんだから手に入れるしかないでしょ!？」

「でも、一問も間違えずに言うのは……」

「う、うわあああ〜!!」

「ん？蘭?」

弾たちが後ろを向くとショックのあまりに泣き出した蘭の姿があった。

「どうして?どうして、今日に限って私だけ省かれているの?どうして?あんまりよ〜!」

蘭はスミーンクスの方を見る。

「スミーンクス、私たち一樣まだ子供なのよ？」

『いや、見ればわかる。』

「この時期はまだ失敗を重ねて成長していく大事な時期なのに一問も間違えないなんてあまりにもひど過ぎじゃないですか！」

『ひ、酷過ぎるか？』

「二はい、十分厳しいです。」

「それに私を抜きにするなんて、うわわああーん！一応兄よりもできるうわああーああ！できる自信があったのにああーっ！」

「やばい、蘭の奴ガチ泣きになっている……」

『では、特別の特別に一問だけ間違いを許してやろう。』

「じゃあ、俺たちは三人で答えるから三問までオツケーと言うわけで！」

『えっ!?!』

「だって三倍もやるんだから当然じゃないのよ？」

『うーむ、できる奴らだな。』

スミーンクスは納得したように言う。

「じゃあ、早速始めましょうか。」

鈴はさっさと被り物を被る。一方弾は蘭を泣き止ませながら一緒に台に立つ。

『それでは第一問を始める。第一もーん!!』

その名はアドベンジャー

前回までのあらすじ

どうも、織斑千秋です。

俺たち四人はドランと共に第二のパワーストーンを手に入れるべくエジプトに来たのですがパワーストーンがあると思われるピラミッドの中で罠に嵌まりまくり。

最終的にはパワーストーンの守護者を名乗るスミーンクスの問題に答えなければなくなりました。しかも間違えれば俺たちの命が……

一方のドランも俺たちを襲った連中を疲労した体で迎え撃とうとしている。

急いでパワーストーンを手に入れなくちゃ！

『その名はアドベンジャー』（鈴の声）

ピラミッド 外

『ゴルゴ——ン!!』

ドランは呼ぶと同時に雷が落ち、地面を引き裂いてゴルゴンが咆哮を上げながら現れる。ゴルゴンはすぐに変形をし始める。

『とわああ!』

ドランもゴルゴンに向かって走り、胸部へと変形し、ゴルドランへと合体する。

『黄金合体、ゴルドラーン!!』

ゴルドランは迫りくるカスタムギア軍団と向かい合う。

『主たちが戻るまでここから先へと一歩も通さん!!』

ゴルドランはスーパードラゴン剣を引き抜き、カスタムギア軍団の真つただ中へと走って行く。

ピラミッド スミーンクスの間

一方、鈴たちはスミーンクスの問題を次々と解いていっていた。

『特撮コーナー！第五十問からは特撮関係の問題を出す！』

「これなら俺の分野だ！」

弾は得意げに言う。

『仮面○イダーストロンガーの最終回においてそれまで登場したはずのない怪人が再生怪人に混ざっていた。その怪人は何？』

「カニ奇械人！」

ピンポーン!!

『うーむ、正解だ。超電子バイ○マンに登場する第三勢力、バイオハンター・シルバのモデルは？』

「えっと………人造人間キ○イダーのハカイダーだ！」

ピンポーン!!

『では次問題。スーパー戦隊シリーズが現在呼び名になったのはどの作品から？』

「えっ!？」

一瞬、弾は固まる。

『現在扱われているスーパー戦隊シリーズの呼び名が成立したのはどの作品からだ？』

「えつと……」

「えっ？ゴ○ンジャーからじゃないの？」

「わああ!?馬鹿!」

『ブウ———!!正解は未来戦隊タ○ムレンジャーからだ。それ以前は「戦隊」「スーパー戦隊」「超世紀全戦隊」とかなり変わったのだ!』

鈴のともない一言で後ろの床がすべて崩れ落ち、鈴たちのすぐ後ろは暗闇に支配された。

「あわわ……」

「何やってんだよ鈴!」

「ごめくん!!うっかり……」

『パワーストーンが欲しくばその命を懸けて問題に答えよと言った筈だ。』

四人は顔を合わせながら緊張する。

『さあ、次の問題に行くぞ。』

ピラミッド 外

『うおおおおおおお!!』

ゴルドランは次々と現れるカスタムギアを切り刻んでいく。しかし、ザゾリガンからは次々と新しいカスタムギアたちが発進していた。

『主たちよ、早くパワーストーンを！このままではきりがない!!』

「勇者と言えど力には限界があるはず。」

ワルターはザゾリガンのモニターからゴルドランの様子を見る

「パワーストーン捜索部隊、出動致しました。」

「抜かりないな、流星はじいだ。」

実は、出動していたのはカスタムギアだけではなかった。

各機の各部に特殊部隊を共に乗せ、地上に到達するやピラミッドの中に侵入せんと送り込んでいたのだ。

既にゴルドランの後ろには捜索隊のメンバーがピラミッドを目指して移動していた。

「こちらパワーストーン捜索隊、これよりピラミッドへ突入します！」

『よし！必ずパワーストーンを手に入れてくるのだぞ！』

「はっ！」

捜索隊はピラミッドへと突入して行く。

ピラミッド スミーンクスの間

『ダイナ○ックプロコーナー!』

「今度は、永○先生の問題か。」

「俺は結構好きだから問題ないぜ?」

千秋は緊張した顔ながらも言う。

『永○先生が連載したデ○ルマン、この作品の連載で連載中だった作品の中で唯一同時に継続して連載していた作品は?』

「マ○ンガーZ!」

ピンポーン!

『マ○ンガーシリーズ最終作として企画され、没になったマ○ンガーの名は?』

「ゴッドマ○ンガー!」

ピンポーン!

『永○先生がゲームオリジナルとしてデザインした最強のマ○ンガーは?』

「マ○ンカイザー!」

ピンポーン!

『では、次の問題。今何問目?』

「.....」

スミーンクスの問題に千秋は黙る。

「.....千秋?どうしたのよ?」

「.....す、すまない.....教え忘れた.....」

千秋は悔し涙を流しながら告白する。

『ブウ——!!正解は153問目だ。』

次は目の前が崩れてしまい、とうとう逃げ場がなくなってしまう

た。

ピラミッド 外

『はあ……はあ……』

ゴルドランは疲労のあまりに跪いていた。視界は不安定になり、カ
スタムギアの軍団の数が倍以上に見える。

『いかん……目覚めてからすぐの長旅にこの敵の数……私
の力も限界か……いや！私は負けない！』

ゴルドランは再び立ち上がりスーパー龍牙剣を構えて突き進む。

『主たちがパワーストーンを見つけるまでは絶対に！てえりや
ああああ!!!』

デッデッデッデッ、デッデッ、デッデッデッデッ！デー！（ア
イキヤツチ）

ピラミッド スミーンクスの間

「ハア……ハア……私たち……あと何問答えればいいんだっ
け？」

「ジャスト五十問だ。」

「お、俺の頭はもうパンクしそうだ……」

「お、お兄い……頑張って……」

『ここからは余程の者にしかわからないトリビアコーナーだ！』

スミーンクスは頭を使って疲れている鈴たちに容赦はしない。

『昔話の桃太郎には実は続きがある。その内容とは?』

「はあっ!?!」

「も、桃太郎!?!」

「そんなもの分かるわけ……」

「えっと、鬼の娘が親の命令で桃太郎を暗殺しようとして試みたものの逆に桃太郎に恋心を抱いてしまい自ら命を絶ってしまった悲しいお話。」

ピンポーン!

「えっ!?!蘭!?!」

弾は自分の後ろで答えた蘭に驚く。

『何をやっても死なない虫がいる。その虫は?』

「クマムシ。」

ピンポーン!

『ド○えもんには実は消されたキャラクターがいる。それは誰?』

「ガ○ヤ子。」

ピンポーン!

『日本とフランスの共同制作として……』

「ル○ン8世。」

ピンポーン!

蘭は次々と問題を解いていく。その光景に何故か三人は感動した。

『では、今何問目?』

「そう来ると思っていたわ!」

蘭は両手を出す。どうやらさつきからずっと数えていたらしい。

「数えていたのか!」

「やるわね!」

「まあ、私だっていつまでものけ者扱いは嫌ですから!」

「流石俺の妹だぜ!」

四人は固く手を握り合う。

「この調子でパワーストーンはいただきよ!」

『で、答えは?』

「ああ、答えは……あつ。」

蘭は目の前の光景に唾然とする。

「ゆ、指が……………」

「「あつ……………」」

四人は全員パーで手を上げる。

『ブウ———!!!』

再び足場が崩れ、四人がやっと立っていられるぐらいのスペースになっってしまった。

「「「あわわわあ……………」」」

『もう、間違いは許されんぞ。』

ピラミッド 外

『……………グッ。』

ゴルドランは最後のカスタムギアを破壊すると跪いた。あれだけのカスタムギアを倒すのに大半の体力を使い果たしてしまった。しかし、上空にはまだザゾリガンが残っている。

「たった一人でカスタムギア軍団を全滅させるとは……………流石はレジェンドラの勇者。だが！」

ザゾリガンのカタパルトからカスタムギアとは違う機体が発進し、
ゴルドランの目の前に立ちはだかった。

『何!?!』

「今のお前がこの砂漠戦用ロボットデザートロンに勝てるかな!」

ワルターが操縦するデザートロンは左手首から鞭を放ち、ゴルドラ
ンを拘束する。

『し、しまった!?!』

「もう逃がしはしないぞ、ゴルドラン!喰らえ!!」

デザートロンの鞭から電流が流れ出し、ゴルドランを苦しめる。

『グオオオ!オオ!オオオ!オオオオオ!』

ピラミッド スミーンクスの間

『いよいよ最後の問題だ。覚悟はよいな?』

「お、おう……」

「これに全てをかけるわよ……」

「うう……親父、俺に力を……」

「はああああ……」

最後の問題を目の前に四人の頭は既にパンクしそうになっていた。『では、最後の問題。私の守っているパワーストーンに封じ込められている勇者の名前は?』

「え!?!」

「マジで!?!」

「ここでそんな分かるわけの無い問題出すかよ!?!普通!」

四人は困った顔をする。

間違えれば待っているのは「死」。

かと言ってこのまま止まっているわけにも行かない。

「どうすればいいのよ……」

一方の外ではゴールドランが弱っていた。

『グウウウ……あ、主たちよ……私の声が聞こえるか?』

ゴールドランはゴールドシーバー等三つのアイテムを通じて鈴たちとコンタクトを取ろうとする。その声はピラミッドの中にある鈴たちに届いた。

『主よ、私の声が聞こえるか?』

「この声は!?!」

「もしかしてゴールドランか!?!」

「でもどこから……」

四人は三つのアイテムから聞こえていることに気がつく。

「これ、通信機能もあったのね。」

「通信機能がある懐中電灯と双眼鏡って……」

『パ、パワーストーンは……まだか?』

「どうしたのよ!?!かなり弱っているようだけど!?!」

「まさか、さっきの連中に襲われたんじゃ……」

「あつちもこつちも大ピンチ……」

「あつ、でも、ゴールドランだったら知っているかも!」

蘭は弾のゴルドスコープを借りる。

「ゴルドラン、私たちが探している勇者の名前を知っている!？」

「知っているなら教えてくれ！」

「出ないと私たちもあなたもここで終わっちゃうわよ!？」

『そ、その名は……ア、アドベンジャー……』

そう言った直後、ゴルドランの通信が途切れてしまう。

「よし！アドベンジャーか。」

「スマーinks、答えが分かったわよ！答えはアドベンジャー！」

鈴は代表して思いつきり答える。

ピンポーン！ピンポーン！ピンポーン！

正解したと同時に崩れ落ちた床がすべて元通りに戻る。

『正解だ。全ての問題を解いたお前たちの知恵と勇気を称してこのパワーストーンを授けよう!』

スマーinksの口が開き、眩い光が四人の元へと向かう。そして目を開いてみると蘭の手にドランの時とは違う色のパワーストーンが握られていた。

「やったぜ！第二のパワーストーンだ！」

「急いで復活させねえと！」

「そうね。蘭、復活の呪文憶えてる。」

「ええ、でもいいんですか？私が復活させても？」

「いいんだよ！お前終盤大活躍だったんだし。」

「じゃあ、行きますね！黄金の力護りし勇者よ、今こそ甦り我が前に現れ出でよ——!!!」

蘭が呪文を唱えた瞬間、パワーストーンは光を発し始める。

ピラミッド 外

『ぐ、ぐう………』

ゴルドランは既に倒れていてもおかしくない状況に置かれていた。「フフフ、そろそろ止めを………何?!」

その直後、ゴルドランの後ろにあったピラミッドのてっぺんが崩れ落ち、中から巨大なSL機関車が飛びながら現れた。

『チーンジッ!』

SLは変形し、ゴルドランとほぼ同じ大きさのロボットへと変形する。

『鋼鉄武装、アドベンジャー!!』

『おおう!アドベンジャー!』

ゴルドランはアドベンジャーの方を見る。

「な、なんと!あの連中がまた勇者を!?!おい!パワーストーン捜索隊、何をしている!?!おい、返答せい!おい!」

ワルターはピラミッドの中に突入した捜索隊に連絡するが全く応答がない。

最も捜索隊はその後、全員気を失った状態で発見されるのだが。

アドベンジャーはゆつくりと着地する。

「うわあ………あれが二番目の勇者か。」

「中々カッコいいじゃんか!」

「既にゴルドランぐらいの大きさがあるのね。」

鈴たち四人はピラミッドの頂上から現れ、その姿を見る。

『主よ、私に命令を！』

「よし、蘭。命令してやれよ。」

弾が蘭を見ながら言う。

「よおし、アドベンジャー！あのロボットをやっつけて！」

蘭はデザートロンに指を指す。

「ギクッ！」

『了解！』

アドベンジャーは巨体にも似合わぬスピードで走り出すと思いきりジャンプをし、キックでゴールドランを拘束していた鞭を切断する。

「のわあぁ〜!？」

混乱したワルターは思いっきり転ぶ。

『すまぬ、アドベンジャー。』

『何のこれしき！』

「おのれ！このデザートロンを舐めるなよ！」

ワルターはデザートロンを攻撃態勢へと移行させる。

「最強パワーの人工砂嵐を受けて見よ———!!!」

デザートロンの胸部から竜巻が起こり、アドベンジャーに向かって放たれる。それに対してアドベンジャーは左手を前に出す。

『フーン！』

「なぬ!？」

砂嵐はアドベンジャーの片手のみで防がれてしまった。更にアドベンジャーは怯む様子もなくデザートロンに向かって歩き始めた。

「そんな！人工砂嵐のパワーに勝るなんて！」

アドベンジャーはそのそと歩いてデザートロンの目の前まで来る。

「そんな！そんな馬鹿な〜!!」

『ウオオオオオオ!!』

アドベンジャーは右腕でデザートロンを思いっきり殴りつける。

デザートロンの人工砂嵐発生器は一瞬にして壊され、デザートロン自体も吹き飛ばされた。

「わあ~~~~!!!!」

デザートロンはかなり後方に飛ばされ倒れる。

『あとは任せたぞ、ゴールドラン!』

『心得た!』

ゴールドランはスーパー龍牙剣を引き抜く。

『スーパー龍牙剣!一刀両断斬り!!』

ゴールドランは砂漠でありながらも高速でデザートロンに向かって行く。

『とう!』

デザートロンは胴体から真つ二つに切断され、大爆発を起こす。そこからワルターの乗る小型脱出機が上空に飛び去って行く。

「おのれ!一度あらず二度までも!憶えておれよ!!」

ワルターが飛び去った後、ゴールドランは剣を鞘へ戻す。

「やったあ!」

「アドベンジャーもすげえな!」

鈴たちはピラミッドの上から降り始める。

下ではゴールドランとアドベンジャーが固い握手をしていた。

デッデッデッデッ、デッデッ、デッデッデッデッ!デー!(ア

帰りの道中

海の真上をSLが走り去って行く。

新たな勇者アドベンジャーには他の勇者を運搬する機能があり、戦闘で疲れたドラゴンも今は中で休んでいる。鈴たち四人は操縦席から外の光景を眺めていた。

「……………なんか、いろいろ大変だったけど楽しかったな。」

「えっ?」

弾の一言に鈴は思わず言う。

「なんて言うか……………小学生のガキの頃に戻ったような気がしてさ。」

「……………確かにね。」

「俺も、いろんな意味で楽しめたかな? まあ、ガキの頃は家に籠りがちで二人のような感じはなかったけど。」

「でも、これからが大変になりますね。なんて言ったらパワーストーン探しもしくちやいけないますから。」

「はあ、店の手伝いでしょうか……………」

弾は頭を抱えながら考える。

「あっ!!」

「ど、どうしたんだよ千秋!？」

「千冬姉が家で寝てたことすっかり忘れてたあ!？」

「何!？」

「そう言えば……確か酔っぱらって寝てたような……」

鈴も思い出したのかのように顔を青くする。

『どうしました?主たち?』

「アドベンジャー!急いで日本に戻ってくれ!早くしねえと千冬姉があぶねえ!」

「最悪な場合酔っぱらって全裸で外に……」

日本 織斑宅

「う、ううん……」

千冬は目を擦りながら目を覚ました。時計を見ると既に夕方の時間帯だ。

「もう、こんな時間か……」

彼女は自分の下半身に触れていた右手を見る。よく見ると自分の

体液でベトベトになっていた。

「……また酔った勢いでやってしまったか……最低な女だな、私は。」

ベッドから起き上がり、下着を探そうとしたが部屋が自分が最後に確認していた姿とは違っていることに気がつく。

「確か缶ゴミの袋があちこちになったような………それに窓を開けて寝ていなかったはずだし………千秋がやってくれたのか？」

更に気がついたことにかつて一夏が使っていた机の上に自分の着替えが丁寧置いてあった。

「千秋にしてはやけに丁寧だな……まるで一夏が畳んかのように綺麗にしてある。」

彼女は服を着ようとしたが一瞬考えなおす。

「……一旦シャワーを浴びるか。」

彼女はタオルを体に巻いて下に降りて行った。

数時間後

「はあ．．．．はあ．．．．」

千秋と鈴は息を荒くしながら家の前にたどり着いた。

「千冬姉．．．．また酔っていななければいいけど．．．．」

千秋は恐る恐る玄関を開ける。

「あれ？俺が出かける前こんなに玄関綺麗だったけ？」

千秋は自分が出かける前に比べて明らかに綺麗になった玄関を見て違和感を感じる。家のリビングでは何かがすすり泣く声が聞こえた。

「あちゃ．．．．千冬姉、また思い出し泣きしてんのかな？」

「まあ、仕方ないんじゃない？」

千秋と鈴はため息をつきながらリビングへと行く。そこには案の定、千冬がいた。

「う、うう．．．．」

「な、なんだこれ？」

千秋はよくわからないという状態だった。

リビングのテーブルに夕食が準備されていたのだ。しかも自分でも鈴が作ったものでもない。ましては千冬では絶対作れそうもない食事だった。千冬は食事を口に運びながら泣いていた。

「ち、千冬姉？」

千秋は泣いている千冬に戸惑いながらも話しかける。

「ち、千秋．．．．」

「ご、ゴメンね。帰ってくるの遅くなっちゃって。もしかしてあれか

な？蓮さんが来て作ってくれたのかな？いや、ほんとその……明日からは俺と鈴で作るから……」

「……」

千冬は無言で千秋に持っていた食器を渡す。程々によく火が通った肉じゃがである。

「うわああ……流石蓮さんの作った料理だな……見た目も十分……」

「……違うんだ。」

「えっ？」

「いいから食べてみてくれ。」

「？」

千秋は不思議そうに肉じゃがを一口、口へと運ぶ。その直後彼の脳裏に電撃が走る。

「こ、これは……」

「どうしたのよ？」

鈴も不思議そうに肉じゃがを摘まむ。

「あつ、おいしいじゃないの！流石蓮……」

「いや……これは蓮さんが作ったものじゃない。」

「えっ？」

鈴は不思議そうに千秋たちの顔を見る。千秋の顔は深刻そのものだった。

「どうしたのよ？」

「この味は……一夏独特の味わいなんだ。」

「へっ!？」

「それにこの部屋の綺麗な有り様……明らかに一夏がいなくなる前の我が家そのものの光景だ。」

「っていう事は……」

「一夏だ！きつと一夏が生きていたんだ!!」

千冬は泣きながら言う。

「でも、生きているんだったらおかしすぎないか？だって、帰ってこないじゃないか？」

千秋は千冬に疑問をぶつける。確かに生きているのなら自分たち

の前にその姿を現すはずだ。

「だがこの味を出せる人間が身近にいるか？」

「うくん、確かに。」

「だったら生きているはずだ！」

「千冬さん、肝心な事忘れてない？第一に一夏がどこに居てどうやって生きて来たのが問題でしょ？生きていたって言うのは信じてもいいかもしれないけど……」

千冬に疑問を投げかけたとき、鈴は思わずダイノガイストの言葉を思い出した。

『………鈴………』

「確かにあの時間違いなく私の名前を呼んでいた。でも、相手は海賊でロボット。それに一夏だったら人を誘拐したりは……」

「とにかくだ！私は一夏が生きていることを信じる！絶対に生きているはずだ！」

「千冬姉もいい加減目を覚ませよ！きつと三年間まともにやらなかったから一夏がやったように見えるんだって！」

「何！私の目を疑っているというのか!?!」

「弟の部屋で全裸で寝ている姉貴に言われたくねえよ！早く再職しろよ！」

「うう……私の私生活にケチをつけるとは。行方が分からなくなつた弟との思い出を地肌で感じることを何が悪い!!」

鈴が考えている中、千秋と千冬は口喧嘩を始めていた。

「………しばらく確証ができるまでは黙っておこう。」

ガイスター基地

「うくん、実に奇妙だね。」

「ああ、実に奇妙だ。」

プテラガイストと束は実験台の上にあるあるものを見て首をかしげていた。

「ここまでバラバラにしたのに自力でくっ付き直すなんて……束さんにとって自己修復機能がないのにここまでやるとなると実に不思議だよ……」

「まさか 트레이ダーが気まぐれに寄越した変な生物にエネルギーボックスを与えてこんなバカでかいハエになるとは予想外だったぜ……」

二人が目の前で見ているあるものそれは……

???

とある国の宮殿

「皇帝陛下、残念ながら二人の勇者を手に入れることはできませんでした。しかし、レジェンドラの石板によって新たな事実が明らかになりました。」

王座の下でワルターは跪きながらカーネルをお供に皇帝なる人物に報告をしていた。

「勇者は死することなし。肉体の滅びし勇者は再びパワーストーンに戻り、復活の呪文によって蘇る。」

「すなわち、彼らを倒せばパワーストーンに戻ることが分かったのです。このワルター・ワルザック、必ずや八つのパワーストーンを集め、レジェンドラに秘められた超パワーを手に入れて見せます。」

「……ワルター。」

「はっ！」

「そなたは確か例の薄汚い海賊と鉢合わせになったと言っておったな？」

「はっ！宇宙海賊ガイスター、そして、その首領ダイノガイストの姿をしかとこの目で見ました！」

皇帝はワルターの方を向かないまま話を続ける。

「……ならば、お前に助っ人を付ける。」

「助っ人ですと？」

「つい先ほど、我が国家の傘下に入った亡国機業からその海賊のことに関して詳しい輩がおつてな。奴らを殲滅するのならば協力させ

てほしいとのことだ。」

「とおっしゃいますと?」

「近いうちにお前の所を訪ねて来る。そのとき詳しく聞くよ。」

「はっ! 必ずやり遂げてで見せます! 皇帝陛下、……いえ、父上。」

ガイスター基地

「なあ、一夏。」

「うん?」

基地に戻って来たダイノガイストと箒はいつものように一緒に風呂に入っていた。

「今更思ったことなんだがあそこまでやらなくてもよかつたんじゃないか?」

「……気まぐれだ。」

「でも、千冬さんって普段あいう寝方していたのか?」

「幼稚園のガキの頃は何故か三人同じ布団で寝かされていたからな。そして、何故か小学生低学年まで俺だけ一緒に寝かされていた。」

「……流石の姉さんもそこまではしなかったな。」

「要はブラコンだったからな。」

「じゃあ、私は……一夏一筋で♡」

「……ふん、今日の夜も長くなりそうだ。」

ダイノガイストは呆れながらも箒を受け入れた。

「次の狙いはパワーストーンだ。ISは……その次だ。」

新しい仲間？

ゴルドラン復活当日

「……………あれは……………」

ゴルドランとダイノガイストが対峙していたとき、少し離れていた場所で彼女たちは見ていた。

「おおよくくロボットだあく〜！」

少女はゴルドランを見ながら言う。しかし、もう一方の少女は別のロボットを見ていた。

「ダイノ……………ガイスト……………」

少女にはその名前がはつきりわかっていた。

「でも、あっちのロボットは……………一体……………」

アドベンチャー復活二日後　とある港のはずれ
「よっ、お待たせ。」

弾が走りながら鈴たちと合流する。

「遅いじゃないの。」

「悪い悪い、なんせ店の手伝いどうやって抜け出すか考えるのに時間がかかってな。友達の家勉強会行くとか何度も通じる方法でもないだろう?」

弾は息を切らせながら言う。後ろからは蘭も慌てて走ってきていた。

「はあ・・・はあ・・・」

「あれ?お前はゆつくり来るんじゃないのか?」

「途中でなんか人に見られているような気がして走ってきたのよ!けど・・・まだなんかついてきていそうで・・・」

蘭は不安そうに言う。

「うーん、誰もいないようだけどな・・・」

「そうかしら?」

「蘭も心配性だな。気にすんなよ、第一あの日のことに関しては誰も憶えていないんだからよ。」

「・・・うん。」

千秋が言うのは最もだった。

実はゴルドランが現れた日、誰も見ていないというのだ。ダイノガイストの姿でさえもだ。

千冬に関しては酔って眠っていた。

蓮と巖に関しては巖が体調を崩して寝ていたため、店は休みにしていたという。

「確かに不思議よね。数馬にも電話で聞いてみたけどテレビで丁度ワールドカップの実況見えていてそれどころじゃなかったって。」

「明らかにドラゴンたちの存在を全く知らないって感じだったよな?」

「でも・・・本当に私たちだけなんでしょうか?」

「まあ、知っているのはあの変な連中(ワルター)とガイスターだけだろう。」

「うーん。」

「まあ、気にしたってしょうがないから行くわよ!」

鈴たちは走って行く。その後ろを二人の人影がコソコソと後をついていつていることも知らずに……。

『新しい仲間？』(鈴の声)

日本　ワルザック共和国　日本大使館

一方、ワルターは表の仕事である在日大使として社交パーティーに参加していた。同時にある人物と接触するために。

「ハツハハハ！では、本国を訪れた際はぜひ……」
「ワルター様。」

来客と会話を楽しんでいたワルターの元へカーネルが何やら話を持ってきたようだ。

「……ちよつと、失礼。」

ワルターは一旦席を外し、個室へと移動する。

「何？あの街の人間どもは誰もゴールドランを目撃していないだど!？」

「はああ……偶々ワールドカップ決勝戦、日本対ブラジルのテレビ中継しておりましたので。」

「ふむ……しかし、あれほどの戦闘をしたにもかかわらず、あのダイノガイストの存在にまで気づかんとは……」

ワルターは不思議そうに言う。

「若君、これはもしやレジエンドラの超パワーの仕業では？」

「ん？どういふことだ、じい?？」

「おそらくレジエンドラの秘密を守るため、人々の注意を逸らすパワーが働いているのです。」

「レジエンドラの力……そこまでの代物だということのか……」

「しかし、ご安心あれ。我々は既に情報を掴んでおります。」

「カーネル様!」

そこへ部下が一人入ってきた。

「何事だ?」

「はっ。只今、ミス・オータムとそのお供がこちらに到着しました。」

「ここへ通せ。」

カーネルの指示で部下は部屋から下がり、ドレス姿のオータムと一人の少女が訪れた。

「ワルター様、皇帝陛下の仰られた協力者のお仲間、ミス・オータム殿とそのお供ミス・エム殿でございます。」

「何?協力者とはこの女子たちだったのか?」

ワルターは意外そうな顔で二人を見る。エムと呼ばれた少女の方は比較的になんか大人しくしていたがオータムに関してはかなり不機嫌そうだった。

「ああ!?女だと何が悪いんだ!?!」

「あつ、これは失敬。いえ、別にあなたを馬鹿にして言っているわけではない。」

ワルターは、気を悪くしたオータムに謝罪する。

「オータム殿はかつて亡国機業のIS特殊部隊を率いていた猛者でございます。」

「おう?爺さん、意外に俺のことに詳しいんだな?」

「全てあなた方の上司スコール殿から教えいただいています。」

「ところでオータム殿。」

「殿は付けなくていい。気安くオータムって呼んでもいいぜ?王子様よ?」

「……そうか、ではオータム、貴殿が我らのパワーストーン探しに協力してくれるというのか?私にはどうも別の目的があるようにも見えないが?」

ワルターは気になったのかオータムに聞く。

「ああ、まあ、俺もスコールもパワー何とかやらレジエンドラとかには

特に興味があるわけじゃないからな。興味があるのは数日前、アンタが確認したって言うコイツだ。」

スコールが一枚の写真を見せる。

ダイノガイストの写真だ。

「ダイノガイスト?」

「ああ、スコールのダチのドライアスが執念深く狙っていてな。この協力を要請していたのも奴の首が欲しいからだ。」

「ほう。」

「なあに、安心しな。スコールからの要請でこちらも協力は惜しまねえ。」

「そうか、その言葉を聞いて安心した。では、改めて協力を求める。」
「任せておきな。」

スコールはワルターから差し伸べられた手を握り、握手を交わす。

「……………」

「……………して、そちらのエム嬢はさつきからあまりにも静かなのだが?」

「まあ、こんな奴だから気にしないでくれ。ところですぐにも出発するんだろ?この服、動きずらくて仕方ねえんだ。更衣室がどこか教えてくれ。何ならここで着替えてもいいいぜ?」

「じよつ、冗談は程々にしてくれ!」

とある港の廃船

「どう？」

鈴は目の前にある廃船を見ながら言う。

「まあ、確かにアドベンジャーの隠し場所にしては丁度いいな。」

千秋は納得しながら言う。実は鈴たちが戻ってきた後、ドラントアドベンジャーをどこに隠すのかでかなり悩んでいた。

特にアドベンジャーに関しては家に置くこともできないため、どこか適当な場所はないかと考えたところこの廃船が丁度いいスペースがあったため、ここにすることにした。

「さて、さっさと中に入ってパワーストーン探しても始めるか。」

弾が言う。四人は廃船の中へ入ろうとする。しかし、蘭がその直後に足を止める。

「ん？どうしたんだ蘭？」

「……やっぱり、誰かに付けられている気がする！」

「えっ!？」

「そこに誰か隠れているんでしょ！出てきなさい！」

蘭は後ろの木に指を指しながら言う。思わず四人は警戒する。

「まさか、この間の奴の仲間か!？」

「それともガイスター!？」

四人は恐る恐る近寄ろうとする。すると何か聞き覚えのある声が聞こえた。

「待つて待つて。私たちは怪しいものじゃないよ。」

「……もしかしてのほんさん?」

千秋は何となく言う。

「ピンポーン。オリムーせいかい。」

すると木の影から少女が二人現れた。

「えっ!?本音と簪じゃない!?なんでここに!?!」

「なんだ鈴?お前たちの知り合いか?」

弾は不思議そうに聞く。

「ああ、弾にはそう言えば紹介していなかったな。え〜つと、俺と同じクラスの布仏本音こと通称のほほんさんと四組の更識簪こと簪だ。」

「はは〜、要はお前のダチってわけか。って言うか二人とも可愛いじゃんか!俺にも紹介しろよ!」

「えつと……この二人に関してはいろいろゴタゴタがあつてな。」

千秋が気まずそうに言う。

簪と千秋、鈴が知り合ったのはIS学園に入学し同じクラスである本音を通じてのことであつた。その頃、IS学園生徒会長であり、彼女の姉である更識楯無は代表を務めているロシアから緊急招集が掛けられ不在だつた。最もその代行として生徒会会計である本音の姉、布仏虚が仕切っていたが。

しかし、その僅か一月、彼女によからぬ事態が起こつた。

楯無はロシアにおいてダイノガイスト率いるガイスターに敗北、専用機を奪われるという失態を被る。

さらに追い打ちを駆けるのかの如く、彼女が密かに送り込んでいた暗部の諜報員が潜伏先であるワルザック共和国で捕まり、国際問題に。

結果、楯無の更識家当主の剥奪と本国からの永久追放、および暗部である更識家とその家に仕えた家も取り潰しとなつた。

幸い、簪は実家と縁を切るという方法で日本代表候補生から外されることはなかったが楯無の行方は未だにわかっていない。

千秋たちもなんとか彼女を励まそうかと考えたが焼け石に水、火に油を注ぐことになりかねないため落ち着くまで距離を置くことにした。

「え、えツと……どこから言えばいいのか……」

千秋は気まずそうに簪の顔を見る。簪はしばらく黙っていたが千

秋たちから話をしそうにもないと判断し自分から話すことにする。

「千秋たちはここで何をしているの?」

「な、何言ってるの?別にそんな怪しいことは……」

「あのロボットがここに隠れているの?あの金色の恐竜みたいなものと合体した……」

「「!?!」」

四人は簪の言葉に驚く。

「ロ、ロボットだって?冗談だろ!」

「ああ!それに金色の恐竜なんているわけないじゃねえか!?なあ、蘭?」

「そ、そうよ!いるわけないですよ。」

「……」

簪は手提げ鞆から何枚かの写真を見せる。

その写真にはゴルドランとダイノガイストの姿が写っており、鈴たちがいるところも写っていた。

「「……」」

「ねえ、千秋たちはあのロボットたちとどういう関係なの?」

簪は真剣な顔で四人に聞く。

四人はこれ以上秘密にできないと判断し、仕方なくドラランたちに会わせることにした。

ガイスター基地

『ふむ……鈴たちは第二のパワーストーンを手に入れたか。』
ダイノガイストは椅子に座りながらいつ盗撮したのかアドベンジャーとゴルドランの映像を見ていた。

「と言う事はパワーストーンは残り六つ。このままでは奴らに全て揃えられてしまうぞ？一夏。」

箒が寄り添いながら言う。だが、ダイノガイストの態度は余裕そうだった。

『心配いらん、奴らとてパワーストーンを全てそう易々と発見はできん。ここはうまく泳がせて最後の一つを揃えたところで全ての勇者を葬り、頂けばいいだけのことだ。』

「……でも、あの連中はどうするんだ？」

『鈴たちに関しては日本へ送り返す。それ以外はどうかろうが知ったことではない。』

ダイノガイストは箒を抱きかかえると彼女の顔を見る。

『最も、待ってられないというのなら出てもいいがな。』

廃船

ドラゴンとアドベンジャーに元に連れてこられた簪と本音はドラゴンから残りの勇者が封印されているパワーストーンが存在とレジェンドラのことについての説明を聞いていた。本音は「ほうほう」と聞いているのか微妙に分からなかったが簪は黙って話を聞いていた。「……と言う事はあなたたちはガイスターとは何の関係もないですか？」

『ああ、我々も復活したばかりで初めて彼らの存在を知った。』

「そうですか……」

「簪……お前、まさか……」

千秋は何かを察したかのように簪を見る。

「まさか、生徒会長の仇でも取ろうって言うの!?!いくら何でも無茶過ぎよ!?!アイツ等、ガチで強いだよ!?!」

鈴は忠告するかのよう言う。

「それに夏休み前に千冬さんの教え子だったえつと……ラウラだっけ?あの子ども部隊が全滅した責任を感じて帰ったら……」

鈴は言いかけるが慌てて口を閉じた。

実は、ISが原因で行方が分からなくなったのは楯無だけではない。

千秋のクラスにいたドイツから千冬のかつての教え子ラウラ・ボー

デヴィツヒもその被害者である。

彼女の場合は、専用機は彼女と共に運び込まれて強奪は免れたが彼女が祖国を離れている間、ガイスターがドイツを襲撃、ほとんどのISを奪っていった。

彼女が日本へ来たのは師である千冬に助けを求めてだった。千冬が協力してくればガイスターでも対応できるはず、それが彼女の判断だった。

しかし、それが仇となり、部隊は壊滅。ラウラはそれに責任を感じ祖国へ戻り、部隊の再編成を行おうとしたが帰国直後に軍に拘束され、軍法会議にかけられて部隊壊滅の責任と無実の罪を着せられ、刑務所に投獄された。

その後、それを知った千冬は自分の無能さと痛覚し、IS学園を退職した。本人に責任はないものの千秋たちには衝撃的だった。故に学園内ではラウラのことは行方が分からなくなった楯無の話ぐらい話すことがタブーと化している。

「ち、違うの!? そういう意味で着いてきたんじゃないの!?!」

簪は何か誤解されていると感じて慌てて否定する。四人はきよとんとした顔で二人を見る。

「その……私も一緒に行きたいの。えっとそのパワー……ストーン探しに。」

簪は顔を赤くしながら言う。

「た、確かにお姉ちゃんを追放した原因を作ったダイノガイストは憎いけど……世界各国のIS精鋭部隊を蹴散らす相手になんて私がやっても勝てるわけない……でも……でも、ドランとアドベンチャーが言っていた八人の勇者八人の勇者を揃えることができれば……一泡吹かせられるんじゃないかなって……」

「かんちゃん、正直に言おうよ。本当は一緒に冒険してみたいと思っただけでしょ?」

脇から言う本音に簪は何も言えなくなってしまう。

「えっ!? 仇討ちが目的じゃないの!?!」

鈴は意外そうな顔で言う。

「かんちゃんはね〜こう見えても冒険ものとか大好きなんだよ。小学生の時なんか『十五少年漂流記』とか『エイリアン』とか……」
「待て待て、『エイリアン』は冒険ものじゃなくてSFホラーかアクションだろ。」

本音に千秋がツツコミをいれる一方簪は特に否定はしなかった。

「その……いつも家の中にかいたことがなかったから……」
「な、ならいいんじゃないか？仲間が多いと楽しさも増えるし。」

弾は匿るように言う。

「でも、相手はあのガイスターと訳わからない連中よ？」

「代わりに二人の専用機のプロテクト解くから。」

「……えっ？できるの!？」

鈴は驚いた顔をするが簪は首を縦に振る。

「お姉ちゃんの部屋片付けていたらいろいろ手引書（自作）が出てきて読んでいたから……」

その後、五人は目印に似た島に行き、ワルターたちと交戦するのだが残念ながらパワーストーンは手に入らなかった。でも、簪と本音は大満足のようで本音は「今度お姉ちゃんも連れて来るね〜。」と言った。

一方、その間の織斑宅では

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

千冬は、力が抜けたような顔で目の前にある大量の書類を見る。
『不採用』

「何故だあ!?何故採用されない!?私に何が問題があるというのだ!?!」

千冬は床を叩きながら言う。千秋の一言で再職する気になった千冬は、あちこちの会社の採用試験を受けに行ったのだがどこも不採用に通知しか来なかった。千冬は兎に角あちこちに就職活動をしに行き、なんとA V関係のいろいろ不味い仕事にまで手を伸ばした。

なのにも関わらず『不採用』。

おそらく、どの会社も千冬を雇ってガイスターが襲ってくるのではと考えているのではないだろうか?

ISによつて有名になった千冬にとつて最大の落とし穴になった。

「ううう!!このままでは私はただニートになってしまう!ああく!!一夏く!助けてくれく!私に仕事をくれく!」

千冬は誰もいないことをいいことに泣き出す。

その光景をコウモリを通じて実の弟に見られているとも知らず。

ワルターの先回り作戦

廃船 アドベンジャーの中

「つて、俺はここだと思っただよ。」

千秋は、アドベンジャーがパネルに写している世界地図のアフリカ大陸の一角を指す。

「えっと……あそこは確かサボンナ王国だっけ？」

「ああ、ネットで漁ってみたんだけどその昔、この国の国王が遺跡から掌サイズの宝石を見つけたって話があったんだ。」

『それがパワーストーンだと言うのか?』

後ろでビークルモードで待機しているドラランが聞く。

「でもよ、これとこの間出たキーワードはどういう繋がりがあるんだよ?」

「ああ、それはだな……」

「オリム〜!来たよ。」

そこへ本音たちの声が聞こえてきた。

「おうおう、丁度メンバーも揃ったことだし今回こそはパワーストンを……おお!」

簪たちをお出迎えしようとした弾の言葉が途切れる。千秋たちはどうしたのかと行ってみると本音の姉でありIS学園現生徒会長代理である布仏虚が簪たちと一緒に来ていた。

「ふ、布仏先輩!」

「いつも本音がお世話になってます。急に押しかけてごめんなさいね。」

「お、おお……」

「お兄い……ああ、ダメだこりゃ。あの人に惚れちゃったみたい。」
弾の様子を見て蘭は呆れながら言う。鈴もその様子を見て納得する。

その後、ある程度自己紹介と説明を終え、アドベンジャーにサボンナ王国に行くよう命じた。

??? 上空 ザゾリガン

一方、ザゾリガンではアドベンジャーの動きを捉えていた。

「アドベンジャーの動きを確認しました。」

「うむ、進行方向から奴らの目的地を割り出すのだ。」

「はっ。」

部下はパネル操作で計算を始める。

「この進路から考えるとサボンナ王国だと思われます。」

「ご苦労、今回は先回りして先手必勝だ。」

ワルターはそう言うのとカーネルと共に格納庫へと向かう。格納庫には自分の専用機を調整しているオータムとエム、そして、その後ろには戦闘機の翼を持った新型ロボットが立っていた。

「これが新兵器開発局から届きました新型ロボット兵器ソニックルです。」

カーネルは目の前に立っているソニックルについて説明を始める。「背中の羽が活かす、ソニックルは飛行能力を持ち、両肩から繰り出すデンジヤラスボムはあらゆるものを焼き尽くします。これで飛べないゴルドランは鉄板に焼かれた焼き物同然。」

「解説ご苦労。しかし、先手必勝作戦が成功すれば今回はメカの出番はないかもしれないな。……ん？」

そのときワルターは、ソニックルの足元に何やらプレゼントのようなものを見る。

「あれは何だ？」

「パワーストーンと取り換えるためのアイテムでございます。」

「なるほど、give and takeというヤツか。」

「はい、この贈り物をご覧になればサボンナ国王も納得のはず。」

「ちつ、こつちの出番はナシってわけか。まあ、この間の島での戦闘のせいでアラクネの調子もイマイチだからしょうがねえか。」

オータムは残念そうに言う。それに対してもエムは黙ったまま自機を整備していた。

「ワルター様、間もなくサボンナ王国です。」

「うむ。」

ガイスター基地

『この航路からすると鈴たちはサボンナ王国を目指しているという事か。』

ダイノガイストは、マップの反応を見ながら言う。

『ダイノガイスト様、今回は俺に行かせてください。』

先にホーンガイストが名乗り出る。

『馬鹿言うんじゃない。てめえはこの間島でただ氷の塊を拾ってきただけだろ。』

『なんだと!?!』

『ボス、今回は俺とサンダーで行きます。』

『んが?』

『プテラ、てめえ!!』

『今回の居場所もこの間の島同様エネルギーボックスが非常に使いつらい環境です。ゴルドランとの戦闘を考えればプテダーに合体して対応も……』

『ふざけるんじゃない!こっちだってホーマーになれば!』

『お前みたいな脳足りんを二度も出せるか。』

『言わせておけば!』

ホーンガイストとプテラガイストはいがみ合う。

『お前たち、いい加減そのくらいにしろ!』

ダイノガイストの肩に座っている箒が二人に向かって言う。

『で、でもよ、奥方!』

『今回の場所はジャングルだ。それにゴルドランたちは飛べないから奪ったら飛行できるプテラがパワーストーンを運ぶことができる。地中に潜ったら何されるかわからないだろ?』

『うう……』

『それにお前はこの間失敗したのは事実なんだ。どうしても言うのなら今回のプテラのお手並みを拝見してからでも遅くはないぞ?』

『そういう訳だ。わかったか?』

『くそ……』

ホーンガイストは悔しがる。

『なーなー。』

『なんだ?』

『すぐ行くのか?』

『当たり前だろ。』

『プリ○ユア見てから行こ。』

『馬鹿！お前は女の子じゃねえだろうが!!』

『俺はバカじゃねえ!!プリ○ユアのどこ悪い!!』

馬鹿と言われてサンダーガイストは大暴れをし始める。

『うわああ!!サンダーの奴が暴れだしたぞ!』

『お、おい!こつちに来るんじゃねえ!!』

『ムガアアア!!』

『『うわあああああ!!』』

暴れまわるサンダーガイストに三人は逃げ回る。

『………そこまで見たいのなら録画をすればいいではないか。』

ダイノガイストは呆れながらその様子を見ていた。

サボンナ王国 サボンナ王の宮殿

鈴たちよりも一足早くサボンナ王国に到着したワルターは、カーネル、オータム、エムの三人を連れてサボンナ王の宮殿を訪問していた。しかし、風習なのか歓迎の踊りが行われ、ワルターたちは早くパワー

ストーンを手に入れたという気持ちを押さえながら見ていた。

「ふわああくいつまで続くのだ、この歓迎の踊りは？こうしている間に小娘共が来てしまうぞ。」

「若君、ここはもう少しご辛抱を……」

「うう……俺は足が痺れてきた……」

「……(我慢)」

そして、踊りは終わり、踊っていた女性の中に紛れ込んでいたサボンナ王がお面を外してご一行に挨拶する。

「ふう……ようこそ、我が国へ。歓迎の踊りはどうだったかな？」

「「ゲツ!」」

まさか王自身が踊っていたとは知らずエムを除く三人は動揺しながらも拍手する。

「そうか、そうじゃろ、そうじゃろ!まつ、アンタらが何しに来たのか大体わかる。」

サボンナ王は指を鳴らすと踊り娘の一人に箱を持ってこさせる。ふたを開けるとそこには大きめの宝石が入っている。サボンナ王は宝石を取り出し、ワルターたちに見せる。

「パワーストーン!」

ワルターは席を立ちあがる。

「流石は国王様だけのことはあって話が早い。もちろんタダとは言いません。それ相応のお礼を……例の物を!」

ワルターが命じると待機していた部下たちがカーテンで隠してある贈り物を運んでくる。

「オープン・ザ・カーテン。」

カーテンを開くとそこには綺麗な額縁で飾られた絵があった。

「素晴らしい!」

「この絵の価値が分かるとは流石は国王様。」

サボンナ王は絵へと近づいてみる。

「うん、うくん、なんと素晴らしい額縁だ!」

「「あり!」」

「おいおい、絵じゃなくて額縁かよ．．．．．」
「．．．．．」

国王の意外な反応に四人は滑る。

「契約成立！ああ、サボンナ！サボンナ！」

何はともあれ国王はご機嫌だった。

「．．．．．なんだかよくわからないが」

「うまく行ったようすな。」

「じゃ、じゃあ、そいつをもらって早く帰ろ．．．．」

「よおし！その前に感謝の踊りと行こうじゃないか〜！」

「えっ？」

そう言うと国王の周りを踊り子が踊り始め、国王は踊りだす。

「さあ〜あなた方もご一緒に〜」

「は、はあ．．．．．」

ワルターたちは仕方なく一緒に踊る羽目になった。

鈴たちはワルターたちがすでにサボンナ王国に入っていることを知らず、ひっそりと上陸した。彼女たちが外に出るとコウモリが飛んできたため鈴は驚いた。

「もう！洞窟ってどうしてあんなものがウジャウジャいるのよ！」

「しようがねえだろ。夜行性なんだから。」

「それにしてもよ……もっとすんなりって言うかサボンナ王国に入る方法ってなかったのか？」

「お兄い、何言ってるの！ドランとアドベンジャーじゃどう見ても目立っちゃうでしょ！」

『す、すみません……』

四人の反応にドランとアドベンジャーは申し訳なきように言う。

「簪、私たちの専用機のプロテクトの解除はあとのくらいかかるの？」

「後、もう少しかな？何しろ解除してもすぐに新しくロックがかかるもんだから処理するのが大変なの。」

「元お嬢様の残した解除方法でも限度があるからね。」

「妹様、何なら私が……」

「虚、もうその呼び方はいいから。」

「す、すみません……」

「こっちは私で何とかするから虚は気分転換に外に出て見たら？」

「では、お言葉に甘えて。」

鈴たちは、アドベンジャーとドランを簪に任せ（本音は「お姉ちゃんのご自由にく。」と言いながら一緒に残った）、洞窟からサボンナ王国の街へと目指して行った。

最も先頭は鈴ではなく、弾と虚で両者ともになんか恥ずかしそうに顔を赤くしていた。

「……千秋。」

「あん？」

「あの二人……どう思う？」

「完全に両思いだな。初めて会って数時間しかたっていないのに。」

「弾がリア充化……明日は雪でも降るのかしら？」

ガイスター基地 束のラボ

……ここは、どこなのだろうか？
見知らぬ天井が私の目に映った。

私は、確かシベリアの監獄から脱走して……力尽きて……
凍死したはず……

「やあ、目がお覚めたようだね。」
？

私の視界にある人物の顔が映った。
あの人は……もしかして篠ノ之束？でも確か行方不明のは

ずじゃ……

「シベリアで凍りかけていたところをいつくんが拾って来て集中治療してみたけど思っていたよりも意識はしっかりしているようだね。」
いつくん？

部屋に誰かが入ってくる。

「あつ、いつくん。」

『あのくたばり損ないは、息を吹き返したか？』

ダ、ダイノガイスト!? って言うか小っちゃくなってる!?

どうして、ここに!? それも篠ノ之束と一緒に!? まさか、二人はグルだったって言うの!?

私はアンタのせいだ!!

……あれ? 手足が動かない? と言うよりは感覚がない。

『無理に動かそうとするな、死ぬぞ。俺が拾って基地に持って帰って来た時は手足は子連れクマが子供の餌にしていたからな。』

クマの餌!? どういう事よ!?

『束、コイツに今の姿を見せてやれ。』

「え〜! なんか束さんは引くなく。」

『どの道コイツはもう帰る場所がない。それに殺すには惜しいぐらいだからな。』

「物好きだね〜いつくんは。お主も悪よの〜って。箒ちゃんに何言われても知らないよ〜?」

『……いや、もう聞いている。』

「ほへ?」

何アイツ後姿をこっちに見せているのよ……って、あれはまさか二年前に誘拐された篠ノ之箒!? どうなってんのよ!?

「あれまつ、箒ちゃん。何やってんの?」

「交尾♡」

「いやいや、背中にしよってやるのは虫だし、逆だよ。」

訳わかんないわ……、何なの? この連中?

サボンナ王国 サボンナ王の宮殿

鈴たちがサボンナ王国に上陸して少し経った頃、ワルターたちはようやく感謝の踊りを終えたところだった。

「か・い・か・ん！」

「私も歳を忘れてハッスルしてしまいました。」

「ああ………なんか癒えた………」

「………（意外に気持ちよかつたらしい）」

「いやあ、それはよかつた。………おっと！そうじゃった！」

サボンナ王は、パワーストーンをワルターへと差し出す。

「おお！そうだった！すっかり忘れていた。それでは………」

ワルターはサボンナ王からパワーストーンを受け取ろうとする。

「コケコオ——ケツコツ!!」

しかし、その直前、宮殿で放し飼いでいたオウムがサボンナ王の手からパワーストーンを奪って飛び去って行った。

「ああ!!」

「パワーストーンが!？」

ワルターたちは慌ててオウムの後を追う。

「待て——!!この泥棒め——!!」

「くそ！今回は楽だと思ったのによ！」

「……お約束。」

「あっ、コイツ、もう終わりなのに初めて話しやがった。」

「三」待て

!!!
「三」

ワルターたち四人はオウムを追ってジャングルの中へと入って行く。

争奪！ライオンを追え！

サボンナ王国 ジャングル

鈴たち四人は洞窟からジャングルに出た後、街を目指して歩いていた。

「……ねえ、千秋。」

「なんだよ？まだ、あの二人のことが気になるのか？」

千秋は前を歩いている弾と虚を指しながら言う。ちなみに蘭は途中で「空気ぶち壊すの良くないから」と言って引き返してしまっ

た。
「いや、なんて言うか……なんか誰かに見られているような気がしない？」

「まあ、ジャングルなんだし蛇とか虎でも見てんじゃないのか？」

「馬鹿、虎はこんなジャングルにはいないわよ！……でも、蛇だったらありかも……」

「「待~~~~て~~~~!!」」

そのとき四人の目と鼻の先から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「誰かこっちに向かって来ているようですが？」

虚は不思議そうに言う。

「この声ってまさか……」

弾は足を止めて前を見る。

少し経つとワルターがオウムを追ってこちらに向かって来ていた。

「ゲツ、悪太じゃない！」

鈴はワルターを見ながら言う。

何故悪太と呼ばれているのかという本人が途中まで名乗っていた時、カーネルに止められて「ワルター」で終わってしまったからだ。そのため、鈴たちは彼のことを「悪太」と呼んでいる。

「あれは小娘たち!!」

一方、目の前を飛んでいたオウムは何かを見て怯えたのかパワーストーンを落としてどことなく飛んで行ってしまった。

「あれはパワーストーン!？」

「くそ！またしても奪われてなるものか!!」

ワルターは足を速める。

「うおおおおお!!」

鈴と千秋を取られまいと走って行く。

グオオオオオ!!

しかし、茂みから飛び出した物に一同は足を止める。

「ゲツ!？」

弾は思わず虚の手を掴んで茂みに隠れる。鈴と千秋も慌てて続く。ワルターも同様だった。

「グルウウウウウ……」

目の前に現れたのはライオンだった。

ライオンは自分の足元に落ちたパワーストーンを鼻でかき始める。

「こ、こら！返しなさい!？」

ワルターは怯えながらも木の陰からライオンに言う。せつかく交渉までして手に入れたパワーストーンを食べられてしまったのでは元も子もない。

「や、やつ、にやメロン!?そんなもの食ったら腹壊すぞ!？」

弾はどこかの某ヘタレ王子みたいな言い方をする。しかし、ライオンはそんな一行を無視してパワーストーンを口に入れると茂みの中へと去って行ってしまった。

「二二「あああああ!？」」「二二」

ライオンが去って行くと千秋たちは啞然としながら茂みから出てくる。

「わ、悪太！悪いけどパワーストーンは俺たちがいただくぜ!」

千秋たちは急いでライオンの後を追っていく。ワルターはそれを見届けるとやっこのことで追ってきたカーネルたちが来た。どうやら状況は把握しているようだ。

「はあ．．．はあ．．．．若君、いいのですか？」

「まあ、よい。どちらが先にライオンを捕まえるのか．．．．小娘たちのお手並み拝見と．．．．．」

「そんなの生温い。」

「ん？」

ワルターはエムの意外な発言に思わず声が出た。

「お、おい、エム．．．．．」

「こんなジャングルの中じゃあのライオンに遭遇できる可能性は低い。ならもつと手っ取り早い方法でやった方が楽だ。」

「と言うと？」

「ジャングルごと燃やしてしまえばいい。邪魔者の織斑千秋も殺せるし、ライオンも焼け死んで、焼け跡にはパワーストーンだけが残る。

「一石二鳥、汚物は消毒。」

「．．．．．」

エムの発言に三人は何とも言えない状態だった。

サボンナ王国 ジャングル

『やれやれ、どうやらパワーストーンは一筋縄じゃ見つかりそうもねえな……』

ダイノガイストの命令でサボンナ王国に到着していたプテラガイストだったが束の開發したパワーストーン探知機を確認してみるとどうやらパワーストーンは何やらの生物の体内にあるようで移動している。

『おい、サンダー。てめえは地上を血眼になって探せ。反応が近ければ近くにいますよ。』

「……」

『おい！俺の声が聞こえてんのか！』

「……」

『あの野郎……プ○キュア見せなかったことを根に持って連絡しやがらねえ……しょうがねえ、俺だけで探すか……』

プテラガイストは上空を反転しながら搜索を続行する。

その頃、鈴たち四人はライオンを捕獲するためのわなを仕掛けていた。

鈴と千秋は地面にライオンが落ちて中々態勢が整え直せないぐらの深さに穴を掘り、それに現地で調達した木の枝や蔓を弾が固定させてそこへ草を被せてカモフラージュさせる。

「落とし穴はこれで良しと。」

「思い出すわね……そう言えば小学生の時、千秋を落とそうとして一夏と弾の三人で落とし穴を設置したら落ちたのが千秋じゃなくて千冬さんだったって言う……」

「う、うん……いま思い出しただけでもゾツとするぜ……その後、落ちた千冬さんが自分の血を見て殺人マシンと化したスキンヘッドのハート様みたいに俺たちを追いかけて来たことを……」
「……なんかまた落ちるのが千冬さんに感じちゃって怖くなるわ……って言うかハート様というよりも高速で移動して来る女性型フワツティーよ。」

「こっちの罠の設置も終わりましたよ。」

三人が会話をしている中、虚は第二の罨を仕掛け終えていた。気をうまく利用した投石の仕掛けである。

「うわあ………初めてにしては随分上手にできましたね……」
弾は感心しながら言う。

「……暗部でサバイバルとかに関することも少しはやっていたものですから。」

「いやいや、それでも十分ですよー」

恥ずかしそうに言う虚に弾はかなり褒めていた。

「………ちっ、リア充め。そのままうっかりキスでもしちやえばいいのに………」

鈴は少し面白くなさそうに言った。

「そんなことを言うなよ鈴。」

「フーンだ！わかってるわよ！まったく弾ったら、布仏先輩にあんなにデレデレしちゃってさ！大体弾にはきつと合わないわよ！だって弾ってああ見えて女ならだれにでも弱そうだし!!」

鈴は弾の文句を言い始める。しばらく愚痴は続いていたが鈴が気がついたとき他の三人は何を恐れているのか一目散に逃げ始めた。

「あら？私の声そんなに怖かったかし………ら？」

後ろを振り向く鈴。そこにはダイノモードのサンダーガイストが。何やら彼女を見ていたらしい。

「あ、ああ………」

『………お前、お○ヤ魔女とプ○キュア、セー○ームーン、どっち派？俺、プ○キュア。』

「きゃああああああああああああ!!」

鈴は高速で逃げていく。

『あつ、待て！質問答えろ！ついでにカレーはソースとマヨネーズどっち？』

サンダーガイストはノソノソと追いかけて行く。

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿!!どうして後ろにいるってわかっているならさっさと教えなかったのよ!!」

鈴は驚くべき速さで千秋たちに追いつく。

「俺が言っても話をやめなかつたお前が悪いだろ！」

「何言ってるのよ！アンタみたいな奴のところに来る嫁なんて私ぐらいしくないんだから未来の嫁を助けると思ってお姫様抱っこして運びなさいよ！」

「やめろ！こんなところで恥ずかしいことを言うな！」

四人は急いで偶然見つけた洞窟へと逃げ込む。

『どこだ、どこだ？どこ行つた？』

サンダーガイストは洞窟には目もくれず何処かへと去つて行つた。

「ハア！ハア！……し、死ぬかと思つた……」

「アイツら……テレビ見てるんだな……」

「布仏さん、怪我はないですか!?!」

「あ……はい、大丈夫です。」

四人が互いの無事を確認した直後、洞窟の奥から何やらの唸り声が聞こえる。

「ラ、ライオンかしら……?」

「いや、ライオンは普通洞窟に住むとは思えない……」

「どこかで聞き覚えのあるような……」

「少なくとも犬や猫ではありませんね。」

四人は後ろを振り向く。そこには無数の光る眼、さらにそこから出てくると体表がまだら模様の獣が……

「豹だ〜!!」

四人は一斉に洞窟の外へと逃げ出す。豹たちはその後を追いかける。

「ダメだ！流石にこのままだと追いつかれる！」

「見て！丁度いいところに隠れられるようなものがあるわ！」

四人は丁度ポットのような植物に飛び込み、豹たちは最初は吠えたものの諦めて引き返して行つた。

「助かった……」

「あの……みなさん……」

「はい？どうしました布仏先輩？」

「何と言えればいいのか……これ、ウツボカズラではないんですか？」

「「えっ!?!」」

三人は下を見下ろす。下から何やら液体のようなものが出始め、液に触れた三人足の先端はシユウウと音が出る。足を上げると三人の靴は見事に溶けていた。

「やばっ!このままだと俺たち三人……」

千秋たちの脳裏に四人揃って遺影を飾られて葬式が行われている光景が映る。

「ヤダヤダく!まだ私は死にたくないわよく!」

「俺だってまだ死にたくねえく!」

「二人とも落ち着け!こういう時は四人で一斉に揺らして茎を切っちゃまえばいいんだ!」

千秋が混乱する鈴と弾に言う。

「確かに……ISも持たない私たちではそれが唯一助かる方法ですね。」

「布仏先輩、一人だけ冷静に何言ってるんですか!」

四人は一斉にウツボカズラを揺らす。

「一二一、二!一、二!一、二!!」

しかし、ウツボカズラは中々切れず、反転したりと逆に四人を酔わせる。

「うう……気持ち悪くなってきた……」

「がんばれ!ここで死んだら元も子もねえぞ!」

「もう少しで切れます、皆さん踏ん張って!」

四人がさらに激しく揺らすと茎はようやく切断され、ウツボカズラは勢いよく飛んで行った。ウツボカズラが着地すると四人は一斉に外に放り出される。

「た、助かった……」

鈴は自分の体が無事かどうか確認しながら言う。

「あっ。」

「どうしたんだよ弾?」

「今頃気づいたんだけど、ヒョウ、ウツボカズラってなんかしりとりになってね?」

「まあ……言われてみれば。」

「じゃあ、何よ!今度はライオンでも出るって言うの!」

鈴が言った直後近くの茂みからライオンが出て来た。

「あつ……」

鈴は思わず倒れる。

「何やってんだよ!」

「何って……死んだふりよ。」

「凰さん、それはクマでやることですよ(最もクマでやっても死ぬと思えますが……)。」

四人は再び走って逃げる。しかし、ライオンが早いことと連続で走り続けていたこともあり、どんどん距離が追い詰められていく。

「……こうなったら。」

虚は足を止めてライオンの方に向き直る。

「布仏先輩!」

「逃げてください!死にますよ!」

千秋たちも足を止めて言うが虚は逃げる様子はなくライオンと対峙する。

「大丈夫……実家の犬とかでも訓練でやっているし……きつとうまく行くはず……」

そんな虚に対してライオンは吠える。よく見ると口の中にはパワーストーンが入っていた。

「うわああ……よりによってさっきのライオンかよ。」

虚は口笛を吹きながら人差し指を指し、ライオンに近づいていく。

「あれは確か野生動物とかを落ち着かせて、手懐けるためのやつだ。」
「どんな奴よ。」

「口笛を吹きながら指を相手の前に出して相手の鼻にゆっくりと置く」と安心して敵意を感じなくなるというが……」

「千秋、アンタ何石なんて集めているのよ。」

鈴は、千秋が説明しながら石をかき集めているのを呆れながら言

う。説明が終わる頃に虚の指は、ライオンの鼻の上にあった。
「マジで！本当に襲われて……」

グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「きゃあ!？」

落ち着いたかと思ったライオンは吠えて虚は思わず逃げる。

「布仏先輩！危ないから気をつけて！」

千秋たちは石を投げてライオンに攻撃する。幸い虚には当たってはいないがライオンは物ともせず迫ってくる。

「さあ、急いで！」

疲れている虚の手を弾が引っ張りながら四人はまたもや逃げている。
く。

「犬ではうまく行ったんですけどね……」

「それって、飼いだからじゃないんですか？」

「まあ、練習だったので。」

「ダメじゃん!!」

「衛星が例のライオンをキャッチしました。」

一方、ワルターたちはエムの過激すぎる意見を跳ね除け、ライオンを捕獲するという案で事を進めていた。

「よし！追いかけるぞ！」

ワルターたちは猟銃を持ってジープを進める。

「こんなのよりも焼いた方が早いのに……」

「お前な、流石にそれはやり過ぎだってんの。それだとスコールに怒られるのは俺なんだぞ。」

「今頃、織斑千秋たちもライオンの腹の中、できるならこの手で仕留めたかった。」

エムはそう言いながらもジープは目的地に向けて進んでいた。

「ハア！ハア！」

千秋たちは必死にライオンから逃げていた。

「しめた！さっき罠を設置した場所だ！あそこでうまく嵌めよう！」

千秋たちは落とし穴にはまらないように通り抜けるとライオンを待ち構える。

「はあぁーい！捕まえたければこっちまでおいでー！」

鈴は挑発するように尻をペンペンする。しかし、野生の感というも

のなのかライオンは落とし穴を飛び越えてしまった。

「う、嘘……」

四人は思わず震える。ライオンは余程空腹になったのか今にも千秋たちに襲う気満々のようだ。

ところがライオンが襲おうとした直後、背後から銃声が鳴った。

「あっ！悪太！」

よく見るとワルターたちがジープに乗りながら現れた。

「……ちっ。織斑千秋、まだ生きていたのか。」

「死にたくなければそのライオンを渡すのだ。」

ワルターは銃をライオンに向ける。

「ライオンの密猟はいけません！」

そこへライオンを庇うように虚は立ちはだかる。

「ん？」

「そ、そうだ！い、いくらライオンがパワーストーン食ったからって殺すことはないだろ！なっ、千秋も鈴も同じ……」

「あっ、よかつたらどうぞ。」

「わ、私たちの手には負えないんで……お好きにどうぞ。悪太様様。」

「てめえら!!」

お手上げと判断して諦めている二人に対して弾は呆れる。

「ゲーム終了だ。今回は私の勝ちのようだな。二人のように利口になつた方が良いぞ？」

ワルターはそう言いながら落とし穴がある方へと歩いて行く。

「ハッハハハハ……あぁ〜!!」

ワルターは落とし穴に落ちる。

「若君！」

心配してジープから降りようとしたカーネルたちに向かって岩が飛んでくる。虚が仕掛けた罠だ。

「あいた!?!」

「痛てえ！」

「弾、布仏先輩、一旦逃げるぞ！」

千秋に言われて弾は虚の手を引つ張ってその場から逃げる。それを追うようにライオンも逃げて行った。

「若君、大丈夫で……あらくらく!?」

カーネルが落とし穴の中を除こうとしたら何やら巨大なものが落とし穴から出て来た。

『ペツ、まずい!』

落とし穴から首を出してきたサンダーガイストは口にはさんでいたワルターを吐き捨てる。ワルターは、一旦ジープの方へと駆けると一目散に逃げて行った。

「くそ〜! ガイスターまで来ていたとは! こうなったら森ごと焼き払ってライオンも小娘共ごと焼き殺してくれる!!」

「初めからそうした方が早かったのに……」

「エム、お前いい加減にその過激な作戦言うのやめろ。」

「分かりました。ソニックルの準備をさせます。」

カーネルは懐にしまっていたリモコンのスイッチを押す。

鈴たちはライオンに追われる中考える。

「どうするっ！」

「とりあえずドラんたちに相談した方がいいかも。簪にもプロテクト解除しているだろうし……」

鈴はそう言うのとゴールドシーバーを使おうとする。

「ちよつと待ってください。」

虚が止める。よく見るとジャングルの様子が何か少し変だった。

鳥の群れが突然飛び立ち始め、ライオンも突然自分たちのことを忘れたのか辺りを見回しながら吠え始める。更に爆発音まで聞こえ始めた。

「これってもしかして！」

「悪太の奴、この森ごと焼き払うつもりだ！」

「早くしないと森が！」

「ドラん、急いで来て！アドベンジャーも！」

手足を失った楯無は、ガイスター基地の一部屋に寝かされていた。元々のあつたところには点滴が刺さっていて、起き上がることもできず楯無は呆然と天井を眺めていた。そこへ両足で盆を持ったコウモリが飛んできた。

『キキ——！』

コウモリは、盆を置くとレバーを引いて楯無を起こす。

「……………」

『小娘！ダイノガイスト様からの命令だ！今日も食事をちゃんと食べるように！吐き出んじやねえぞ！』

コウモリはそう言うのと足でスプーンを使って食事を楯無の口へと運ぶ。楯無は別の拒否することなく口を開けて食事をする。

今日の献立はシーフードシチューとコッペパン、フルーツヨーグルト、豚肉のソテー、おまけにバナナだった。

「……………どうして。」

『ああ!?!』

「どうして私なんか助けたのよ?」

楯無は食事を自分の口に運ぶコウモリに向かって言う。

『そんなこと俺が知るわけねえだろ！俺は素直にダイノガイスト様の命令を聞いているだけだ！お前を「生かしておけ」とな！ジェットガイスト様が自分の手で作った食事だ！ありがたく食べる！』

「……………こんな私に何の価値があるって言うのよ?」

楯無が言うのも最もだった。

今の自分は何者でもない。

ロシア代表としての肩書もIS学園生徒会長、更識家当主として権利もすべて失い、さらに脱走した代償として両手足までも失った。

こんな自分に勝ちなどある筈もない。

精々、売春婦として売り飛ばされるぐらいだろう。そんな楯無のところへある人物が来る。

『調子はどうだ?』

「あ、あなたは?」

『キキーツ!!ジェットガイスト様!!』

コウモリはお辞儀するように挨拶する。ジェットガイストは何かしら言うとかウモリはどことなく飛び去って行った。

『……………私の作った食事の味はどうだ?』

『……………』

『そう警戒しなくてもいい。』

「……………あまり言いたくはないけど……………美味しかったわ。」
『そうか。』

そう言うとかジェットガイストは楯無のベッドのすぐ脇の椅子に腰を掛ける。

『あれは一夏のお気に入り味のな、一口食べればすぐに私が作ったことが分かるんだ♡』

「一夏?もしかして織斑一夏のこと?!」

『あつ、いかん。これは言うてはいけないことだった……………』

ジェットガイストは少し「しまった!」という感じに言った。

「あのダイノガイストに抱き付いていた篠ノ之箒や篠ノ之束も気になつていたけどどういう事!」

『あつ、あれは私と一夏の求愛活動で、あれ以外にも「セ(規制)ス」やら「ろうそく(規制)」とかもやって……………』

「……………えっ?もしかして、ダイノガイストの正体って……………三年ぐらい前に行方不明にあつた織斑一夏!」

『あつ……………しまった……………』

つい口が滑つたとジェットガイストは顔を隠す。

「も、もしかして……………あの時見た篠ノ之箒って……………あなた?」
『……………』

ジェットガイストは顔を見せず頷く。楯無には訳わからなかった。
『何を話している?』

「あつ。」

そこへダイノガイストが現れる。ジェットガイストは彼を見るなり、いろんな意味で怯えていた。

『箒、余計なことまで何を話している?』

『ち、違うんだ!?!これにはうっかり……………』

『問答無用。』

ダイノガイストはどこからか鞭を取り出すとジェットガイストを叩こうとする。

『ま、待ってくれ!』

『なんだ?まだ何か言い訳でも……』

『その……やるなら寝室のベッドで♡』

ダイノガイストは呆れたのか鞭をしまう。

『えっ!?やらないのか!?!』

『お前はいつもやっても喜ぶだけだからな。だからやろうがやめようが同じだ。』

『そ、そんなく!!そんなこと言わずに私にやってくれ!!』

『断る。』

『やだやだやだく!!構ってもらえないと死んじゃう!! (泣き)』

ジェットガイストはそう言いながらダイノガイストと共に部屋から出て行く。

「………意味が分からない。」

これが楯無の結論だった。

サボンナ王国 ジャングル上空

その頃、サボンナ王国ではソニックルに搭乗したワルターがジャングルに向かって爆雷を落としていた。

「あつ、吐かぬなら 殺してしまえ ライオンちゃん。」

「字余り……んんん？」

後部座席でカーネルはリーダーで二つの反応を捕らえる。

ドランとアドベンジャーだ。

『チエーンジツ！ 鋼鉄武装、アドベンジャー!!』

『チエーンジツ!!』

ドランとアドベンジャーは姿を変え、燃えるジャングルを見る。

『アドベンジャーは火事の拡大を防げ！私と簪は主たちを!!』

『了解!』

「ねえ、私は？私にできることはないの!？」

蘭だけ一人何かできることはないかと尋ねる。簪と本音はプロテクトの解除に成功したのかISを纏っている。

『では、主は私と一緒に消火活動を手伝ってください。私が火を消すので主はポイントを定めてください。』

「分かったわ!」

蘭はアドベンジャーの肩に乗ると的確に指示を出して消火活動を開始する。ドランと簪、本音も急ぐがそこへワルターたちが迫る。

「そう簡単に小娘たちのところへ行かせるか!!」

ソニックルの左右には、ISアラクネを纏ったオータム、サイレント・ゼフィルスを着着したエムがいた。

「ISを使っている奴らは、俺たちに任せな!」

オータムは高速で簪へと迫って行き、装甲脚には砲門から攻撃を開始する。

「くっ!」

簪は、背中に搭載された2門の連射型荷電粒子砲「春雷」で応戦する。

「ちっ!」

オータムは簪の攻撃に掠った。

「シールドエネルギーの減りが早い……やっぱ、本調子じゃないからまずいか……」

「なら、私がやる。」

エムは、サイレント・ゼフィルスの六基のビットを展開して、攻撃する。

「本音は急いで千秋たちのところに行つて！」

「え〜！でも、かんちゃんまずいよ〜！あの機体セツシーのよりも攻撃が早いよ〜!!」

「いいから！私たちがこうしている間にも四人が……」

「うう……わかった。急ぐから待つてね〜!!」

本音は、簪から離れて千秋たちの元へと急ぐ。

「あのガキ……逃がしておけるかよ!!」

オータムも後を追って行った。

登場！空の騎士！

サボンナ王国 ジャングル

「大分火の手が回って来ちやったわね……」

鈴たちはできるだけ煙を吸わないようにしながらほふく前進をする。四人の前にはライオンが歩いていった。

「でも、布仏先輩。本当に大丈夫なんですか？ライオンなんかの後をついて行つて。」

「ええ、野生動物は基本自分たちの縄張りを持つとき安全なルートを把握しているものですから、おそらくあのライオンも安全なルートを模索しながら移動しているので。」

「うわあ……流石先輩ね。言う事に説得力があるわ……」

四人がそう話している中ライオンは突然立ち止まる。

「あら？」

「どうしたんだ？」

四人は不思議そうにライオンを見るとライオンはこっちを向いて唸り始める。

「な、なんだ!?も、もしかしてここで一緒に心中しようってわけじゃ……」

弾が言いかけたとき、ライオンは彼に向かって飛び掛かってきた。

「危ない！」

虚があと一步のところまで弾を後ろに引っ張り、ライオンは倒れて来た倒木の下敷きになった。

「あ……ありがとう。」

「ど、どういたしまして……」

二人は顔を見合わせると思わず赤くなった。

「ちよつと、なんでここでラブシーンなんて出すのよ!?今、それどころじゃないって言うのに！」

既に後ろは火の海になっていた。

最早逃げ場はない。

「……こうなったら、やるしかねえ！」

弾は何か覚悟を決めたように言う。

「何をするつもりよ!?!」

「あいつの口からパワーストーンを取り出す!」

「弾、無茶にも程があるぞ! 幸いなことにコイツは眠っているけどよ……」

千秋は下敷きになっているライオンを見る。ライオンは目を回して確かに眠っている。

「分かっているけどよ……このままだと俺たちは焼け死ぬ運命なんだぜ!?! だったらここで男を見せなくてどうするんだよ!」

弾は、気絶しているライオンの口を強引に開く。

「よし、だったら俺が口を押えるぜ!」

「私も!」

鈴と千秋は二人係でライオンの上あごを固定する。

「では、私も!」

虚も加勢して強引に押さえる。

「よし、そのまま動かすよ……」

弾は、慎重にライオンの口の奥へと右腕を突っ込む。

『クッ!』

「クハハハハッ! 飛べないとはなんとも哀れだな!」

ソニックは飛べないゴルドランに対して好き放題にビームランチャーをお見舞いする。

『このままでは!』

「死ぬ。」

一方のエムも自機に使い慣れていない簪をいいことにいたぶっていた。

「これくらいで!」

簪は打鉄式式の最大の武装ともいえる山嵐を展開し、多数の独立稼働型誘導ミサイルを発射する。

「ちっ! 数が多いか!」

エムは前段撃ち落しきれないと判断し、高速で移動をする。その内の何弾かが命中する。

「本音、急いで! このままじゃ……」

簪はシールドエネルギーの残量を見ながら言う。

その直後、交戦している二人の間を何かは高速で通り過ぎた。

『チエーンジッ! プテラガイストオ!!』

プテラガイストは二人を標的に両腕からビームを放つ。

「ちっ! 余計な手が!」

エムは不利だと悟ると撤退をする。簪も本音の追うオータムを追いかけるべくひとまずその場から退散する。

『ISには逃げられたか。だが、勇者一体を持って帰るには絶好のチャンスだ。おい、サンダー! 聞こえているんならいい加減出てこい!』

『呼んだか?』

そう言うのと地面からサンダーガイストが現れる。

『ドランをパワーストーンに戻せるチャンスだ。合体するぞ!』

『フユ~~~~』

『いい加減にしろ! そんなネタばかりしているからこの作品人気ないんだぞ!』

プテラガイストはサンダーガイストにエネルギーボックスを装着させ、自分も装着する。すると二体は合体し、ケンタウロス型の姿へと変化する。

『二体合体！プテダー!!』

『何!?!』

プテダーはドランに向かって突進して行き、すれ違いざまにスピアで脇腹を突き刺す。

『グッ!?!』

「おのれガイスター！私を差し置いてパワーストーンを奪うつもりか!?!」

ワルターの乗るソニックルは、ドランから目標を変え、プテダーに向かってビームランチャーを発射する。しかし、機動性の高いプテダーに当たることはなかった。

「弾、早く取れ！これ以上は無理だぞ！」

千秋たちは三人がかりでライオンの上顎を押さえているが弾が口の中に突っ込んだ直後目を覚ましたため、今にも無理やり閉じようとしている。

「あと少し！後ほんのちよつと先なんだ！」

弾は奥へ奥へと手を推し進めていく。

「うう……私、もう力が入らなくなってきた……」

「凰さん、しつかり！私たちが手を離れたら全てが水の泡ですよ！」

「布仏先輩の言う通りだ！踏ん張れく!!」

三人は声を掛け合いながらも何とかライオンの上顎を押さえる。そうしている間に弾の手にようやくパワーストーンが届いた。

「つ、掴んだぞ！」

「早く復活の呪文を！」

「えつと……黄金の力護りし勇者よ！今こそ甦り我が前に現れ出でよ——!!!」

次の瞬間、燃えている倒木が四人と一匹の前へと倒れて来た。

「ああく!!オリムー！リンリンく！お姉ちやくん！ダンダンく！」

倒れたところでようやく本音が現場に到着した。それに続いてオータムも現場にたどり着いた。

「なんてこつたい！パワーストーンがガキども一緒に燃えちまいやがった……って何!？」

オータムは、言いかけた直後倒木が吹き飛ばされ、何かが上空へと飛んで行った。

しばらくするとその姿が明らかになり、翼をもつ赤い勇者が鈴たちを掌に乗せて飛んでいた。

「あ……い、生きてる……」

『私は空の騎士、ジェットシルバーです。主よ、私にご命令を。』

ジェットシルバーは鈴たちを見ながら言う。

「今回は弾が言いなさいよ。」

「えつ？俺でいいの？」

「今回復活させてのはお前なんだしいんじゃね？」

「そうか……それじゃあ命令するぜ！悪太のロボットをやっつけろ！」

『ラジャー！』

ジェットシルバーは四人を安全な場所へ置くと上昇する。

『チエーンジツ！』

ジェットシルバーは、戦闘機へと変形し飛んでいく。

「くそ！せっかくなこここまで来て手に入れたパワーストーンを横取りしやがって！」

オータムは千秋たちの方へと飛んでいく。

「オリムー！」

本音はオータムを押さえつけ、千秋の方へ何かを放り投げた。白いガントレットだ。

「サンキュー！のほほんさん！」

千秋はガントレットを右手に装着する。

「白式！」

その瞬間、千秋の体を白い装甲が覆い、IS「白式」が展開された。千秋は白式の雪片式型を展開し、オータムに斬りかかる。

「二対一じゃ分が悪いね……今日のところは見逃してやるよ！憶えておきな！」

オータムは悔しがりながら撤退して行った。本音はようやく四人の前に着地する。

「いや〜四人とも無事でよかった〜。」

「よかったじゃないわよ！危うく死ぬところだったじゃない！」

鈴は怒りながら言う。

「それに何であんたが私の『甲龍』使ってるのよ!?一応私の専用機なのよ!？」

「だって使えるのがこれしかなかったんだも〜ん。それにリンリン向けにカスタマイズされちゃっているせいでまともな武器が使えなかったのだ〜。」

「おいおい……見掛け倒しだったってわけかよ……。」

弾が冷や汗をかきながら言う。

「まあ、仕方ありませんよ。標準的な量産機と比べて専用機はそのパイロットに使いやすいように改良されていますから。」

「まあ、いいわ。それよりも早く私にも渡しなさいよ。ドラんたちの方も心配だし。」

「ほいほい。」

本音は甲龍を解除するとブレスレッドの状態に戻して鈴に返す。

「甲龍！」

鈴はすぐに甲龍を展開する。

「私たちはジェットシルバーの後を追うから布仏先輩は弾のことをよろしく願います！」

「おいおい！なんで俺がまるで荷物みたいな言い方になっているんだよ!?!」

「だって、アンタ先輩と本音とだけにすると何するかわからないんだもん。」

「えっ!?!俺ってそんな変態キャラだっけ!?!」

「まあ、しばらくここで待っているのよ！」

そう言うと鈴と千秋は飛び去って行った。

『そりゃあ!!』』

『うおおっ!!』

「おのれ!」

プテダーとワルターにドランはみるみる追い詰められていった。

「こうなったら、最大出力で勇者共々葬ってくれる!」

ワルターはソニックルのビームランチャーの出力を最大限にする。

『はっ!馬鹿な奴だ。例えドランを葬ってもパワーストーンはこっちが先にくたばると思っっているのか?その前にこのスピアで撃ち落してやる。』』

プテダーもスピアをソニックルに向ける。

「止めだ!」

ワルターは地上に向かってビームランチャーを向ける。

『お待ちなさい!』

その直後にソニックルのすぐ脇を赤いジェット機が通り過ぎる。

ジェット機は変形し、ジェットシルバーへとなる。

『ここから先はこのジェットシルバーがお相手しよう!』

『おお!ジェットシルバー!』

地上からジェットシルバーを見ながらドランは叫ぶ。

『ちっ!先に勇者を目覚めさせられたか!こうなったら、ドランだけでも頂いていくしかねえ!』』

「やはり、あれは本物のパワーストーンの様でしたな。」

「くうう!!またしても勇者を先に目覚めさせられたか……こうなったら貴様も地上に落として破壊してくれる!!」

ソニックルはジェットシルバーに向かってビームランチャーを連射する。しかし、ジェットシルバーは紙一重の如く、避けてしまう。

「は、速い!?!」

『ジェットスピア、マッハ突き!!』

ジェットシルバーのスピアはソニックルの左右に取り付けられたブースターを破壊する。

「し、しまったく!!」

ソニッククルは飛行能力を失い、地上へと落下する。

『後は頼みましたよ、ドララン。』

『心得た!』

『『そうはさせるか!』』

プテダーはドラランに向かって突進して行く。

『ゴルゴ——ン!!』

ドラランが叫んだ瞬間、プテダーが走っていた地面が割れ、ゴルゴンがプテダーを吹き飛ばした。

『『何イ!?!』』

プテダーは地面に激突し、プテラガイストとサンダーガイストに分離した。そうしている間にドラランがゴルゴンと合体し、ゴルドランへとなる。

『黄金合体、ゴルドラーン!!』

「喰らえ——!!」

ソニッククルはビームランチャーをゴルドランへ向けて放つ。しかし、ゴルドランはスーパー竜牙剣で防いでしまう。

『スーパー竜牙剣!!』

「何イ!?!」

『『……どうする?』』

『『どうするも何もこれじゃあもうパワーストーンが手に入らない以上用はねえ!撤退するぞ!』』

『『やった〜ガンバルガー見える〜!』』

『『……もう、どの時代なのかさっぱりわからん。』』

プテラガイストとサンダーガイストもはやここにいるのは無駄だと判断しそれぞれ撤退して行く。

『『一刀両断斬り!!』』

ゴルドランは脚部のブースターを全開にし、ソニッククルへ急速に接近する。

『『はああああああ!!』』

ソニッククルは、胴体から真っ二つに切断され、大爆発を起こす。そこからワルターの乗る小型脱出機が上空に飛び去って行く。

「おのれ〜！三度ならず四度までも！憶えておれよ〜!!」
ワルターが飛び去った後、ゴルドランは剣を鞘へ戻す。

「はああ……………今日は散々だったな……………」

千秋たちに置いてけぼりにされた弾はしゃがみ込みながら言う。

「でも、五反田君も頑張ったと思いますよ?」

虚は優しい表情をして言う。

「そうでもないですよ、俺に比べれば千秋や鈴の方が体を張っていますし。」

「それはいまの私も同じようなものです。」

「えっ?」

「今まではあの人(楯無)のためにいろいろと頑張ってきましたけどいなくなったらなつたでやる事が無くなって……………まあ、色々と面倒をかける妹はいますけど。」

「むう〜お姉ちゃんの意地悪〜」

虚の隣で本音が頬を膨らませる。

「とにかく、五反田君は自分にできることをやっていればいいと思いますよ。それが一番あなたらしいと私は感じますから。」

「布仏さん……………」

「それに……………さっきのあなたの行動カッコよかったですよ。」

虚は少し顔を赤くしながら言う。それを見て弾も顔を赤くした。

「あくあく……………コレ、ラブロマンス物じゃないんハズなんだけどな。」

本音は見て見ぬフリをする。

ガイスター基地

「……………ねえ？」

「ん？何かな？〃元〃更識楯無ちゃん？」

楯無は包帯を解いて新しいものを巻いてくれている束に向かって聞く。

「あのダイノガイストとジェットガイストって本当に織斑一夏とあんなの妹なの？って言うか元って何よ、元って。」

「別にいいじゃん。でも、あの二人が本人であることは本当だよ。」
「証拠はあるの？」

「うん。二人が人間の姿に戻った時の血液型・DNA・指紋・声紋も含めてね。それに私の発明した装置で記憶を読み取ることができる。」
「……だったら、なんで海賊行為なんかするのよ？そのまま、帰るってことだってできたはずでしょ？」

「…………楯無、いや刀奈ちゃんは今の自分を見てどう思うかな？」
「えっ？何を急に？」

「今の自分の姿を見て人前にその姿をさらせる勇氣はある？」

「そ、それは……………」

「いっくんはね、前世、つまり今のいっくんとして生まれる前の記憶が

あの事件で蘇ったんだよ。」

「それがダイノガイスト？」

「うん。ダイノガイストとしてのいつくんは元々宇宙海賊の首領だったんだよ。但し、目的のもの以外は一切手を出さない。それだけは本当のことだよ。だからむやみに人の命は取らない。君だってやられたとき殺そうとはしなかったでしょ？」

「でも、そんな彼がどうしてISなんて強奪し始めるのよ？あなた、生みの親でしょ？それに今の世界においてISがどれだけ……」

「……それは『兵器』としての意味かな？」

「へっ？」

東の一言に楯無は思わず声を出した。

「確かにISは今の世の中、兵器として十分な性能を発揮していると思うよ。でもね、私はISを宇宙進出のために作ったんだよ。それを兵器として使われるってどういう気持ちかわかる？」

「うっ……」

「私はね、正直言つて『失望』したよ。私が作ったISを兵器としか見ていないこの世界をね。だから、コアを生産するのもやめたし、政府からも逃げ出した。そのせいで箒ちゃんを不自由な体で寂しい思いをさせちゃったんだけどね。」

「じゃあ、あなたは、その腹いせに今の社会を壊そうって言うの!？」

「うん。だからいつくんたちに付いている。箒ちゃんも一緒に居ることを選んだし。」

「……」

「……で、答えは出たのかな？」

東は話を一区切りすると楯無を見る。

「……まだ。」

「だろうね。まあ、無くなった手足を元に戻す方法は一つじゃないからゆっくり考えるといいよ。サイボーグ化したら元に戻れないしね。」

東は椅子から立ち上がり、部屋から出て行く。

「……元に戻れないか。」

楯無は天井を見上げながら言った。

『ブラアアアアアアアアアアアア!!』

『あちあちあち!!』

ダイノガイストは帰還してきたプテラガイストとサンダーガイストにパワーストーンを取り損ねた罰として火炎地獄を味わっていた。
『ガツハツハハハハ！ざまあないぜ！』

ホーンガイストは面白そうに見ていた。

『この戯けが！あんなことを言いながらパワーストーンを取り損ねるとは！恥を知れ！』とダイノガイスト様が仰っておられる！』

『クツ．．．．．』

プテラガイストは力なく倒れるがサンダーガイストは何故かテレビの方へと向かって行く。

『放送時間．．．．．間に合った．．．．．』

テレビのリモコンのスイッチを押すと倒れる。

『おいおい、相当な執念だな。』

『根性だけは称賛に値するぜ．．．．．』

『．．．．．』

ダイノガイストは椅子からゆっくり立ち上がり部屋を後にして行く。

『あつ、ダイノガイスト様．．．．．』

『ああ．．．．かなりご立腹のようだぜ．．．．．』

ホーンガイストとアーマーガイストは倒れた二人を担ぎながら言う。

『その役立たずを治療室にぶち込んでおけ！』と、ダイノガイスト様は仰っておられる！後、これからジェットガイスト様と寝る神聖な時間だ！！部屋には入らないように！！（殺されるから）』

コウモリは伝言を言うとその場から飛び去る。

『やれやれ．．．．．テレビは録画にしておいてやれ。サンダーが暴れたら大変だしな。』

ホーンガイストはそう言いながらいつもは仲が悪いはずのプテラガイストを担ぎながら治療室へと運んで行った。

???

「そう、今回も失敗しちゃったという訳ね。」

ガイスターが騒いでいる一方、どこかの研究施設では長身で豊かで美しい金髪とバストを併せ持った女性が通信を行っていた。

『そうなんだ。おかげで今回もパワーストーンはおじやんだ。』

「まあ、まだ五つあるんだから焦ったってしょうがないわ。ボチボチ頑張りなさい。」

『ああ、それにしてもスコール、そっちの方はどうなんだ？俺たちがこっちに来てから随分経つが。』

「ええ、ドライアスの方は大分進んでいるわ。あの宇宙商人にうまく接近して必要なものは回収できたから。後はどういう風にやって行くかを計算しているところよ。」

『そうか。じゃあ、また連絡するわ。』

そう言うとオータムからの連絡が途切れる。通信を終えたスコールは通信室から別の部屋に移動し、奇妙なロボットと取引していた。

トレイダーだ。

「ごめんなさいね、知り合いと話していたから少し遅くなっちゃったわ。」

『かまへん、かまへん。これもお客へのサービスや。それにしてもスコールはんは珍しいもんを頼むもんですな。』

トレイダーの後ろには巨大なロボットの残骸数体があった。

「これが本物なのね？」

『当ったり前や。苦勞したんやで、元の宇宙に戻って闇ルートを通じてまで回収してきたんやから。』

トレイダーはそう言いながら電卓で計算をする。

『ええつと……グレートファイバードの残骸一と……サ
ンダーバロンの残骸一、スーパードガイオン
の残骸、占めて……中古品ちゅうわけ
でまけて150億や!!』

トレイダーはスコールに結果を見せながら言う。

「構わないわ。」

『あらあら、スコールはんは話が早いでんなく。ダイノガイストはんやったらここで「こんなボロボロなら50億だ!」って言う所なんやで? まあ、奥はんできて丸くはなつたんやけど。』

「必要なものが手に入るんだつたら惜しまないわ。でも、アレはやっぱり見つからなかったの?」

『アレはさすがに無理でしたわ。なんせ木っ端みじんになつたんやからな。』

トレイダーの言葉を聞いてスコールは少し残念そうな顔をする。

『でも、データやったらありまっせ。闇ルートで手に入れた「宇宙皇帝
ドライブス」のデータや。』

元宇宙皇帝とボスの一日

『な、何故だっ!?何故、奴は倒れぬ!?!』

私は驚愕していた。奴は既に戦う力は残っていないはず、なのに何故まだ戦おうとしているのだ?

『私はケンタたちやこの世に住むすべての生命に約束したのだ。たとえこの身は滅びても、貴様を倒すとなあっ!!』

『ほぎけ!!』

私は奴に向けて砲撃をした。奴のマスクは碎け散るが奴は私に向かって行く。

『行くぞー!ドライアス!!』

『何イ!?!』

奴は全身からエネルギーを発し、火の鳥の如く私へと向かってくる。一瞬、先ほど始末した雑魚二体の姿が浮かび上がったような気がした。

(ドライアス!)

(受けるがいい!)

「これが俺たちの、最後の力だあああ――

――っ!!」

奴の一撃が私の体を貫く。

認めぬ。

私が……宇宙を次期に支配するこの私が敗れるなど……

『私は敗れぬ……敗れるわけがない……私は宇宙皇帝……

ドライ……アス……なのだあああ――

――っ!!』

???

「……………はあっ!？」

一人の青年がベッドから起き上がる。

「はあ、はあ、はあ……………」

青年は辺りを見回す。

「ゆ、夢か……………」

青年は顔の汗を手で拭う。すると丁度スコールが食事を持って部屋を訪れた。

「おはよう、新しい体の方がどうかしら？」

「……………最悪だ。まあ、女の体の時よりは気楽でいいが。」

青年は少し疲れたような顔で言う。

「あら、女性の姿としてのあなたも中々良かったわよ?」

「宇宙皇帝である私がいままで女であってたまるものか。宇宙女帝と言われて笑われるのがオチだ。」

青年はベッドのすぐ脇にある鏡を見ながら言う。もし、ここにあの時宿敵と共に行動していた少年たちがいたら間違いなく見間違われそうだ。

「よりによってファイバードが利用していたアンドロイドの体を原子分解までして組み合わせることになるとはな。」

「でも、DCでやるよりも成功する確率は高かったわ。現にこうして成功しているのだから。」

スコールは少しからかうように笑う。

「だが、これでもかつての私の姿まで程遠い。こうしている間にもダ

イノガイストの奴めが……」

「焦るのは失敗の元よ。現にオータムたちも失敗しているんだから。ゆっくりやっ行って行きましよう、〃火鳥お兄ちゃん〃？」

「メモリーバンクに残っていた奴の名前か。その呼び方はやめてくれ。」

「ふふ、冗談よドライアス。」

スコールは、笑いながらドライアスの隣に座る。

実はこの青年、ドライアス本人なのだ。

何故この姿になったのかというとDCによる実験を何度も重ねた（もちろん人間ではない）結果、DCでの成功率は極めて低く、成功したのはダイノガイストともう一人のみだったためこれ以上続けても意味がないという事での計画の方向転換したからだだった。

それは、人間としての体とロボットの体を元素にまで分解して〃融合〃させるというものだった。合わせる素材としては丁度トレイダーから買い取ったファイバードたちの残骸の中にアンドロイドの残骸があったためそれを利用してもらった。それがよりによってあのファイバードが使用していた体だったのだ。そのおかげで性別の変更はできたが外見はファイバードの人間態〃火鳥勇太郎〃と瓜二つになってしまったのだ。

「こうなるのだったら、スコールの言う通り復元した上に複製を完了させた後にすればよかったな……」

「そう言ったつてもう後戻りはできないわよ。次はその姿からどうやって巨大なロボットの姿にするのか考えるから……気を落とさしちゃダメよ。」

「……ああ、わかっている。」

ドライアスはそう言いながらモーニングコーヒーを一気に飲み干した。

ガイスター基地

『えっ!?!気分転換?!』

一方、ガイスター基地ではダイノガイストの一言で騒ぎになっていた。

『ごこんところ基地に籠りっぱなしだからな。たまには箸と外に行ってくる。』

『で、ですがダイノガイスト様とお二人だけで……』

『何?お前たちに一日休みをくれてやると言っているのが分らんのか?』

ダイノガイストは目を光らせながら言う。

『い、いえ。何でも……』

『熱血サイキョー!!』

『……』

一人だけテレビに熱中しているサンダーガイストを見て三人は黙る。

『……と言うわけだ。お前たち三人も自由にしている。』

ダイノガイストは、そう言うのと部屋から出て行った。部屋の外では既に化粧した箸が待っていた。一見するとどこかの貴婦人に見える。

「夏くまだ行かないのか?」

『……お前、いくら久しぶりだからって準備早すぎだ。』

「だって、一夏、最近夜しか相手してくれないだもん……。」
箒はしょんぼりしながら言う。

『まあ、慌てるな。レースまでの時間もあるからな。』

そう言うとダイノガイストは、一夏の姿へ戻る。

「でも、車に乗ってレースするなんて意外だな……。」

「まあ、たまにはいいと思ってな。車は東が自ら作ったオリジナルの車だ。」

「姉さんが作ったのか……まさか、空飛ぶためのジェット噴射が付いているとかロボットに変形するとかはないよな？」

「まさかそれはないだろう。では行くぞ。」

ダイノガイストは箒の手を取りながらゆっくり歩いて行く。

数時間後（〇〇）

「……………何でこうなった？」

ダイノガイストは目の前の光景を見ながら思った。今日は箒とレースをしながら気分転換をするはずだった。

にもかかわらず、目の前ではワルターの軍団とアドベンジャー&ジェットシルバーの攻防戦。ドランとワルターはパワーストーンの奪い合いで既に現場にはいない。

参加していた車は見事に大破。

自分の目の前ではせつかく洋服をボロボロにされたショックで泣き付いている箒。

何で今日に限ってこうなるのだと怒りが神経を逆立てていた。

「許さん……………許さんぞおお!!」

ダイノガイストは本来の姿へと戻り、空中戦を繰り広げているカスタムギア軍団を素手で葬って行く。

『な、なんだっ!? 奴は!』

スピアを構えていたジェットシルバーは思わず攻撃を中断する。そんなジェットシルバーに構わずダイノガイストは突っ込んでくる。

『邪魔だアアア!!!』

『うわああ!』

ダイノガイストのパンチ一発でジェットシルバーは吹き飛ばされて行く。

『ジェットシルバー!』

アドベンジャーは思わず彼の方へと向かうとする。

『貴様も消えろ!』

更に角から電撃光線を発射する。

『が、ガアア!』

アドベンジャーは動きを封じられるとダイノガイストに顔を掴まれ上空から地面に叩きつけられてしまい、気を失う。

『おのれ! 大事な箒との時間を台無しにしおって! 全員、生かしてはおかんぞ!!』

ダイノガイストの怒りは収まらず、ジェットモードでドランたちの後を追った。倒れたジェットシルバーとアドベンジャーの元に蘭と

簪、本音が駆けつける。

「アドベンジャー！」

「ジエツトシルバー、大丈夫？」

『え、ええ………どうか。』

『しかし、今のところは動けそうにないようです。』

………結局、パワーストーンは一旦ワルターの手に渡つたのだが呪文を唱えようとした瞬間、ダイノガイストの体当たりによつて、鈴たちの手に渡り、ワルターはその後散々ダイノガイストにやられて命からがら逃げて行った。(パワーストーンは持ち帰り、復活の呪文を唱えたら星の騎士スターシルバーが復活しました)。

「なんか、今日はあの大ボスに助けられたな。」

「それにしてもなんでアイツあんなに起こっていたのかしら？」

「まあ、終わり良ければ総て良しつて言うんだし問題ないだろう。ねっ？虚さん。」

「そうですね、確かにあのままだったらあちら側に勇者が復活してしまふ所でしたから。」

『なああ、おい。』

「ん？どうしたのよ、スターシルバー？」

『俺の出番これだけ？』

「うん、いつも一刀両断斬りで終わりじゃ不味いし。」

『そりゃあ、ないぜ………』

隠れ家でスターシルバーは寂しそうに言う。

???

「準備で来たわよ、ドライアス。」

スコールはパネルを操作しながら言う。目の前ではワードスーツを着たドライアスとロボットモードに変形させたかつての宿敵『ファイバード』がいる。

おそらくファイバードはあの残骸から修復したか復元したものだろう。

「基本的に合体プロセスは同じだから。落ち着いてやってね。」

「なあ、スコール。いくら何でもファイバードでやるのは勘弁してくれないか?」

ドライアスは気難しい顔で言う。しかし、スコールは考え直す気はないようだ。

「データから作り直す必要があるからそれからだと遅いわ。それに比較的につちの部分はそこまで壊れていなかったんだから。一番早

く修理できてよかったのよ?」

「しかし……」

「文句言わない。使えるものはちゃんと使わなくちゃ。それじゃあ行くわよ。」

スコールは実験を始める。

ドライアスは、「フォームアップ!」と叫びながらファイバードの胸部に合体する。すると、ファイバードの目が光る。

「どう?腕は動かせる?」

スコールの指示でファイ……ではなくドライアスは腕を動かしてみる。但し、かなりしんどい顔をしていた。

『うう……早く元の体に戻りたい……』

ガイスター基地

『……』

ダイノガイストは戻った後、椅子に座り黙り込んでいた。

『……なあ、ダイノガイスト様。どうしてあんなに機嫌が悪いんだ?』

アーマーガイストはそつと三人に聞く。

『お前ら知らないのか？ボスが参加していたレースの優勝トロフィーにパワーストーンが付いていて、手に入れそびれたんだ。』

『とろふいー？とろろの親戚か？ご飯に合うか？』

『……と、とにかく、あのワルザック国の連中にせっかくの時間を台無しにされてあんなに機嫌を悪くして帰ってきたんだ。』

『そ、それってヤバいんじゃないのか？』

『今日は、奥方との記念日だったからな。こっちにまで飛び火が来ない内に部屋に戻ろう……』

四人は恐る恐る部屋を後に行った。

『……』

「一夏、今日使う入浴剤決めた？」

『……ゆずは昨日やったから今日はジャスミンだ。』

「じゃあ、今日はいつも以上に可愛がつてね♡」

ダイノガイストが黙っていたのは今日風呂に使う入浴剤を決めることだった。

篠ノ之家

とある日の織斑宅

「はあ〜〜〜だるい。」

鈴はソファーにくつろぎながら言う。すぐ脇の椅子では簪と虚、本音がテキパキと何かを調べていた。弾と蘭は店の手伝い、家の主である千冬はハローワーク、千秋は図書館に行つてここには女性陣しかいなかった。

「しかし、今回のパワーストーンの在処は本当に難しいものですね。」

虚はそう言う。パソコンを閉じて、台所へと行く。

「うにゆ〜〜〜こんなの見つかりっこないよ〜〜。」

「本音、そんなこと言わないで。言うだけこつちも虚しくなる。」

あきらめムードを漂わせている本音に対して簪は言う。

何故このようになったのかというそれは、数日前のスターシルバーを復活させたときのことだった。

数日前

「これが次のパワーストーンの在処？」

弾はゴールドスコープに表示されたものを見て言う。

『ああ、これが俺が憶えている在処の記憶だぜ？』

「これって……」

一同は顔を見合わせる。場所は絞れるには絞れるのだが問題はその数だ。

「じ、神社……ですよね？」

「うんうん、神社だよ。」

在処は、鳥居の門の形状をしていたのだ。

つまり、次のパワーストーンの在処は神社ということになる。

しかし、神社といたら日本だけでも数えるのが大変なほどある。

「……これは、数週間で済む問題じゃなさそうだな……」

千秋も含めて全員がこのときそう思った。

現在 織斑宅

「そもそも神社を探すのだから大変なのに一体どうやって見つければいいのよ!?!」

鈴は落ち着いたのか再び本を漁り始める。

「確かに場所は、ほぼ日本に限定できるけどパワーストーンのようなものが収められている神社なんて早々あるものじゃないから。」

簪は黙々と調べながら言う。

「ふいふい。」

玄関から千秋の声が聞こえて来た。

「あつ、オリムーが帰ってきた。」

鈴たちが玄関の方を見ると汗を拭きながら千秋が入ってきた。

「どう？何か手がかりになりそうなの見つかった？」

「全然、寧ろ調べる神社が増えただけだ。」

千秋は図書館から借りて来たのか大量の本をテーブルに乗せる。

「ええええええええええ!?こんなに!？」

「ああ、これでも全部借りれなかったぐらいだしな。」

「うう……頭が痛くなってきた。」

簪は頭を押さえながら言う。

「あくああ。誰か手がかりでも持ってきてくれたらいいのにな。」

鈴は天井を見上げながら言った。

ザゾリガン

一方のワルターたちもパワーストーン探しに難航していた。

「え〜い!まだ小娘共はパワーストーンの在処を見つけられんのか!？」

「申し訳ございません、諜報員総出で手当たり次第搜索しているのですが未だに手がかりが掴めておりません。」

「うう………なんとして次のパワーストーンは………」

部下の報告を聞いてワルターはソファーに腰を掛けて頭を抱える。

「若君、お気持ちはこの爺めにもよとおおく理解しております。しかし、あちらは学生、夏休みが終わればパワーストーン探しはできなくなります。それにこちらが先に手に入れば、次の勇者の手掛かりが掴めるのは確実。ここは落ち着いて時を待つべきです。」

「………そうだなあ。」

カーネルの言葉を聞いて、ワルターは落ち着きを取り戻す。

「確かに……連続の敗北で私も冷静さが欠けていた。確かに今は落ち着いて時を待つべきだな。」

「左様でございます。現在、本国から対勇者用の兵器の開発を急いでおります。パワーストーンを探すのはそれからでも遅くはないものかと。」

「うむ、オータムたちもたまには休ませなければならんしな。二人にも今はゆつくり休むように伝えといてくれ。」

「かしこまりました。」

ガイスター基地

『例のガキどもは未だにパワーストーンの在処を発見できていないようです。』

プテラガイストは、偵察中、通信でダイノガイストに報告していた。ダイノガイストは、ダイノブレードの手入れをしながら聞いている。

『そうか。他に宝の情報はないか？』

『ええ……特に他のことは……』

『……そうか。もう、戻っていいぞ。』

『はっ！』

プテラガイストはそう言うと言通信を終える。ダイノガイストは、ダイノブレードの手入れを終えると近くに飾っておいた人間の時の写真を見つめる。

『……家族のことを考えるとは俺も甘くなったもんだ。』

ダイノガイストは皮肉そうに言う。そこへ箒が部屋に入ってきた。

「……一夏。」

『どうした？また、更識刀奈に余計なことを言ったからお仕置きしてくれと言いに来たのか？』

『違う、頼みたいことがあるんだ。』

『……話せ。』

ダイノガイストは椅子に腰を掛けて箒を見る。

「……私が父さんと母さんと離れてどのくらい経つと思う？」

『そうだな……“白騎士事件”が起こったのが十年前。その後すぐに重要人物保護プログラムでバラバラにされたからもう随分経つな。』

ダイノガイストは感慨深そうに言う。

「明日……ちょうど二人の結婚記念日なんだ。」

『……』

「もう私がガイスターのメンバーで会いに行くことはできないというのはわかってる！でも……最後に父さんたちの顔だけはおきたいんだ！」

『……要はこつそり二人の様子を見に行きたいという事か。』

ダイノガイストは察したように言う。箒は頭を下げて言う。

「お願いだ！直接会わなくてもいい、だから父さんの様子を見に行かせてくれ！頼む！」

箒は必死にお願いする。ダイノガイストは腕を組みながら考える。会わせてやりたいのは山々だ。

しかし、自分のせいで今の箒を見せてあの二人が喜ぶだろうか？ひよつとしたらショックのあまり倒れてしまうのかもしれない。

寧ろ元凶である自分に憎しみを感じるのが当然だ。

でも、こつそり見に行くだけでは逆に箒の方がつらいだろう。

そう考えるとダイノガイストは、結論を出せなかった。

『……うむ……』

「会わせてあげなよ、いっくん。」

突然の声にダイノガイストは顔を上げる。いつの間にか東が部屋に入ってきていた。

「箒ちゃんも私のせいで十年も父さん母さんの顔を見ていないんだよ。ガイスターとして活動して行くにしてもこれから先会いに行くこともできなくなると思うし、ねっ？」

『……そうは言ってもな。』

「それにとっておきの情報を教えてあげるよ。」

『何？』

「実はね……」

夜 織斑宅

「ただいま……」

千冬が気の抜けた声で家の中へ入ってくる。

「あつ。お帰り、千冬姉。」

「おおう、千秋………慰めてくれ。」

「嫌です。」

「ガクツ。」

千冬はしよんぼりしてテーブルに座る。

「なんだあ、今日も駄目だったのかよ?」

「ああ、どこもかしこも駄目だそうだ。」

「だったら、アルバイトからやればいいんじゃないですか?いきなり再職しようにも今の世の中、優秀だからって雇ってくれるわけじゃないんですし。」

鈴が彼女の目の前に並べる。千冬は涙目で食事にありつく。

「………そうだ。だったら、弾の店で働いたらいいんじゃないか?少なくとも厳さんなら雇ってくれるよ。」

「おいおい………私は家事関係はまるでダメなんだぞ?そんなことしたら店が閉店してしまうじゃないか。」

「あくでも、蓮さんが一から丁寧に教えてくれると思うから大丈夫だと思えますよ?千冬さん、家事以外はできるんですから。」

「うくん………そうだな。一様二人に相談してみるか。他の仕事探している間は雇ってくれるかもしれんし。」

千冬も考えを改めるように言う。

「それにしても千秋、お前随分図書館から本を借りているようだな。何か調べものか?」

千冬は後ろにまとめられている本の山を見て言う。

「えっ？あ、ああ！まあな！ちよつと神社について……………」
「神社？」

「は、はい！日本の神社の中で何か変わったものを納めていないかって調べているんですよ!?!何かにまつわる巻物とか……………」

「……………」
「そう言えば、昔通っていた篠ノ之道場で柳韻さんから一度だけ変わった石を見せてもらったことがあるな。」

「えっ？い、石!?!」

「ああ、一度帰ろうとしたとき大雨で帰れなくなつてな。そのとき待っている間、柳韻さんがせつかくだからって見せてくれたんだ。何と言うかそのまた昔、柳韻さんの先祖が魔除けの石とかなんかで神社の宝物としてしまつてあるとか……………」

「そ、それつてどのくらいの大きさでどんな形でしたか!?!」

二人の真顔に千冬は思わず戸惑つた。

「えつと……………」
「確か掌に収まるぐらいの大きさで……………」
「……………」
「あつ、でも道場は畳んじまつたし、神社の方も……………」

千秋は思い出したように言う。千冬が言っていた当時は確かにあつたのかもしれない。しかし、篠ノ之家が引越した後、管理人が変わつたからもしかしたら蔵の整理か何かで処分してしまつていりかもしれない。もしそうだとしたら……………」

「ああ、そう言えば千秋には教えていなかったが龍韻さん、神社に戻つてきているぞ。」

「何!?!」

千冬の一言に千秋は驚く。

「一夏と篠ノ之が行方不明になつた後、ガイスターとかがISを強奪するようになってから二人を重要人物保護プログラムの監視の意味がなくなつてな。おばさんと一緒に神社に戻ってきているんだ。この間会いに行ったが二人とも寂しそつたな……………」

「そ、そうなんだ……………」

「そうだ、どうせだから明日一緒に行くか？何か手土産を持つて……………」

「い、いや！いいよ！俺、明日鈴とちよつと出かける用事があるから！」

「でも………」

「千冬さんもいつまでもニートじゃ不味いでしょ!? 一日でも早く新しい職に就かないと！ねっ!?!」

「あ……ああ………」

二人の威圧に押されて千冬は引き下がるを得なかった。

その晩、千秋と鈴はこつそり弾たちと連絡をとり、二日後に篠ノ之神社に向かうことにした。

翌日の早朝 篠ノ之神社

早朝、神社の敷地にある家の中。

その家の仏壇を掃除している女性がいた。女性は少女の遺影を仏壇に戻す。

「おはよう、箒。」

女性は遺影に向かって笑うように言う。

「貴方も生きていたらもう高校生なのね………」

女性はまるで自分の子供に言うかのように語る。

「また、箒と話していたのか？」

そこへ夫らしき男性が入ってくる。

「ええ……もうあの子の姿を見なくなってから十年目ですから。」
「……もう、そんなに経つのか……」

男性も寂しそうな表情を浮かべながらも仏壇の娘の顔を眺める。

「……二人の娘を授かって二人ともいなくなってしまうとは……
私のやり方が間違っていたというのだろうか……」

「いやいや、間違っていないよお父さん。」

「!?」

突然の第三者の声に二人は驚く。外の方を見るともう一人の娘が立っていた。

「束!？」

女性の方は束の方へと向かい彼女を抱きしめた。

「うう……苦しいよ、お母さん。」

「お前は帰って来てくれたのね……大丈夫そうで良かった……」

「束……」

「お父さん、お久しぶり。自分勝手な娘でゴメンね。」

「……元気そうだな。」

束の父、柳韻は戸惑うながらも落ち着いた態度で言う。

「うん、元気だよ。箒ちゃんもいっくんも。」

「!?」

束の言葉に二人はまたもや驚いた顔をする。

「ほ、箒だと……」

「あつ、いつけない。言っちゃダメだっていっくんに言われていたのに。」

「いっくんって……一夏君も一緒なの？」

「えつとですね……う……ん……どう言おうか、いっくん?」

束は、外の茂みの方を見て言う。すると茂みの方から小声で会話が聞こえる。

『ダイノガイスト様、聞かれていますぜ?』

『…………束め、何が「私に任せなさい！」だ（怒）。堂々とバラしているではないか…………』

『でも、出てこないとまずいんじゃないですかい?』

『馬鹿か、てめえらは！俺たちは犯罪組織として有名なんだぞ！堂々と出られるか！』

『俺、馬鹿じゃねえ!!』

『わああ!?誰もお前のことなんか言ってるねえって〜!?』

茂みの中が騒がしくなるとコウモリが代わりに出て来た。

『束、貴様なんで堂々とバラしているんだ！これじゃあ、箒に二人を会わせるどころじゃないだろ！つと、ダイノガイスト様が仰っておられる!』

「いや〜だつて会わせるんなら表から堂々と言った方がいいじゃん?」

『よくない!!堂々と出てきたら二人とも仰天して気を失うだろ!つと仰っておられた!』

「あの……………」

束の母がコウモリを見ながら恐る恐る聞く。

『なんだ!』

「家の娘の箒と一夏君はどうしているのでしょうか?」

『ジェットガイスト様は、ダイノガイスト様の正妻でダイノガイスト様の「宝」であられる。』

「?」

『つまり貴様の娘はダイノガイスト様のつ……………』

『ブラアアアアアアアアアアアア!!!』

茂みの中から火炎が発射され、コウモリは燃え上がる。

『あちちちちち!!!』

コウモリは黒焦げになって倒れた。その光景に二人は啞然とする。

「あちやく、いっくん怒らせちゃった。」

「こ、これを一夏君がやったと言うのか?」

柳韻は焦げ焦げになったコウモリを見ながら束に聞く。

「うん、二人にだけ教えるけど今のいっくんと箒ちゃん。人間じゃな

いの。」

「どういうこと？」

「えっとですね……お母さんたち、気絶しないように気をつけてね。」

東は茂みの方を見る。

「いっくくん、もう出てきていいよ。」

『……………』

茂みの方からズシン、ズシンと足音が聞こえる。

「……………」

「まあ……………」

二人は唾然と目の前に現れた者を見る。

『……………』

「この人がいっくんです。」

「……………」

東は目の前にいるダイノモードのダイノガイストに指を指しながら言った。

再会親子とスパイ勇者

篠ノ之神社

「……………」

『……………』

「あ、あなた、一夏君？」

『……………元だ。』

一同は硬直状態になっていた。

無理もない。東が目の前に出て来た恐竜ロボットを一夏だというのだから。

『……………東、やはり無理があるのではないか？』

「えっ？そう？まあ、私もあんな映像やこんな映像を見なかったら信じなかったかもしれないけど。」

『貴様……………』

ダイノガイストは東を睨みつける。

「つて、箒ちゃんは出てこないけど？まだ？」

『無視か。』

東は茂みの方を見ると代わりに四将が出てくる。

『え、奥方の方は恥ずかしくて出てきたくないそうです。』

「え〜！今回は箒ちゃんのために来たのに〜！肝心の本人が恥ずかしくてどうするの〜！」

東は、茂みの方へ行く。

「箒ちゃん、恥ずかしがらないで出て来なよ〜。」

「姉さんがいきなりあんなこと言うから出られないじゃないか！」

「だって、会うなら直接の方がいいでしょう？」

「それは……………」

「十年ぶりのお母さんとお父さんなんだから。チャンスはこれっきりだよ〜。」

「……………うん。」

箒は潔く茂みから出て来た。

「ほ、箒!？」

死んだとばかり思っていた娘を目の前に二人は驚きを隠せなかった。

「お父さん……お母さん……」

箒は涙目で両親の方へと歩いて行く。しかし、いつの間にか復活したコウモリが三人の間に割って入る。

「なっ!?!」

『娘との再会したいなら神社に収められている魔除けの石を渡せ!』と、ダイノガイスト様が仰っておられる!』

コウモリはそう言うのと箒を掴んで二人の前に見せる。

『さあ、どうする!?!早く魔除けの石を……』

『もう、バレているからやめろ。』

『へっ!?!』

ダイノガイストの一言にコウモリは啞然とする。ダイノガイストはロボットモードに変形し、コウモリから箒を受け取ると二人の前に置いた。

「箒!」

母親の方は嬉し涙を流しながら箒を抱きしめた。柳韻も少し離れて後ろを振り向いていたが隠れて嬉し泣きしているようだった。

「よかった……生きててくれて……」

「お母さん……」

箒は、十年ぶりの母の顔を見て嬉しそうだった。ダイノガイストは無言でそれを眺めていた。

『……』

「今までどうしていたの?」

「……話すと長くなるんだけど……」

箒は、隠さずに両親に自分に起きたことの全てを話した。

一夏と共に誘拐されたこと。

そこで彼のかつての因縁を持つドライアスの実験に巻き込まれ、一夏がダイノガイストなったこと。

自分は自分の意志で彼と共にいること。

IS強奪で引き起こされた宇宙海賊ガイスターにまつわる真相（一部を除く）。

「これが今まで私の身に起きたことなんだ。」

箒は二人の前で話を終える。ダイノガイストは親子だけにしようと思ひ、外では、ダイノガイストが大人しくしていた。四将たちは……束が作った持ち運び式にテレビでアニメを見ていた。

「とにかく……もう会っちゃいけないと思ったんだけど……どうしても会いたくて……」

箒は両親の顔を見ながら言う。

両親もかなり複雑だろう。

自分の娘が幼馴染の巻き添えで実験台にされて訳の分からない体にされ、さらにその幼馴染が元宇宙海賊の首領で今世間を騒がせている上に共に行動している。

普通の家庭なら速攻で警察に連絡して引き渡しているところだろう（最も警察でダイノガイストを取り押さえるなどほぼ不可能ではあるが）。

柳韻は黙って立ち上がると外で座っているダイノガイストの方へと向かって行く。

「お父さん……」

箒は、まさか柳韻がダイノガイストに向かって自分のことを言うのではと心配そうに見ていた。柳韻はダイノガイストの隣に座る。四将はそれに気がつくとも柳韻の方を見る。

『この親父、ダイノガイスト様の隣に座るとは!?!』

『貴様、そんなことをしていいと思っっているのか!』

『人間にしてはいい度……』

『……お前たちは黙っている。』

文句を言おうとした四将をダイノガイストは睨みつける。すると四将(サンダーは除く)は下がって行った。ダイノガイストは隣の柳韻の顔を見ずに話します。

『娘を変な体にされたことで文句でも言いたいのか?』

『……そのことについては何も言わんよ。君自身が引き起こしたことでないのだからな。』

柳韻は厳格な態度で言う。

『それに箒があそこまで明るくなることはできたのもあの時の君の一言のおかげだ。』

『事故で足が動かなくなった時か。』

『私たちはバラバラにされてその姿を見ることはできなかったが政府を通じてのあの子の手紙から君の一言があの子の心の支えになっていた。もし、あの一言がなかったらあの子はあのままだったのかもしれない。』

『……だが、今は宇宙海賊の副官のようなものだぞ?』

『海賊だろうが何だろうが悪いのかもしれない。私から見ても君はそこまで言うほどの悪ではないと思うがね。』

『……』

柳韻の一言でダイノガイストは黙る。

『それにもし君が悪だというのなら箒も君と共にいたいと思まないはずだ。』

『……フツ、そうか。』

『……君は箒をどう思っているんだ?』

『あいつは俺の「宝」だ。それ以上もそれ以下もない。あいつが俺につ

いて行くというのなら嫌になるまで傍に置いておく。それだけのことでだ。』

「……ならいい。そこまで言うのなら私はもう何も言わん。」

柳韻は納得したように言う。二人の後姿は大きさはともあれ、もし、ダイノガイストが一夏の姿でいたのなら親子に見えてもおおしくない光景だった。

「必要だというのなら、石ぐらい譲ろう。だが、これだけは約束してくれ。」

『なんだ？』

「あの子を……箒のことを悲しませるようなことだけはしないでくれ。あの子は君のことを心から大事に思っているからな。」

『……無論、一度手に入れた「宝」を手放す気はない。おそろくこれから先もな。』

「フツ、遅しいものだ。」

柳韻は満足そうな顔で一言言った。

その日の夜のガイスター基地

『……コレが神社にまつわる魔除けの石か。』

柳韻たちと一日を過ごして帰ってきたダイノガイストたちは柳韻

から受け取った魔除けの石を見る。その後、ダイノガイストたちは箒と束の薦めで篠ノ之神社で短い時間ながらもダイノガイストと箒、束にとっては懐かしい時間、四将にとっては初めての一時を過ごした。母親の方は最後に「孫が出来たら写真ぐらいは送ってね。」と言われたときの二人の顔をきたら……

話はともあれ、ダイノガイストの手にはパワーストーンと思われる魔除けの石が握られていた。

『しっかし、これ本当に本物なんですかね?』

プテラガイストは疑わしく言う。

パワーストーンに似た宝石はこれまで何度か見たことがある。しかし、今回は箒の実家の神社のもの。偽物だとは認めたくない。そう思うと四将の顔色は悪くなる。

ダイノガイストは魔除けの石を上に掲げて復活の呪文を唱え始める。

『黄金の力守りし勇者よ、今こそ甦り我が前に現れ出でよ。』

『『『オオオオオオ!!』』』』

四将は息をのんで様子を見る。すると魔除けの石は、光りはじめダイノガイストの手から離れると一気に光に包まれ濃い緑のドリルタンクのようなものへとなる。

『チエーンジッ!ドリルシルバー!!』

ドリルタンクは変形をし始め、北欧のバイキングのような姿をした勇者へとなる。

『『『オオオオオオ!!』』』』

四将は驚くあまりに叫ぶ。

『自分は大地の騎士、ドリルシルバーであります!我が主よ、何なりと命令を!!』

ドリルシルバーは、ダイノガイストに向かって言う。ダイノガイストは椅子に座りながら黙っていたが代わりに束が命令をする。

「はいはい、じゃあ、ちよつと君のことを調べるからちよつとラボに来てね。」

『?りよ、了解したであります。』

ドリルシルバーは、不思議そうに束の後に着いて行く。

翌日 廃船

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

千秋は目の前の段ボール箱を見て黙っていた。差出人には「みんなのアイドル 束さん♡」と書かれている。朝、ポストを覗きに行こうとしたら玄関の前に置いてあったのだ。

「そして、中身が・・・・・・・・」

「パワーストーン・・・・・・・・」

「ラッキ〜・・・・・・・・って言ってもいいのかな〜？」

一同は箱の中に入っていたパワーストーンらしきものを見ながら言う。

「手紙にはこう書いてある。『愛しのちー君へ 元気になっているかな？ 束さんは毎日元気爆發さ！ 今日のはちー君の誕生日プレゼントにお守りとして、私の実家の神社の魔除けの石をプレゼントしま〜す！ 私のせいでいろいろ苦労しているようだけどもめげずに頑張つてね〜！ 追伸 これはちーちゃんには内緒だよ！ 束さんより』っていう内容だ。明らかに本物かどうか怪しいぜ。」

「でも、実家の魔除けの石をお守りにっていう訳なんだから別に本物なんじゃないの？」

「でも、万が一って言う事もあるな。試しに外で復活の呪文を唱えてみようぜ?」

弾の一言により、一同は外に出て、復活の呪文を唱える。

「黄金の力護りし勇者よ!今こそ甦り我が前に現れ出でよ——!!!」

千秋が呪文を唱えるとパワーストーンが光りはじめる。

「おお!」

「やっぱり本物!」

そう思った直後パワーストーンから大量の煙が発生する。

「わっ!?!な、何だこりゃ!?!」

「前が見えないよ!?!」

「虚さん大丈夫ですか!?!」

「私は大丈夫です。」

一同は咳き込みながらも目の前を見る。煙が晴れるとそこにはドリルシルバーが立っていた。

「おお!?!やっぱり本物だったのね!?!」

鈴は思わず喜ぶ。

『じ、自分は大地の騎士、ドリルシルバーであります!』

「ドリルシルバーか。ってことは、これでこっちの勇者は五人目か。」

「でもあと三人ってわけですし、喜ばしいことですね。」

『.....』

一同が喜んでいる中、ドリルシルバーは少し複雑そうな顔で廃船から見える崖の方を見る。

そこには東とダイノガイストがこっそりと様子を見ていた。

「作戦は成功！偽パワーストーンの演技でうまくドリ君をあちら側に紛れ込ませたよ！」

東は双眼鏡で観察しながら言う。

『奴らの元においておけば他の勇者が復活したとき、いつでも情報を送るように言いつけている。それにあのデータが正しいのなら試すにはあそこに送るしかないからな……』

ダイノガイストは腕を組みながら喜んでる鈴たちを眺めていた。

その頃、ワルターは……
「何故だあ!?何故、小娘たちの元に知らぬ間に勇者が増えているのだあ!?!」

かなり騒いでいた。

ダブル大ピンチ！

???

「ハッ、ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

暗い闇の中ワルターはただ一人必死に走っていた。まるで何かに追いかけているかのよう。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ……くっ!?」

ワルターは後ろを見ると冷や汗をかきながらさらに足を速めた。後ろからは明らかに別の足音が聞こえる。

「待って〜！ワルター様♡」

「くっ、来るな〜!!!」

ワルターは声の主から逃げようとした直後、地面が崩れ、穴の中へと落ちて行った。

「あっ、あっ……どっしええええええええ〜!!!!」

日本 ワルザック共和国 日本大使館のワルターの寝室

「うっ!？」

ワルターはベッドから落ちたところで目を覚ました。どうやらさっきの出来事は夢だったようだ。

「ゆ、夢か……」

「若ー!!如何なされました?」

うなされていた声が聞こえていたのかカーネルが早速部屋に入ってきた。

「案ずるでない。悪夢を見ていただけだ……」

「悪夢?」

「ああ、あのシヤランラ……いや、戦いに敗れる夢を見たのだ。」

それを聞くとカーネルは真面目な顔になった。

「……若君。その夢、もしや正夢になるやもしれませんぞ。」

「何!？」

ワルターは慌てて飛び起きる。

ガイスター基地 東のラボ

一方その頃、東のラボでは楯無が何らかの説明を受けていた。

「いいかな？君の手足を治す方法は現在のところ三択ある。」

東は、イメージ映像を見せながら言う。

「一つは、地道に細胞を活性化させながら直していく方法。まあ、時間はかかるけど完全に治せるよ。但し、細胞活性させる時間と調整、後リハビリの時間も取るとかなりの時間になっちゃうからね……」
「後の二択は？」

「もう一つは義手と義足を付ける。これなら君に合ったサイズを作ればいいだけだし、リハビリの時間もそれほどかからない。但し、接続する時間が限られていて一日の何回かは休まなくちゃいけないよ。」

「もう一つは？」

「これね……人間やめる覚悟はある？」

「……」

東の一言に楯無は黙った。

「最後の二択は全身のサイボーグ化。これは今残っている生身の部分も機械化するからあまり勧められないね。まあ、他の二択と比べると時間はかからないし、リハビリする必要もない。あると言えば定期的なメンテナンスだね。」

「……そのの方が一番手っ取り早いよね。」

「あつ、でも大事なところは生身のままにする予定だから心配ないよ。その辺は強化装甲で覆うようにするから。」

東は責めめの慰めのように言う。

「さあ、この中から選べるのは一つ。どれにする？」

「……」

楯無は、黙る。

ザゾリガン ブリツジ

「ジェットシルバー、スターシルバー、そして、ついこの間突然となく現れたドリルシルバー。実は彼らには恐るべき能力が隠されているのです。」

「何だと?」

ワルターはカーネルに着替えをしてもらいながらモニターに写されている映像を見る。隣では寝不足だったのか眠そうな顔をしながらジャンクフードを食べているオータムとエムがいる。

「分析の結果、彼らには合体し、パワーアップする機能があったのです。」

カーネルの言葉を聞いてワルターは思わず持っていたグラスを落とす。

「ただでさえ厄介だというのに、合体だ?!? 奴らは……奴ら自身は……その事実を知っているのか!?!」

とある高山上空

『こちら、ジェットシルバー。パワーストーンは見つかりません。』

街中

『スターシルバーだ。何の手掛かりもなしだぜ！』

地下鉄

『ドリルシルバーです！こちらダメであります！』

廃船 アドベンジャーの中

「うくん、やっぱり手掛かりもなしにパワーストーンを見つけるのは無理なのかしらね？」

アドベンジャーの中で報告を聞いた鈴はため息をつきながら言う。

「でも、ドリルシルバーがヒントを覚えていないなんてありなのかよ？」

「うーん、眠っている間に忘れちゃったんじゃないのかな？」

『それはないと思います。レジエンドラの勇者は封印されていたとはいえ、その記憶にはそれぞれの居場所を教えるための在処が刻み込まれているんです。おそらくは何らかのきっかけが必要なのでしょう。』

「でも、アドベンジャー。現に残りの勇者は三人なのよ？あと三人なのに在処を覚えていないなんておかしいじゃない？」

『我々レジエンドラの勇者には限られた記憶しか与えられていないのだ。』

『今はとりあえず地道に探すしか手はないでしょう。』

「地道にか……」

千秋は地図で調べたところを塗りつぶしながら言う。

「おーい！アイス買ってきたぞー！」

そこへ弾と虚が袋を持ってきながら入ってきた。

「アイス〜!!」

本音は早速飛びつく。

「ここら、みんなの分あるんだからそう急かさないの。」

虚は飛びつく本音を押さえながら言う。

「千秋、なんか手掛かりはあったか？」

「何にも。五人目の勇者が見つかったかと思っただらまた調べものをすることになるとはな……」

「まあ、勇者三人があちこちを調べているんだ。夏休みもまだまだ残っているんだし、焦る必要はねえよ。」

弾は千秋の肩を叩きながら言う。

ザゾリガン

「諜報部隊の報告によりますと彼らはまだ自分たちに合体機能があるという事に気づいていないようです。」

「……となると、奴らが合体に気づく前に叩いた方が良いな。」
ワルターはグラスを持ちながら言う。

「そう来るだろうと思ひまして本国で建造中の移動攻撃要塞『ワルツハイマーX』を手配いたしました。これまでのロボット兵器とは大きさも攻撃力も桁違いでございます。」

カーネルは、モニターで調整が行われているワルツハイマーXを見せる。

「なるほど。この巨大メカで奴らが合体に気づく前に倒そうというのか?」

「左様でございます。お気に召していただけましたか?」

「うむ、大きいことはいいことだ!」

ワルターは満足そうに言う。

「早速準備に取り掛かれ!」

「はっ、最終調整を急がせましょう。」

「はああ、こりゃあ、俺たちの出番はなさそうだな。」

「……………」

しかし、ワルターはこのとき気づいていなかった。
このとき、何者かがワルツハイマーの中へ潜入していたということ
を。

アドベンジャーの中

『大変だ！司令官は中枢部をやられた！きつと爆発してしまうよ！』

『みんな、早く下がれ！コン〇イ司令官が爆発するッ!!』

『ほああああああああつ!!』

「やっぱり、昔のアニメはツツコミどころがあつて面白いな。」

千秋はアイスを食べながら言う。

「でも、作画面は滅茶苦茶ね。居ないはずのキャラが突然現れたりするし。」

「でも、乗り物の変形する………ロマンじゃねえか？」

「現に目の前にいるけど。」

一同は揃いに揃って言う。そのとき、ニュース速報が流れる。

「何でこんな時期に？台風はこの間通り過ぎたばかりだけど・・・」
簪は不思議そうに言う。

「えっと何々・・・オホホツク海のサムチャツク島で・・・」
「パワーストーンと思われる石が発見された・・・ですか。」

「なあ〜んだ、つまらないニュース・・・」

「「「「じやっない!」「」」」」

七人は一斉にテレビの画面を見る。

「パワーストーンが!？」

『主よ!』

ドランも驚いているようだ。

「よおし、行くわよ!サムチャツク島に!」

ザゾリガン

「ハッ、ハハハハハハハハハハ・・・愚かな小娘たちよ、この偽のニュース速報を見ておるか？」

ワルターはモニターでうまく流されているニュース速報を見て笑う。

「若君、我々も準備を。」

「よし、我々もサムチャック島に全速前進!!」
ワルターの命令でザゾリガンは高速で移動を開始する。

サムチャック島

「うわああ……海がきれい。」

サムチャック島に到着した一回は海を眺めていた。

「それはそうと一体どこにあるんだ？パワーストーン？」

弾は辺りを見回しながら言う。

「……何か臭うな。」

「何よ失礼ね！昨日はちゃんと風呂に入ったわよ！」

「……」

千秋の一言に反応した鈴に一同は思わず黙った。

「ま、まあ、そんなことは置いときましょう！つて、何が臭うのよ？」

「よく考えて見ろよ？パワーストーンのことについて知っているのは俺たちと悪太、ガイスターだけなんだぜ？なのにどうしてニューズなんかに出るんだよ？」

「い、言われてみれば確かに……」

「でもさく、今更そんなこと言ってももう来ちゃったよオリム。」

「それにさっさと探しておけばいいことだし、そこまで深く考えなくても……」

「おい、何だよアレ？」

弾はゴールドスコープを覗きながら言う。

「え？」

全員が上空を見る。するとはるか彼方から巨大な移動砲台のような要塞が目の前に落ちて来た。

「な、何よアレ!？」

「お、大きすぎる!!」

「悪ただ! やっぱり俺たち騙されていたんだ!」

「布仏先輩たちは隠れて! ここは俺たち三人とドラんで。」

「ドラン!」

『心得た!』

鈴が言うと同時にアドベンジャーの中からドランが発進し、さらに後方の貨車からシルバーナイツが発進して行く。鈴たち三人もそれぞれ専用の専用機を展開した。

『チェーンジツ!!』

『チェンジ! ジェットシルバー!!』

『チェンジ! スターシルバー!!』

『チェンジツ! ドリルシルバー!!』

『チェーンジツ! アドベンジャー!!』

ドラン一同は変形し、謎の巨大移動砲台の前に立ちはだかる。

「出揃ったな、勇者たち。誠の主を忘れた愚か者共めが……今日こそ貴様たちを破壊してパワーストーンに戻してやるから覚悟しろ!!
ファイヤー!!!」

ワルターの命令と同時に巨大要塞ワルツハイマーは一斉に装備されている砲台から攻撃を開始した。

『『『『うおっ!?!』』』』

ドランたちは一斉に分散して攻撃を回避するが攻撃は雨の如く降り注いでいた。

『な、なんと火力だ!』

『うわああ!』

『きゃああ!』

千秋たちは一瞬で吹き飛ばされ、危ういところをアドベンジャーに

拾われる。

『大丈夫ですか？主たち。』

『ありがとう、アドベンジャー。』

『この攻撃では危険です。主たちは安全なところへ。』

『でも……』

「私はアドベンジャーの言う通りにした方がいいと思う。さっきの攻撃で一気にシールドエネルギーが削られたし、ISじゃおそらくあの攻撃は対処しきれない。」

「……簪の言う通りだな。鈴、俺たちは手を引こう。」

「ええ。」

そう言うと三人はアドベンジャーに運ばれて弾たちが隠れている場所に連れて行かれた。

「まずい！このままだと全員やられちまう！」

『ドラドラ、早く合体するのだく!!』

『心得た!』

ドランは、本音の命令に従う。

『ゴルゴ——ン!!』

すると落雷が落ち、大地が割れ始める。

「させるか！」

ワルツハイマーはバーニアで一旦飛行したかと思うとゴルゴンが出てくると思われるポイントに着陸し、塞いでしまった。

「「「「あああああ!!」「「「「」」」」」

『何と!』

一同は驚くが砲撃は再開され、止むを得ず回避行動をする。

『おのれ、ゴルドラに合体させぬつもりか!』

『うおおお!?!これでは近づくこともできない!!』

ドランたちにはできることは攻撃を防ぐことで精一杯だった。

防戦一方のドランの姿をワルツハイマーのブリッジからワルターは満足そうに見ていた。

「いいぞ！その調子だ！右舷の砲撃を10%増加！背後に回る敵に備えよ!！」

ワルターの命令に従ってコンピュータは戦闘パターンを切り替える。

『ぬおおおお!!!』

『『『うわあああああああ!!!』』』

『グワアアアア!!!』

ワルツハイマーの砲撃にドランたちは次々と吹き飛ばされて行く。

「ハツハハハハハハ!!!見たか、超でっかい兵器ワルツハイマーXの力を!!今回こそ勝利の女神は私に微笑んでくれるわ!」

ワルターは勝利を確信したように言う。

ところが

「私も愛するワルター様に微笑みを♡」

「そうか?ありがとう.....つて!こ、この声は!?!」

ワルターはブリッジの背後を見る。

いたのは完全防備の状態のパイロットスーツを着た人物だった。しかし、声は忘れたくても忘れられないある人物の声そのものだった。

「まつ、まさか!?!」

「ウッフッフッフ……シヤララララ……」

その者はヘルメットを外して、パイロットスーツを脱ぎ、その全貌を明らかにする。その姿にワルターは絶望した。

「お、おま、おま、お前は……」

目の前にいる者は、可憐な見た目のテレビに出てきそうな魔法少女のようなに見えるピンクのツインテールをした少女だった。

「シヤランラ・シースルー?!」

「お久しぶりです、ワルター様。」

「な、な、な……」

ワルターは思わず後ろに下がる。

「お会いしたかったですわ!!」

そんなワルターに対してシヤランラは近づいてくる。

「私の……未来の……旦那様♡!!!」

「くっ、くっ、来るなあああ!!!」

「ウフ、ワルター様♡!!」

シヤランラはワルターに抱きつく。

シヤランラに抱きしめられた瞬間、ワルターはまるで石になったの
かのように目の前が恐怖で染められていく。

「や……やめろおおおおお!!!」

ワルターの絶叫の叫びにワルツハイマーのコンピュータは「戦闘停止」と判断し、砲撃を中断した。

一方のダイノガイストは

「一夏〜！早く〜♡!!」

「・・・全く。」

箒とアメリカのユ○○○ー○○ルでデートをしていた。

「次はあつちのに乗ろう！」

「わかった、わかった。」

発射！グレートビッグキャノン！！

サムチャック島

『ど、どうしたんだ？』

突然、砲撃が止んだことにアドベンジャーは驚く。

『砲撃が止んだぞ。』

『何故だ？』

ドラんたちは戸惑う。

「とにかく絶好のチャンスだ！」

「ドラん、今のうちに！」

『心得た！ゴルゴ——ン！！』

ドラんは、急いでゴルゴンを呼び出すと合体シークエンスへと入る。

『………何故だ？ゴルドラんの合体を見てると………』

『ああ、心動くぜ………』

『自分たちは何かとても大事なことを忘れている気が………』

シルバーナイト一同は、合体の様子を見て何かが引っ掛かっているようだった。

『記憶だ………』

『『えっ？』』

『君たちに残った微かな記憶がああ光景（ゴルドラんの合体）に揺り動かされているんだ。』

『『？』』

三人は顔を合わせながら微妙によくわからない様子だった。そうしている間にもゴルドラんの合体は完了する。

『黄金合体、ゴルドラーン!!!』

ゴルドラんは、合体をし終わると先頭に立つ。

『さあ、今のうちに奴を叩くぞー！』

上空 ザゾリガン

「フッフッフ……愚かな小娘たちよ。パワーストーンは、このワルターワルザックが必ず手に入れる（裏声）。」

「……………お、おい、カーネル爺さん（汗）。」

ワルターの真似をしているカーネルに対してオータムは、何とも言えない顔で声をかける。

「ああ！似とらんかったかな？」

「……………プツ。（聞こえない声で）」

「い、いや……………うちの大将が乗ったデカ物要塞が攻撃を止めちまったぜ？」

オータムは、モニターに指を指しながら言う。

「なああに!？」

カーネルは思わず飛び上がる。

「どうしたことだ!?!若君に何か!?!ブリッジの映像を!」

「はっ!」

カーネルの命令で部下はモニターをアップする。

「んん!？」

よく見るとブリッジではシャランラに抱きつかれて硬直状態になっているワルターの姿があった。

「あ、あれは!？」

「誰だ、あのコスプレ女？」

「ま○マギ？プ○キュア？」

シヤランラを見てオータムとエムは訳が分からなかった。

「誇り高き貴族シースルー家のご息女、シヤランラ様ではないか!？」

「えっ!? コスプレじゃなくて本物のお嬢様かよ!？」

オータムは意外そうに言う。

「なぜ彼女があそこに!?! はっ! なるへそ! シヤランラ様は若君を愛するが故、全てを捨てて戦場にまで! なんと美しき愛の気高さよ」

カーネルは感動のあまり涙を流す。

「. いや、どう見てもあれは嫌がつているようにしか」

「ダメ、全然聞いていない。」

突っ込もうとしたオータムに対してエムは言う。

「カスタムギア隊、発進!!」

「ラジャー!」

カーネルの命令を受け、ザゾリガンのカタパルトからカスタムギアが次々と発進して行く。

「ワルター様の愛の時間をお守りするのだ!! これより戦闘の指揮は私が執る!」

「えっ? 優先順位そっちかよ!?!」

「アーメン。」

カスタムギアの大群はゴルドランたちに向かって行く。

サムチャック島 地上

『うオおおおおおオオ!!』

『『『おおおおオオ!!』』』

地上ではゴルドランを先頭に勇者たちがワルツハイマーへと向かって行っていた。そこへカスタムギア隊の銃撃が始まる。

『ぬっ!? 新手か!?!』

ゴルドランはスーパードン引き抜く。

『みんな、行くぞ!!』

『『『おう!』』』

ゴルドランたちは、カスタムギアの大群に挑んでいく。

一方ワルツハイマーのブリッジでは、すぐ目の前で戦闘が行われているにもかかわらず、シャランラはワルターにベツタリしていた。「ンハッ♡シャランラ、幸せ♡!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・と言うわけでこちらで働かせていただけないでしょうか？」

千冬は目の前に座っている蔵と蓮を見ながら言う。営業時間まで時間があるという事もあって店の中にいるのは三人だけだ。弾と蘭は「友達と約束があるから」という理由で出かけている。店の中は緊張感あふれる空気に包まれていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

蔵は黙ったまま腕を組む。

「やはり駄目でしようか？」

千冬は何とも言えない顔で聞く。すると蔵が変わって蓮が答える。

「いえ、別に千冬さんを雇わないとは言ってはいないわ。でも、千冬さん、今まで千秋君や一夏君のことで一生懸命でこういう関係の仕事はやったことがないでしょ？最近では料理のできない人ってそんなに珍しくはないけどいざやろうとすると大変な物なのよ。力任せにやってもダメ、かと言ってお客の機嫌を悪くするようなことをやってはいけない。それができる？」

「・・・・・・・・た、確かに私はこういう仕事に関しては全くやったことがありません。ですが、今の世の中です。私もいろいろ他に職に就こうとしていたのですが・・・・・・・・」

千冬はそこから先何も言えなくなる。

「確かに今の社会が貴方を拒絶しているのはわからないわけでもないわよ？でも、お客に対しての態度とかそういう心がけもなくちゃこういう仕事はやっていけないのよ？」

「は、はい。」

そこへようやく蔵が口を開いた。

「千冬嬢ちゃんよお。今、蓮が言ったようにこの仕事は客への気遣いが大事なんだあ。お前さんは今まで上の立場でやってきたようだがこつちでは同じようにはいかねええ。不味いと言われれば頭を下げ

て客に謝る、文句言われても言い返さずにひたすら謝る、お前さんに
そういう事が出来るかい？」

「それは………」

「一夏君がいなくなったり、なんかは知らねえが教え子が国に捕まっ
たりと何とも言えねえ気持ちなのはわかる。だが、今までの自分を
すぐに変えようって思ったって簡単に変えられるもんじゃねえ。そ
れでも、やるって言い張れるかい？」

「………」

千冬は決心した目つきで言い張る。 厳はその様子を見ると納得し
たようだった。

「そんじゃああ、今日から見習いとして入ってもらおう。やり方は蓮に
聞きなあ。何度も失敗するかもしれねえが覚悟を決めたからには意
地って奴を見せて見ろ。」

「はい！よろしくお願いします！」

千冬は椅子から立ち上がって厳に頭を下げる。

「蓮、まずは基本的な所から教えてやってくれ。それと弾と蘭がいる
ときはあの二人から見本を見せてやるように言ってくれ。」

「はい、わかりました。」

蓮は、そう言うのと千冬を厨房の奥へと連れて行った。

サムチャック島　ワルツハイマーのブリッジ

外でゴルドランたちがカスタムギア隊と激闘を繰り広げている中、ワルターはシャランラによって身動きが取れない事態に陥っていた。

「う、うわ、あ……………」

「思い出しますわ。ワルター様が私に愛の告白したあの日のことを……………」

過去　ワルザック共和国舞踏会

『そう、アレは夜の舞踏会の時でしたわね……………』

「シャラ？」

この日、舞踏会に参加していたシャランラは一人柱に寄りかかっているところを偶然シャランラにみられていた。

「まあ！なんて素敵なお方……………」

『そのとき、私は知りました。』

偶然、シャランラを見たワルターは彼女に蔓延の笑みを浮かべる。それを見たシャランラは思わず胸をときめかせた。

『あなたも私を愛してくれているって♡！だって、あなたは私に最高の笑顔を私に見せてくれたんですもの♡！』

「ハッハハハハ！ハッハハハハハハハハハ！！ブツハハハハハ！」

しかし、実際はシャランラの後ろにいた老紳士のズボンが何度もず

り下がるところを大爆笑していたに過ぎなかった。

現在

「シャランラ、超・は・っ・こ・い♡」

シャランラは一旦ワルターから手を離して思い出話を語る。その隙を見てワルターは少し少しと離れていく。

「それからでしたわね♡私とあなたの愛の日々が始まったのは……」
(そ、そう……あの日から私の地獄は始まったのだ……)

『ワルター様♡私の愛の料理ですわ♡』

『どっ、しええええええええええ!!?』

訳の分からない料理を出されて困惑するワルター。

『お誕生日のプレゼントに私を差し上げますわ♡!』

『どっしええええええええええ!!?』

プレゼントの箱から出てきたシャランラから逃げるワルター。

そして、とある記者会見で

『ワルター王子、ご結婚なさるとは本当ですか？』

『嘘だあ！私は……』

『このシヤランラ・シースルーと結婚するのでええ♡！』

『『『『おおう！！（取材陣一同）』』』』

勝手に結婚記者会見まで行われてしまう始末。

（こ、このままでは私は……この娘から逃げられない……
!?)

「どちらへ？ワルター様♡」

「どっしええええええええええ!!!」

既に逃げる方向にいたシヤランラを見てワルターはム○クの叫び
のような顔になる。

「私と♡あなたの♡シヤラララ♡」

「どっしええええええええええ!!!……ぬぬぬうう!!えい！」

「ああうん♡」

ワルターは、何とか我に返り、シヤランラを突き飛ばす。

「さらば！」

すぐさま彼女の前から逃げていく。

「ワルター様♡！待って♡！」

「ひえ〜!!」

ザゾリガン

「むっほっほっほっ………若いお二人は愛を語るのに忙しいようじゃ。」

カーネルはモニターで二人の様子を見ている。

「いや、どう見ても逃げているようにしか見えねえけど………」

「オータム、もうこれ以上ツツコンでも無理。」

「若、そこでぎゅくと………」

「申し上げます！カスタムギア軍団が………」

「何？」

サムチャック島 地上

カーネルたちがワルターの行動を見ているのに夢中になっている間、地上ではゴルドランたちがカスタムギアの軍団を殲滅し終えていた。

「よし、早くあの要塞を破壊するのよ！」

『心得た!!』

『はああああ!!』

『『うおおおお!!』』

五人の勇者はワルツハイマーに向かって勢いよく向かって行く。

ところがすぐ目の前にして何故かワルツハイマーの砲撃は再開し、五人は吹き飛ばされる。

吹き飛ばされたゴルドラんたちを追撃するべくワルツハイマーはキヤタピラを動かして向かって行く。

『しまった!奴が再び動き出した!』

「えっと、こうで、こうと……こんなこともあるのかとリモートコントロールをできるようにしておいてよかった……。」

カーネルは古臭いゲームコントローラーを動かしながら言う。

「おいおい、最初っからあるならなんでそうしなかったんだよ……
(――;)」

「グレートビッグキャノン!」

カーネルはコマンド入力をするるとワルツハイマーの中央部分の装甲が開き、巨大な砲台が出現、ゴルドラんたちに向けられ、磁気を帯び始める。それは艦内にいるワルターも感じた。

「!?グレートビッグキャノンの準備か?」

「私も。」

「いい!?!」

ワルターが後ろを振り向くと既にシャランラがすぐ後ろに迫っていた。

「私も♡心の準備は♡出来てましてよ♡!!」

「しつこ過ぎる!!!」

ワルターは急いで逃げる。

白銀合体！シルバリオン！！

サムチャック島

グレートビッグキャノンのよって地上から爆煙が上がる。

「やりました……かな？」

カーネルはグレートビッグキャノンの威力を目の前にして勝利したと思えた。

「みんな!!!」

「まさか、今の砲撃でみんな……」

鈴たちは心配そうに煙が上がっている方を見る。しばらくすると煙が薄れ、ジェットシルバー等シルバーナイトが飛行している姿が確認できた。

「シルバーナイト!!」

「よかった、三人は無事だったようだ。」

千秋は少しホッとしたように言うがゴールドランとアドベンジャーの姿が見当たらない。

『アドベンジャー!!』

『ゴールドラン!!』

地上ではボロボロになったゴールドランとアドベンジャーが倒れていた。

『か……体が……動かぬ……』

ゴールドランは何とか立ち上がろうとするがダメージが大きかったせいで動くことができない。アドベンジャーの方も同様だった。

そんな二人の前にワルツハイマーが迫りつつあった。

『おのれ!!』

『ゴールドランたちは我々が守る!!』

『しかし、アレをもう一発喰らったら……』

シルバーナイトは目の前に立ちはだかっているワルツハイマーを見る。

ザゾリガン

「くうう!! 撃ち損じたか! 第二波の準備を!」

カーネルは悔しそうにしながらも第二波の準備を指示する。

「エネルギー充電開始。」

「発射、90秒前。」

発射までのカウントが開始される。

ワルツハイマー 最上部

「ハア・・・ハア・・・へえ。戦況はこちらの方が有利なようだな。」

シャランラをどうにか振り切ったワルターは、最上部からゴルドランたちの様子を見る。

「勇者共め、後もう少して私の物に!」

「ワルター様もあと少して私のものに♡」

「ハツハハハ・・・じゃない!?!」

ワルターは思わず後ろを振り向く。しかし、後ろには誰もいなかった。

「しつこいぞ! シャランラ・・・やれやれ、気のせい・・・」

「じゃ、ないですわ♡!」

「なああ〜!?!」

シャランラは既にワルターのすぐ後ろにいた。シャランラはワルターの右腕に強引に羽ペンを持たせる。

ワルターはシャランラに取り押さえられながらも書くまいと抵抗する。

「さあ、ワルター様早く!!」

「ぬうう、やめろ〜!」

対するシャランラは力を込めてワルターの右手を動かそうとする。

「ここにサインをすれば〜」

「ここにサインをしてしまったら……」

そうしている間もワルツハイマーの砲撃は続き、シルバーナイツは追い詰められていった。

「どうしよう、かんちやくん……」

「どうするも何も私たちの手じゃ……」

「くそ〜!このままだともう一発喰らって全滅しちまう!」

『だ、ダメだあ……』

『か、勝ち目がねえ……』

『わ、我々にも力が……』

『『力があれば……』』

「……そうだ!」

シャランラに無我夢中に抵抗していたワルターの脳裏に衝撃が走る。

(今、勇者たちに敗北すれば……このピンチから脱することができ。しかし、あと一步のところまで勇者たちを我が僕にできるのに……)

ワルターの中に天秤が現れ、二つの概念がひしめき合う。

(人生を捨てて勇者を得るか、勇者を捨てて……人生をとるか……)

「ワルター様♡早くう♡」

「グレートビッグキャノン、発射二十秒前!!」

「につひ、ひっ、ひっ……全員まとめて吹き飛ばしてくれるわ。」

勝利を確信するカーネル。

「まあ、勇者がまとめて手に入るんだから別に問題ねえか。」

「織斑千秋も一緒に吹き飛ば。これでダイノガイストに集中できる。」

オータムもエムもその結果に不満はないようだった。

「わかった! シャランラ!!」

「ああ!?!」

ワルターは勢いよく自分の上に乗っていたシャランラを吹き飛ば

すや、婚姻届けを書き始める。

「ワルター様？」

さつきまで抵抗していたのが嘘のように書き始めたワルターにシヤランラは少し驚いていた。書き終えたのはワルターはシヤランラに笑顔を送る。

「きやは♡ワルター様♡シヤランラ、超感激♡……はああ？」

喜んだ持束の間、ワルターは婚姻届けを折り始めた。

「何をなさるんですの？」

婚姻届けで紙飛行機を作り終わるとワルターはワルツハイマーの上部の窓を開ける。

「このワルター・ワルザック、野望のために人生は捨てぬ！」

ワルターは、勢いよく紙飛行機を外に向かって飛ばす。

「小娘たちよ、受け取れ〜!!」

紙飛行機は、ヒラリと飛んでいき、鈴たちの目の前に落ちて来た。

「ん？何この紙飛行機？」

鈴は紙飛行機を手に取るとバラしてみる。

「これは……婚姻届のようですね。」

「でも、何か書いてある……」

よく見ると婚姻届けには日本語で『シルバーナイトは合体できるぞ!!』と大きな字で書いてあった。

「シルバーナイトは合体できる……ガンバルガーかよ（汗）」

弾は嘘くさそうに感じた。

「でも、もし本当なら逆転できるチャンスはこれしかない！」

「鈴さん、急いでシルバーナイトに！」

「オツケー！シルバーナイト!!」

鈴はシルバーナイトの方に向かって叫ぶ。

『主?』

「合体するのよ——!!」

『「?」』

鈴の言葉に三人は一瞬キョトンとなった。

『あ、主……』

『今なんと?』

『俺たちに合体しろだって?』

『そ、そうだ!』

『ええ!?』

ジェットシルバーの反応に二人は思わず驚く。

『思い出したぞ、我々シルバーナイトは合体することができたんだ!』

『!!そうだ!』

『思い出したぜ!』

三人は顔を合わせながら言う。

「よし、みんな急いで!」

『シルバーナイト!フオ——ム、アップ!!!』

シルバーナイト三人は掛け声と同時に上空へと飛ぶ。

それと同じ頃、ワルターはシャランラに追い詰められていた。

「いいんです、ワルター様。」

「ひいひい!!」

「形式なんて取りませんわ♡誓いのキスがあ・れ・ば♡」

「ひいひい!シルバーナイト!早く!!」

キスを求めるシャランラにワルターはもはや半泣き状態だった。

まず初めにジェットシルバーの頭部・両腕が収納され、下半身は背

部に向かって折り曲げられる。続いてスターシルバーは頭部・腕部を収納後、脚部が腕パーツへ、ドリルシルバーは、脚部へと変形し、三体が合体する。

『白銀合体！シルバーオン!!』

『『おお!!』』

ゴルドランとアドベンジャーは自分たちの目の前に着地したシルバーオンを見て歓喜する。

「す、すごい！」

「本当に合体しちゃったよ。」

「あの槍、『トマホークランスツ!!』とか言って投げそう……」

「簪さん、あれゲツオーロボじゃないぜ……」

「生かしてるぜ！シルバーナイト!!」

千秋たちはシルバーオンを見て感動していた。

『いや、合体を果たした私の名は……シルバーオン!!!』

シルバーオンは改めて自分の名を名乗る。

『シルバーオン……』

『君たちの失われた記憶とはこのことだったのか……』

ザゾリガン

「なあ、なんかやばいんじゃないやねえか？」

オータムはシルバーオンを見ながら言う。

「合体した……」

「何故だ！なぜ彼らは合体に気づいた!？」

向こうが知らないはずの合体をしたことによりカーネルも同じように動揺していた。

「ええ〜い!!グレードビッグキャノン、発射!!」

グレードビッグキャノンは磁気を帯び、再びゴルドランたちに向かって発射される。

「ああ!!またあのビーム砲が!？」

「シルバリオン逃げて!!」

『トライシールド!!』

シルバリオンは自分の持つシールドを前に突き出し、大出力のビーム砲であるにもかかわらず上空へと反射する。

『な、何と強力な盾だ・・・』

ゴルドランはその強固なシールドに感心する。一方で反射されたビーム砲はザゾリガンに向かって行つた。

「およよよよよよよお!?!なああんと!?!」

何とかか三人へに避けられたもののあまりの衝撃によりカーネルはコントローラーを手放してしまう。そのせいでワルツハイマーはコントローラーを失い、右斜めに大きく傾き、キスをしようと接近していたシャランラはワルターの元へ押されるように落ちていく。

「すりすりすりすり〜♡」

「わあああ!?!」

ワルターはやらせまいとシャランラを取り押さえるが傾きもあつてキスしてしまうのも時間の問題だった。

「い、急げ！勇者よ!!」

『今だ!!』

傾いてバランスを失ったワルツハイマーを攻撃しようとシルバリオンはバーニアを全開にして突撃して行く。その頃ザゾリガンでもカーネルが急いでコントローラーを拾おうとする。

「うう、おのれ勇者め!」

「じゃあ、今度は私がやる。」

エムはそう言うのとカーネルの代わりにコントローラーを拾う。

「おい、エム!お前じゃ……」

「くたばれ!!ファイヤー!!」

エムのコントロールでワルツハイマーの砲撃が再開するが何故かシルバリオンには一発も当たらない。

「あれ?これじゃなかったのか?」

エムは慌ててコントローラーの操作を変える。今度は謝ってザゾリガンに向かって砲撃を始める。

「回避しろ!!」

「ラジャー!」

「やっぱり、ゲームのコントローラーじゃどうにもならねえか……」

『トラ————イ、ランサー!!!』

シルバリオンはランサーを構えながら突っ込んでいく。

『うおおおおおおお!!!』

シルバリオンはワルツハイマーの装甲を貫き、上へ上へと切り裂いていく。

『トラ————イ、フィニッシュ!!!』

ワルツハイマーは下から徐々に爆発し始める。その頃ワルターはもう限界だった。

「も、もう、ダメだあ………ああ!?!」

数時間後 日本

「いや、次のヒントが出てきてよかったな。」

千秋は弾のゴルドスコープを見ながら言う。ゴルドスコープには「○」が表示されていた。

「今度は一体何を現しているのかな？数字の0？英語のO？」

「また調べることになりそうですね。」

「それにしても、悪太の奴、一体何で追いかけていたのかしら？」
鈴が不思議がるのも無理はなかった。

シルバリオンへの合体によって新しいパワーストーンの在処が表示された直後、ワルターがシャランラに追いかけていたところを偶然見たからだ。

「まあ、何はともあれ。明日からまた忙しくなるぜ？」

「そうね。」

「そうだ！今日はもう遅いし、みんな俺ん家で飯食ってけよ。」

「そうだな……まあ、千冬姉はまた遅くなるだろうから、ご馳走してもらってもいいな。」

「確かに今から帰ってつくりの面倒くさいしね。」

「わくわくごうはくくく！」

弾の意見に全員賛成し、鈴たちは五反田食堂に行く。

「ただいま………つてうわああ!?!」

「どうした弾………つてええ!?!」

弾と千秋は驚きの声を上げる。

「どうしたのよ………つて、へっ?」

鈴も思わず言葉を失った。それは、目の前にいる店員が原因だ。

「い、い、い………いらっしやいませ………」

「織斑先生!!」

「先生だく。」

簪と本音も思わず驚いていた。

「どうしたんだよ、千冬姉?そんな格好して?」

「きよ、今日からここで見習いすることになったんだあ。」

「へー。」

「ご、ご席へどうぞ………」

千冬は緊張のせいかギクシャクした様子で千秋たちを席へ座らせた。

「千冬姉もこれじゃあ、大変だなあ………」

ガイスター基地

『今、帰ったぞ。』

その頃、ダイノガイストは箒と一緒に土産の袋を持って帰ってきたところだった。

『あつ、ダイノガイスト様。お帰りなさいませ。』

『丁度、ドリルからの連絡が来たところですよ。』

『そうか。』

ダイノガイストはそう言うのと通信室へと行く。

『俺だ。』

『はっ！自分でありませう！ドリルシルバーであります!!』

『今日の事を報告しろ。』

『は、はい！今日は………』

ブレイブ・ポリス・プロジェクト

ガイスター基地

『……突然だが久しぶりにパワーストーン以外の宝を盗む。』
『『『はあつ?』』』』

ダイノガイストの一言に四将は思わず同じことを口から発した。ダイノガイストは椅子に腰を掛けたまま話を続ける。

『ここ最近パワーストーン集めで宝を奪うのを疎かにしていたせいで宇宙船を買うための資金が集まらんからな。とにかくトレーダーに高値で取引できるような宝の情報を集めろ。』

テレビを見ているサンダーガイスト以外の三人は取り囲むようにして話し始める。

『久しぶりの宝なのはいいけど何を盗めばいいんだ?』

『そんなこと聞かれたっていきなり考え付くわけねえだろ。プテラ、お前いつもみたいになにか考えろ!』

『ふざけたこといきなり言うんじゃねえ!俺だっけいきなりそんなもん考えつくわけねえだろうが!……とは言っても、何かしら盗まねえとな……って、サンダー。お前も話に混ぜられ!』

『お宝、あった。』

『『何?』』』

三人は、テレビを見る。そこには世界各国の首脳で行われている対ガイスター対策会議の生中継だった。話しているのはイギリスの代表者だ。

テレビ中継

「え〜つまり、貴国で計画している『ブレイブ・ポリス・プロジェクト』は今後のガイスターへの被害を最小限に抑えられる可能性があるかと?」

他国の代表陣が注目しながら聞く。

「はい、今まで申した通り『ブレイブ・ポリス・プロジェクト』は元々、ISの登場前に人間では対処できない事件現場での救助活動及び犯罪現場への急行、そして、最終的に国際社会における犯罪の撲滅を目的として我が国が計画されていたものです。プロジェクトは、十年前の研究所爆破の事故及びISの普及で一時凍結となりましたがガイスターの登場による被害とIS使用制限された現在、再注目され、計画が再始動が決まりました。」

会議室のパネルにいくつかの凶面が現れる。

「これが現在『ブレイブ・ポリス・プロジェクト』により、間もなくロールアウト予定のロボット警察官第一号『BP-119デューク』の凶面です。」

「「おお．．．．．」」

各国の代表は、驚きの表情で凶面を見る。

「しかし、コックピットが無いようですが操縦はどのように？」

「最新型AIを搭載したデュークは、人間の言語を完全に理解し、独自に行動します。よって、ISのように搭乗者が装着する必要はありません。」

「では、デュークは自分自身の意志で犯罪．．．つまり、ガイスターへの対処をする？それでは逆に利用されてしまうのでは？」

「いえ、その危険性はありません。デュークは飽くまでロボットですから。ISの登場から十年が経っておりますので現在最新の技術も導入し、対ガイスター用の追加パーツも間もなく完成します。この計画は元々日本含めた数国で進めていた共同のプロジェクトのため、デュークの運用次第によっては他国での計画も再開予定です。」

「．．．つまり、現段階でロールアウト予定の機体は他にあると？」
その質問に日本の代表が答える。

「我が国日本でもデュークとは別系統のロボット警察官の開発が再開されています。」

「して、デュークの初披露は？」

「デュークの最終調整は間もなく終了します。近いうちに運用テストを開始します。」

ガイスター基地

『……』

三人は黙ったままテレビを見る。

『あつ、お〇や丸始まる。』

サンダーガイストは、慌ててチャンネルを変えてアニメを見る。三人は、また困むようにして会話を始める。

『ロボット警察官か………売れんのか？』

『少なくともトレイダー相手なら売れるんじゃないかねえのか？ほら、消防車の時も最新型だったら買うって言ってたしよお。』

『だが、もう一つなんか添える物があればいいんだがな………取りあえずボスに進言してみるか。』

四将を代表してプテラガイストがダイノガイストの元へと行く。

廃船 アドベンジャーの中

「……………それって、本当にパワーストーンなの？簪。」

鈴は、アドベンジャーの中で学園で出された課題をやりながら聞く。千秋もその隣で課題をこなしていた。

「確か『スターモンド』だったよな？」

「うん。その昔、アベリアン森林地帯で発見された鉱石でその美しさからダイヤモンド以上の噂があるとされているんだって。」

簪が言うともニターにその宝石が映し出される。形状的には確かにパワーストーンに見える。

「うくん……………でも、それだけだとパワーストーンとは言い切れねえな……………あつ、千秋。ここ教えてくれ。」

弾も問題を解きながら疑問を投げかける。

「これを見てみて。」

簪が映像を切り替えさせるとそこには森の中にポツンとある円状のクレーターがあった。

「スターモンドが発見されたのはこの大昔の隕石が落ちた後なの。」

「へえ〜。」

「シルシルが出したヒントにそっくりだね〜。」

本音は弾からゴルドスコープを見て確認する。

「これは間違いないわね！」

「調べる価値は十分にあるな。」

『して、主たちよ。そのスターモンドは今どこに？』

「普通はアベリアの美術館で展示されているんだけど、昨日ぐらいのニュースや報道で英国の美術館に限定展示されているの。」

「イギリスと言えば……………そう言えばセシリアが実家に帰ってん

だっけ？」

千秋は思い出したのかのようにクラスメートの名前を言う。

「せっかくなんだし挨拶でもしに行きましょうよ（どこに住んでるかわからないけど）。そういう訳でアドベンジャー、イギリスに向かつてしゅっ……」

「その前に今日はここまでやってからですよ。」

鈴が言いかけたときに虚が言う。

「え〜！早くしないと……」

「パワーストーン集めも大事ですけど課題が溜まると大変なんですよ？幸い学園の方は教育カリキュラムの大幅な修正で夏休みが延びる可能性はありますけど。」

「だったら……」

「虚さんの言う通りだぜ！小学校の時も初めの頃の全部終わらせて後の期間は遊ぶってやってたじゃねえか？俺の学校は延びないんだから大事に時間を使おうぜ！」

弾は賛同するように言う。その姿を鈴と蘭は呆れた目で言う。

「完全に取り込まれたわね、アイツ。」

「まあ、アレにとってやっとな来た春ですから（今夏だけど）。」

「でも、お姉ちゃんもこういう風になるの殆どなかったんだよ〜？」

「さあ、早く課題を終わらせていきましょう。」

「」「はあ〜い。」「」

五人はそう言いながら課題を進める。

結局、一同がイギリスに向かったのは翌日だった。

ガイスター基地

『……………「ブレイブ・ポリス・プロジェクト」か。』

ダイノガイストは自室でプテラガイストの話聞いていた。

『は、はい。あの国にとっては十分な「宝」だと思います。それに希少ですから……………』

『ふん、我々にそんなちんけな玩具など……………まあ、確かに金にはなるかもしれんな。』

ダイノガイストは、そう言う一枚の写真を見せる。写真には例のスターモンドが載せられていた。

『これは？』

『パワーストーンの可能性もある。コイツとそのロボットを頂くとしよう。万が一パワーストーンでなくても金にはなる。』

そう笑うとダイノガイストはコウモリを呼び出す。

『インターネットにこの予告状を流すよう束に伝えろ。』

『キ、キイイ———!!』

コウモリは、部屋から出て行く。

『フッフッフ……………勇者共をパワーストーンに戻す前の準備運動と行くか。』

イギリス 『ブレイブ・ポリス・プロジェクト』 研究所 格納庫

「……………」

一人の少女が黙ってあるものを見上げていた。近日ロールアウト
予定のデュークだ。

「……………デューク。」

少女が懐かしそうにしていると同時に悲しそうな目でデュークを
見ていた。

「ここにおられたのですか？お嬢様。」

この場には相応しくないメイド服を着た女性が少女に声をかける。

「チエルシー……………」

「今日はもう遅い上に明日は式典セレモニーに関係者として出席です
よ。」

「……………」

「……………昔のことを気にしているのですか？」

チエルシーと呼ばれた女性は、デュークを見ながら言う。少女の顔
から一筋の涙がこぼれ落ちる。

「……………どうして、人というものは過去に消そうとしたものをまた
掘り出そうとしますの？あれだけ危険と言いながら彼の記憶まで消
したというのに。」

「……………当時のことは私にはわかりませんが、あれはお嬢様の責任
ではありません。それは、亡きご両親方も理解しているはずです。」

「……………いつその事デュークにはずつとここで眠っててほしかつ
たです。そうすれば危険なところで向かうことなかったの
に……………」

少女はそう言うとその場から離れていく。

「……………さようなら、デューク。」

十一年前 『ブレイブ・ポリス・プロジェクト』 研究所

「これはこれはオルコットさん！よく来てくださいました！」

十一年前の研究所において二人の夫婦に対して所長が挨拶をする。

「しかし、ご夫婦揃って来ていただくとは……いやはや何のおもてなしもできずに申し訳ございません！」

「いえ、私たちはそのようなことは気にしていませんので。所長、そう頭を下げずに……」

オルコット氏は、そう言うと言いかたといいながら頭を戻し、ある説明をし始める。

「現在、開発中の『デューク』ですが、AIを搭載してからいろいろコンテンツを取ろうとしているのですが……」

「このプロジェクトは元々すぐに実現するものではありません。そう焦らずとも……」

「いえ！このプロジェクトは、我が国以外の競争でもあるのですから！こちらにも負けるわけには……」

「あなた、セシリアは？」

夫人の方は気にするようにオルコット氏に聞く。

「ん？確かトイレに行くと一人で行ったが……」

「……ひつく、えっぐ、お父様……お母様……
どっ？」

一人の金髪の少女が涙目で研究所内を歩き回っていた。少女は涙を拭きながら、長い廊下を歩く。

今日は休みであるため、所員の数も少ないため、少女以外歩いている者の姿はなかった。少女は誰かいないかとあちこちの部屋を開けて見てみる。

「……は？」

一つの部屋に入っていると薄暗く誰もいない様子だった。しかし、何やら巨大な影があった。

「何？」

少女は奥に入ってよおく見てみる。それは組み立て中の五メートルはありそうなロボットだった。しかし、まだ骨組みとフェイスパーツしか付いていないためその姿はお化けに見えた。

「お、お化け!!!」

少女は一目散に逃げようとして転ぶ。転ぶと同時に履いていた靴が勢いよく飛んでしまい、操作パネルへと命中する。操作パネルは誤作動し、ロボットの目が光った。

「うわああくあくああ!!怖いよ!!お父様く!お母様く!」

少女は、また勢いよく泣き始めた。すると、ロボットの口が動いた。

『ワタシハ……「デューク」……』

「う、うう……えっ?」

少女はロボットのの方を見る。

『ワタシハ……「デューク」……』

「……デューク……ク?それがあなたの名前?」

『ワタシハ……「デューク」……』

「私はセシリア!セシリア・オルコット!」

『セ・シ・リ・ア・オ・ル・コ・ツ・ト……』

これがあの少女とデュークの出会いだった。